

Gakken Mo
まほう
魔法つかいプリキュア!
MAHO GIRLS PRECURE!
オフィシャルコンプリートブック
ワクワクもんだぁ!
製作スタッフ&出演キャスト直筆色紙
秘蔵イラスト&インタビュー満載
って言いました!?
キュアップ・ラパパ
伝説の魔法つかい(プリキュア)たちの活躍を見せて!



原画／宮本絵美子

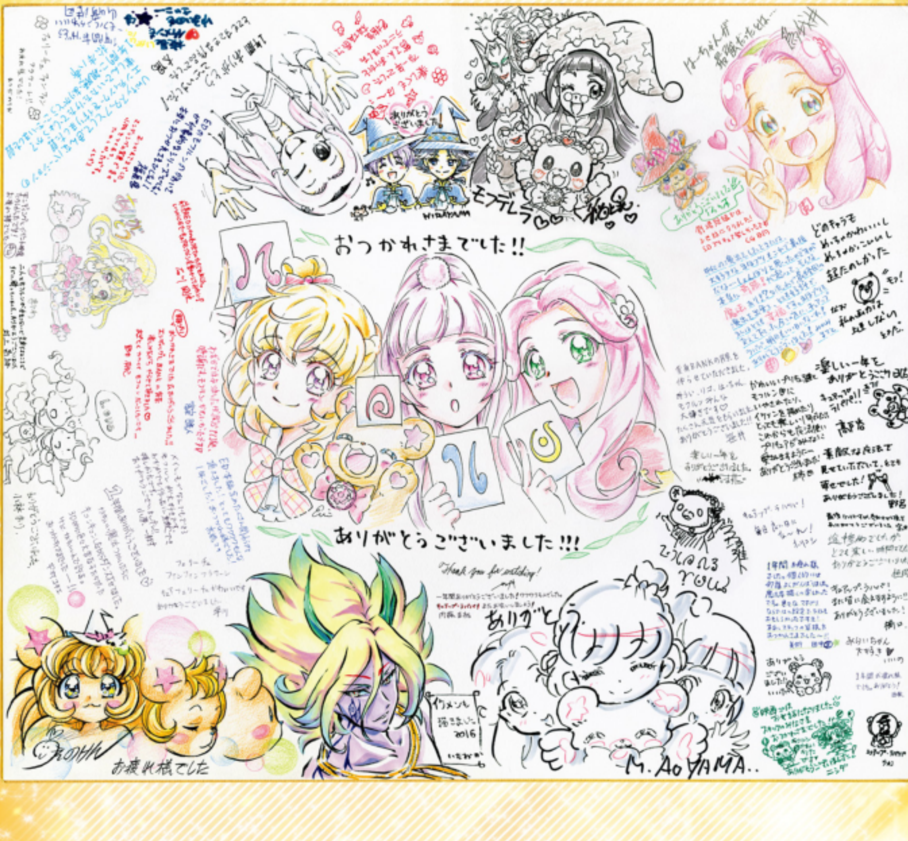
魔法つかいプリキュア！ オフィシャルコンプリートブック

MAHO GIRLS PRECURE!

Contents

スタッフ&キャストおつかれさま色紙

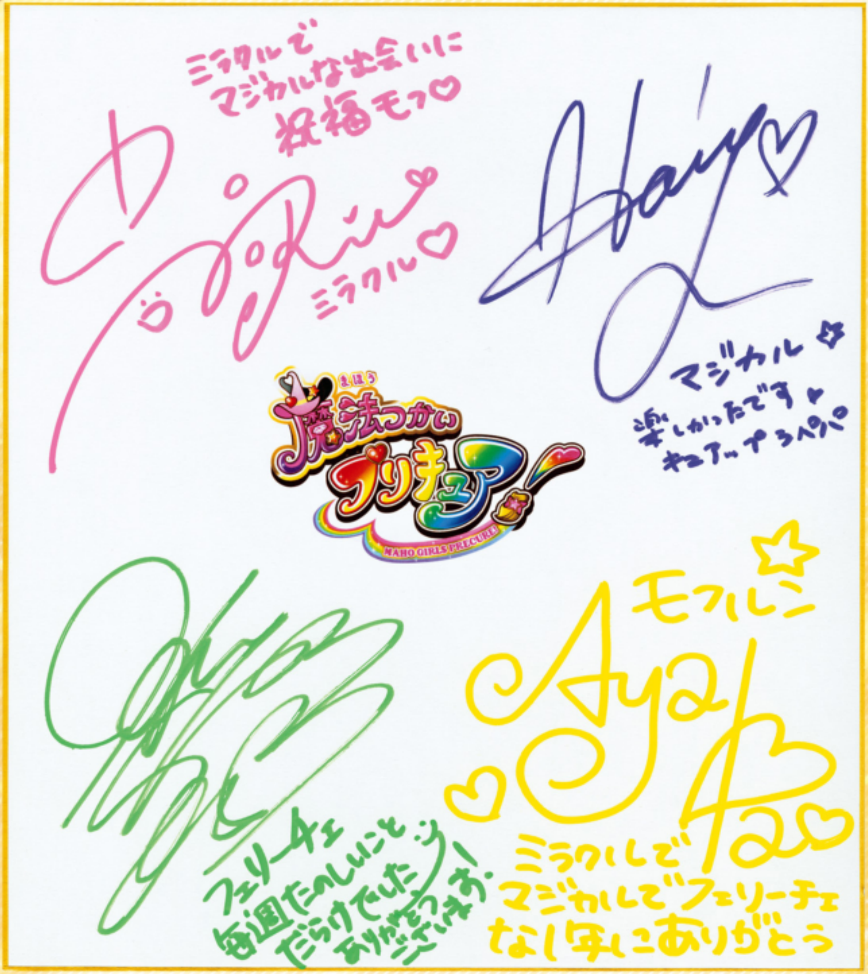
**放送終了を記念して、製作スタッフチームのみなさんと、
プリキュア&モフルンのキャストチームが
色紙に寄せ書きをしてくれました。
貴重なイラスト&コメントがいっぱい!**



製作スタッフチーム

◆キュアミラクル／朝日奈みらい　**高橋李依**

◆キュアマジカル／十六夜リコ　**堀江由衣**



◆キュアフェリーチェ／花海ことは　**早見沙織**

◆モフルン　**齋藤彩夏**

キャストチーム

Character Collection 1

キュアミラクル

Cure Miracle

朝日奈(あさひな)みらい



キュアミラクル

（声／高橋李依）

中学生の少女・朝日奈みらいが変身するプリキュア。魔法界から来たリコと出会い、ふたりの持つリンクルストーンが共鳴し、伝説の魔法つかい・プリキュアに変身した。４種類のリンクルストーンでコスチュームや魔法の特徴が異なる４つのスタイルに変身できる。変身の名乗りは「ふたりの奇跡、キュアミラクル！」。イメージカラーはピンクである。

アレキサンドライトスタイル

リンクルストーン・アレキサンドライトで変身する、伝説を超えた魔法つかいのスタイル。帽子は大きくなり、翼状のマントやフリルなどが付く。

ダイヤスタイル

リンクルストーン・ダイヤで最初に変身したときの基本スタイル。カチューシャに付いたピンクのハットは、ほかのスタイルでも同じ。

サファイアスタイル

リンクルストーン・サファイアで変身するスタイル。ブルーの色使いやセクシーなおへそ、編り髪など、大人びたイメージとなる。

ルビースタイル

リンクルストーン・ルビーで変身するスタイル。赤が基調となり、髪形はツインテール。ルビーの情熱的なイメージにチェンジした。


プリキュアたちのヒ☆ミ☆ツ教えちゃうよ♪
ふたりの奇跡、キュアミラクル！
◆ミラクルのリンクルステッキ
プリキュアに変身すると魔法の杖がリンクルステッキに変化。リンクルストーンを装着し、その石の特性を活かした魔法を出すことが可能。ミラクルのステッキの先端はハート。
トパーズスタイル
リンクルストーン・トパーズで変身するスタイル。基本カラーは黄色。キャンディーをモチーフにした髪飾りなど、ポップでキュートな印象。
変身前のみらいは次のページで会えるモフ♪



みらいの表情集

朝日奈みらい

（声／高橋李依）

津成木第一中学校に通う、元気で明るい女の子。不思議なことや面白いことが大好き。「ワクワクもんだぁ！」がログセである。成績優秀でスポーツも得意だが、数学だけは苦手。１年生の春休みに魔法界から来たリコと出会い、プリキュアに変身。ふたりで魔法界とナシマホウ界（人間界）を行き来しながら、魔法も学んでいる。

魔法学校の制服

魔法界ではトンガリ帽子が必携。フード付きマントは、校章にも描かれる猫耳が付いている。

みらいのGoods

◆魔法学校のトランク

魔法学校から支給されたカギ付きの専用トランク。

◆魔法の杖のような木の枝

49話でみらいが手にした木の枝。魔法の杖に似た枝は、みらいの思いが通じて本物になった。

中学校の制服

冬は男女共にブレザー。夏は半袖シャツにベストを着用。赤い大きなリボンも特徴だ。

◆夏の制服

◆夏の私服

みらいのFamily

◆15歳のかの子

祖母は昔、魔法つかいに会ったことがある。そのときにあげた「つなぎせんべい」は、魔法学校の校長の大好物。

◆思い出のおせんべい

◆祖母・結希かの子（声／太地琴恵）

◆母・朝日奈今日子（声／加藤有生子）

パワーストーンのショップを営む、頼りになる女性。

◆父・朝日奈大吉（声／青木強）

家電メーカー勤務。新商品をすぐに買うクセがある。

お子様みらい♥

回想に登場する、幼いころのみらい。服にはハートがあしらわれ、手にはいつもモフルン♪

◆小学生

◆5歳

◆4歳

みらいのファッション

みらいのオシャレアイテムはバルーンパンツとフリル&リボン♪



大学生になったみらい

49話でみらいは大学生になった。リコやはーちゃんと別れ、モフルンもぬいぐるみに戻ったせいか、さびしそうな表情を見せる場面もあった。

キュアマジカル／十六夜リコ

Cure Magical



キュアマジカル

（声／堀江由衣）

魔法学校の女子生徒・リコが変身するプリキュア。リンクルストーン・エメラルドを探しにナシマホウ界へ来たリコは、みらいと出会い、ふたりで伝説の魔法つかい・プリキュアに変身した。変身の名乗りは「ふたりの魔法、キュアマジカル！」。イメージカラーは紫だが、カラフルな４つのスタイルに変身する。


変身前のリコは次のページで会えるモフ♪
アレキサンドライトスタイル
リンクルストーン・アレキサンドライトで変身する、伝説を超えた魔法つかいのスタイル。ダイヤスタイルをベースに帽子や翼状のマントなどが変化する。
ダイヤスタイル
リンクルストーン・ダイヤで変身する基本スタイル。小物の色も寒色系で、全体的にクールな印象。
◆マジカルのリンクルステッキ
リンクルステッキ本体の形と役割はミラクルと同じ。ステッキの先端の飾りは星型。
サファイアスタイル
リンクルストーン・サファイアで変身するスタイル。おなかや肩の露出が増え、それでいてサファイアの高貴なイメージが伝わる。
トパーズスタイル
リンクルストーン・トパーズによる変身スタイル。ボリューミーなバルーンスカートやプリンの髪飾りなど、トリッキーな印象に。
ルビースタイル
リンクルストーン・ルビーによって変身するスタイル。真紅と黒のコントラストやガーターベルトで、小悪魔的なセクシーさが魅力。

ねらい通りだし！

リコの表情集







十六夜リコ

（声／堀江由衣）

魔法界にある魔法学校の生徒。リンクルストーンを探しに、はじめてナシマホウ界に来た日が十六夜だったことから、この姓を名乗っている。みらいの家に住み、中学のクラスも一緒。立派な魔法つかいになるための努力を惜しまないが、失敗しても「ねらい通りだし！」と認めたがらない意地っ張りなところもある。

私服

リコは基本的にはスカート派。右のワンピースは、魔法商店街の服屋・フランソワが魔法で仕立てたもの。



◆夏の私服



リコのGoods



◆魔法学校のトランク

生活必需品が詰め込まれていた専用トランク。

◆万年筆

姉からリコへの誕生日プレゼント。1万年もインクが切れない！

中学校の制服

魔法学校の教頭先生が用意してくれたトランクに、津成木第一中学校の制服が入っていた。



◆夏の制服

リコのFamily



◆父・リアン（声／小原雅人）

魔法界の考古学者。魔法学校の校長の依頼でナシマホウ界を調査する。

◆姉・リズ（声／名塚佳織）

魔法学校を首席で卒業して、今は教育実習生として教えている。

お子様リコ♥

回想のリコ。魔法が苦手なリコは、魔法が上手な姉のことが大好きだけど、ちょっと引け目を感じていた。



◆9歳

◆4歳ぐらい

◆3歳

◆0歳

リコのファッション

仮装用の服もスカートが基本。サンタ服のパンツ姿はリコには珍しい。



魔法学校の先生になったリコ

49話でみらいと再会したリコは、魔法学校の先生になっていた。立派な魔法つかいになるという目標を持ちつつ、素敵な大人に成長。

▶何年かぶりに再会した、みらいとリコ

◆母・リリア
(声／岩男潤子)
有名な料理研究家。リコの誕生日には毎年、魔法界の昔話を読み聞かせている。

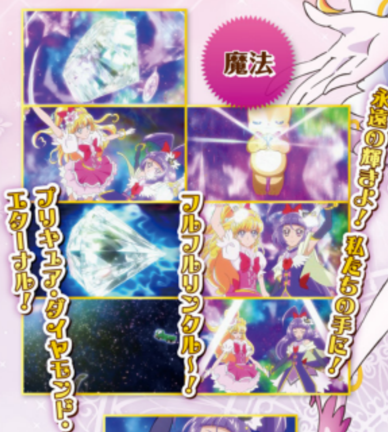
ション

Miracle & Magical

ダイヤスタイル

リンクルストーン・ダイヤをリンクルステッキにセットして変身。このスタイルの決めの魔法はダイヤに敵を閉じ込め、ふきとばす。







キュアップ・ラパパ！

変身＆魔法コレクション

ミラクルとマジカルはふたり一緒に変身し、決めの魔法も力を合わせることで可能になる。
リンクルストーンに導かれ、ふたりの絆で輝きを増す、華麗なる変身と魔法のコレクション！

ルビースタイル

セットするのはリンクルストーン・ルビー。変身の名乗りはダイヤと同じである。決めの魔法は赤いリボンで敵を包み込む。

変身

キュアップ・ラパパ！　ルビー！





ふたりの魔法、キュアマジカル！

魔法つかいプリキュア！



ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！



ふたりの奇跡、キュアミラクル！

魔法

ルビー！　紅（くれない）の情熱よ！　私たちの手に！



フルフルリンクル〜！



プリキュア・ルビー・パッショナーレ！

7つのリンクルストーンと魔法

ミラクルとマジカルはダイヤスタイルのとき、銀色の7つのリンクルストーンを用いて、単独で魔法を繰り出すことができる。フェリーチェはピンクトルマリンのみを使用する。



リンクル　ピンクトルマリン！

フェリーチェが銀色のリンクルストーンで放つ唯一の魔法。ピンクトルマリンをフラワーエコーワンドにセットし、花の形をした強力なバリアーで敵の攻撃をはじき返す。ミラクルはこの石の力を使って、8話でヨクバールの邪悪な部分をペガサスから引き離した。



リンクル　アクアマリン！

リンクルストーン・アクアマリンをリンクルステッキにセットし、吹雪を起こして敵を凍らせる。

サファイアスタイル

リンクルストーン・サファイアをセットして、青い幻想的な空間で繰り広げられる変身。決めの魔法は激しい水流のようなビーム状のもの。

変身







魔法



7つのリンクルストーンと魔法



「月の石」という意味のムーンストーンをセットして、満月型の巨大バリアーで敵の攻撃を防ぐことができる。



緑色の輝きを放つペリドットの力を使った魔法は、葉っぱの吹雪を巻き起こして敵を包んで、動きを止める。



魔法陣から強い光を放ち、敵の目をくらますことができる。リンクルストーン・タンザイナイトをセットする。

トパーズスタイル

リンクルストーン・トパーズで、スイーツアレンジのスタイルに変身。黄金の竜巻や稲妻を起こす決めの魔法はキラキラで大迫力！

変身



キュアアップ・ラパパ！トパーズ！

ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！





ふたりの奇跡、キュアミラクル！

ふたりの魔法、キュアマジカル！

魔法つかいプリキュア！

魔法



トパーズ！

金色(こんじき)の希望よ！私たちの手に！

フルフルリンクル～！



プリキュア・トパーズ・エスペランサ！







7つのリンクルストーンと魔法



リンクルガーネット！

ガーネットの力で大地を変化させる魔法。アクアマリンで凍った大地を腕の形に変化させ、敵をつかんだこともある。



リンクルアメジスト！

リンクルストーン・アメジストをセットして作りだした魔法陣を通って、自分の身体を瞬間移動させることができる。

キュアフェリーチェ Cure Felice / 花海(はなみ)ことは KOTOHA HANAMI

基本スタイル

フェリーチェの基本形。コスチュームには花と緑をふんだんにあしらって幸福（「Felice」はイタリア語で幸せの意）を感じさせる。



変身

変身はひとりで行う。魔法の言葉「キュアップ・ラパパ！」を唱えてスタート。緑が伸び、芽吹く。生命力に満ちた変身モードである。



フェリーチェのアイテム

◆フラワーエコーワンド

フェリーチェの専用の杖が変化したもので、魔法を放つ。



◆ことはの魔法の杖（リンクルスマホンタッチペン）

◆リンクルスマホン



リンクルスマホンのなかで、はーちゃんは生まれ育った。リンクルスマホンは、フェリーチェの変身アイテムにもなる。

アレキサンドライトスタイル

リンクルストーン・アレキサンドライトで変身したスタイル。髪もドレスもボリュームアップする。表情も凛として、女神のようである♪





あまねく生命(いのち)に祝福を！

キュアフェリーチェ

（声／早見沙織）

妖精の赤ちゃんがことはに成長し、変身するプリキュア。はーちゃんが、ミラクルとマジカルがピンチの際に、リンクルストーン・エメラルドで変身した。変身の名乗りは「あまねく生命に祝福を！　キュアフェリーチェ！」。4つの変身スタイルはない。マザー・ラパーパの力を受け継ぐプリキュア。イメージカラーはグリーンである。

魔法

エメラルド！

キュアアップ・アップ！

プリキュア・エメラルド・リンカネーション！

決めの魔法は、花びらと光の輪で敵を包み込む。美しいだけでなく、敵に破られたことがない、強力な力を持つ魔法なのだ。

変身前のことばは次のページで会えるセリフ♪



中学校の制服

妖精の姿のときにナイショで行っていた学校へ、みらいたちと同じ制服を着て通えたことはは、大喜び。

◆夏の制服



魔法学校の制服

みらいやリコたちと魔法学校へも行った。魔法は誰にも習わないのに、最初から上手！

はー♪



花海(はなみ)ことは

(声／早見沙織)

魔法学校の図書館にあった「リンクルスマホン」から生まれた妖精の赤ちゃんが成長した少女。赤ちゃんのときに話す言葉が「はー」だったので、"はーちゃん"と名付けられた。成長したあとは自ら「花海ことは」と名乗った。好奇心旺盛で努力家な性格は、みらいとリコの影響を受けている。大きくなってもログセは、やっぱり「はー♪」。

ことはのGoods



◆魔法学校のトランク
リコたちと同じタイプのトランクの色違いを持つ。

◆リュック
自分がいては迷惑がかかると家出したときに使用。

◆選挙応援のうちわ
生徒会長に立候補したリコとゆうとを応援した。

はーちゃんの成長日記

誕生

リンクルスマホンのなかから生まれ、最初に見たのがみらいたち。



バブバブ期

手のひらサイズの妖精に、"はーちゃん"と名付けて、ユニコーンミルクをあげた。



ヨチヨチ期

リンクルスマホンのなかで眠り、おなかがすくと外に出てくる。



トコトコ期

はーちゃんは食いしん坊で好奇心旺盛。たくさん食べて、遊んだ。



◆ミートボールはーちゃん

◆グレープはーちゃん

◆雷様はーちゃん

◆ユニコーンはーちゃん

キラキラ期

春に生まれたはーちゃんは、夏までに大きくなったのだ。



◆13歳ぐらい



マザー・ラパーパのようになったキュアフェリーチェ

ことはは、あまねく生命を見守るマザー・ラパーパの力を受け継いでいた。49話でキュアフェリーチェは新しいラパーパのような姿に変化した。

モフルン

（声／齋藤彩夏）

みらいが幼いころ、祖母からもらったぬいぐるみ。みらいとリコがプリキュアに変身したあと会話ができるようになった。リボンにリンクルストーンがセットされ、ふたりが変身するときには手をつなぐ。いい魔法の気配を感じると「甘いにおいがするモフ」と話す。



モフルンが入っているバッグ





甘いにおいがするモフ♥



◆かぼちゃ祭りのモフルン



◆水着



◆アイキャッチの魔法学校の制服

◆かわいそうな末娘(!?) モフデレラ



29話でシンデレラならぬ"モフデレラ"となりドレスアップ。さらに魔法つかいにも変身して、新アイテムの誕生にも貢献した。

◆ガラスの靴★



「モフデレラ」でいっぱい変身したモフ♥

◆ドレスアップ！ モフデレラ





◆ハロウィンの仮装"プリキュア"

◆冷凍みかんの馬車



お城の舞踏会に行けないモフデレラのためにリコが魔法で出したのが、冷凍みかんの馬車だった。







◆リコのバースデイパーティー



◆レインボーキャリッジ

◆モフデレラの魔法つかい



◆プレシャスブレス





教えて！ モフルンは本当に魔法を使ったの？

絵本の世界の不思議な出来事。解け始めた冷凍みかんの馬車がクリスタルに変化して、乗っていたみらい、リコ、はーちゃんはピンチを脱したのだった。大切な３人を助けたいというモフルンの強い思いが、奇跡の魔法になったのかもしれない……。



モフルンと13個めのリンクルストーンでパワーアップ！

魔法つかいプリキュア！ オーバー・ザ・レインボー！

プリキュアたちの思いの力で13個めのリンクルストーン・アレキサンドライトが31話で出現して、アレキサンドライトスタイルの「魔法つかいプリキュア！ オーバー・ザ・レインボー」に変身が可能になった。3人のプリキュアによる強力な魔法も誕生した。

馬車の魔法



めぐりあう奇跡よ！
つながる魔法よ！
育まれし幸せよ！
今、私たちの手に！
プリキュア・エクストリーム・レインボー！

キュアップ・ラパパ！
虹の彼方に！

変身





キュアップ・ラパパ！
アレキサンドライト！
魔法つかいプリキュア！
オーバー・ザ・レインボー！

最終魔法



とびっきりの奇跡を！
すべてを照らす魔法を！
そしてあたたかな幸せを！
今、私たちの手で！
プリキュア・エクストリーム・レインボー！
サンサン・ジュエリーレ！

キュアップ・ラパパ！
星々の果てまで！

精霊たちに認められ完成した魔法陣

49話の決戦で魔法はさらに強化された。12のリンクルストーンに宿るすべての精霊がプリキュアたちを「ミトメール！」と、レインボーキャリッジの魔法陣が完成。デウスマストの終わりなき混沌から、魔法界とナシマホウ界を救うことができた。



◆12個のリンクルストーンに宿る精霊たち

魔法界（まほうかい）

リコの故郷で、魔法を普通の能力として使っている異世界。人魚やペガサスも住んでいる。



◆カタツムリニア
魔法界とナシマホウ界を結ぶ魔法列車。

◆ヤドネムリン
魔法界の寝袋。モフルンサイズもある。



エミリー
（声／橋本ちなみ）
やさしいけれど怖がりや。高所も怖くて、魔法のほうきの実技が苦手。

◆エミリーの杖

ケイ
（声／吉岡麻耶）
忘れ物をすることが多く、メモを取る習慣で克服しようとしている。

◆ケイの杖

ジュン
（声／金田アキ）
勝気で男勝り。アーティスト志望で、ナシマホウ界で勉強したい。

◆ジュンの杖

魔法学校

寮生活をしながら魔法を学ぶ学校。男女のクラスは別で、リコたちは女子クラス。魔法界の中心にある巨大樹の上に立っている。

校長

（声／内田夕夜）

偉大な魔法つかいで、魔法界全体も見守っている。外見は若いが、魔法を使いすぎると老人に戻ってしまう。年齢不詳をはじめとした「校長の七不思議」がある、謎の多い人物。



◆校長先生の魔法書

◆ピーカンみかんの収穫時

◆和服

◆「モフデレラ」の王子様

◆正装

◆老人バージョン

人魚の里

魔法界の海の底にあり、ロレッタたちが住んでいる。



◆ロレッタ（声／川澄綾子）

数年後の人魚たち

補習で出会ったシシーたちも、50話では魔法学校で学んでいた。

◆シシー（声／大空直美）

◆ドロシー（声／小林桂子）

◆ナンシー（声／潘田美稀）

妖精の里

魔法界のどこかにある里。みらいたちはリンクルストーン・アメジストの力で里を訪れ、ここでマザー・ラパーパをはじめとする世界の真実を知った。



◆レジェンド女王の幼少期
（声／太田淑子）

◆現女王
（声／山本百合子）

◆マザー・ラパーパ
あまねく生命の母。かつて、すべての生命が住んでいた理想郷「花の海」の守護者であり、デウスマストと戦った。



魔法商店街の人々

◆服屋のフランソワ（声／織田圭祐〈3話—28話〉・石井真〈38話—50話〉）
商店街で一番人気の仕立て屋さん。

◆青果店のトッド（声／鈴木裕斗）

◆ほうき屋のグスタフ（声／木村雅史）

◆魔法の森
動物が集まる森。魔法界でも希少動物のペガサスが住んでいる。

◆フック（声／千田光男）

◆魔法の水晶（キャシー）
（声／新井里美）
校長が未来を占ったり、通信したりするために使用する道具。

◆教頭（声／鳳芳野）
学校の規律に厳しく、校長に意見することもある。

◆アイザック先生
（声／桜井敏治）
リコたちの補習を担当した。教師生活は自称40年。

◆補習のスタンプ&カード

ナシマホウ界（人間界）

みらいたちが住む世界のことを魔法界ではこう呼んでいる。魔法が「なし」でナシマホウ。

Character Collection 6

長瀬まゆみ（声／多田このみ）

みらいたちのクラスメイト。しっかり者。みらいたちの協力もあり、ひと目惚れした男子に告白するが、あえなく失恋してしまった。

勝木かな（声／菊地美香）

みらいたちのクラスメイト。リコたちがほうきで飛んでいる姿を何度も目撃しているが、誰も信じてくれないので、魔法つかいの存在を証明するための情報収集をしている。

津成木第一中学校

みらいが通う学校。2年生に進級したときにはリコが、夏休み明けにはことはが、留学生として入学した。

並木ゆうと（声／朝井彩加）

みらいたちのクラスメイト。成績トップの座をリコに奪われて、静かに闘志を燃やしている。

大野壮太（声／高橋孝治）

みらいたちのクラスメイトで幼なじみ。サッカー部の部長として部員をまとめられず悩む。



闇の魔法つかい ドクロクシー一味

世界を闇でおおいつくそうとする勢力。強力な魔力を秘めているリンクルストーン・エメラルドを狙って、プリキュアたちと激突する。



スパルダ

（声／小林ゆう）

ドクロクシーによってクモから生み出された。クモの糸を使った攻撃が得意。目的のためには手段を選ばない。自らをヘリコプターと合成し、ヨクバール化した。

バッティ

（声／遊佐浩二）

ドクロクシーによってコウモリから生み出された。紳士的にふるまうが、使命に忠実。怪物・ヨクバールを使う。

◆パワーアップバージョン

◆魔法学校でリスタート
ドクロクシーがいなくなり目的を見失ったバッティは、リコに勧められて魔法学校へ。

ヤモー

（声／高戸靖広）

ドクロクシーの側近で、意思を三幹部たちに伝える。元はヤモリ。ドクロクシーに忠実で、敗北後もドクロクシーのカカシに寄り添った。

◆怪物ヤモー
ドクロクシーの骨と虫カゴ、そして自身を合成してヨクバール化した。リンクルストーン・エメラルドとリンクルスマホンを奪おうとした。

◆『モフデレラ』の悪い魔法つかい

◆5頭身ヤモー
残されていたヤモーの尻尾から、デウスマストの眷属のラブーがよみがえらせた。



◆パワーアップバージョン

ガメッツ

（声／中田譲治）

闇の魔法によってカメから生み出された。魔法戦士。魔法界の最果て島に決戦の場を設定するなど、武士道精神に似た一面も持つ。



◆パワーアップバージョン



◆"いじわるな母"パワーアップバージョン

◆「モフデレラ」では仲よし(?)家族に

29話の絵本「モフデレラ」の世界では、ドクロクシー一味の幹部がいじわるな母と姉たちになっていた。

ドクロクシーの正体は……



クシィ

（声／中村悠一）

ドクロクシーの正体は魔法学校の校長の親友だったクシィの怨思。クシィの強い力を求める怨念が、命を落としてもなお、かりそめの骨に宿っていたのである。

◆ドクロクシーの本

かつてクシィが魔法を研究していた本は、闇の魔法書となった。



ドクロクシー

（声／秋元羊介）

謎のアジトで椅子に座り、最後まで動くことはなかった。ドクロのなかには、力を求め続ける怨念だけが存在していた。

◆パワーアップバージョン

◆さらにパワーアップ！マッチョドクロクシー

◆ドクロムシー

ドクロクシーの虫歯から生まれた怪物の姿。

終(お)わりなき混沌(こんとん) デウスマストとその眷属(けんぞく)

デウスマストはすべての生命を飲み込み、宇宙を混沌に還そうとしていた。その眷属（一族）は「ムホウ」という力を用いて、怪物・ドンヨクバールをプリキュアたちに差し向けてくる。

シャーキンス

（声／速水奨）

古武士のような性格。口うるさいため、ベニーギョによく煙たがられていた。42話で巨大化した。



ラブー

（声／龍田直樹）

ナシマホウ界の遺跡にあったランプから出現した。なまけ者であるが、高い戦闘能力を誇る。本気を出すと巨大化して凶悪になる。



オルーバ

（声／杉山紀彰）

人間を知るために人間の文明に興味を持つ。メガネをかけているのはその表れだ。冷徹で残忍。自分たちを封印したマザー・ラパーパに似た力を持つキュアフェリーチェに、関心を示す。



チクルン

（声／ニーコ）

妖精の里に住む妖精だが、さぼっているところをオルーバにつけこまれ手下になっていた。のちに改心している。





◆パワーアップバージョン

◆ベニーギョサンタ

ベニーギョ

(声／井上喜久子)

ギャルっぽい口調が特徴。攻撃に飽きて途中で戦いをやめたこともある。本気になると凶暴。47話で残りの不完全な眷属と一体化して、ナシマホウ界を破壊した。



◆パワーアップバージョン

デウスマスト

終わりなき混沌。かつて宇宙を混沌に還すため、マザー・ラパーパと壮絶な戦いを繰り広げたあと、太陽のなかに封印されていた。





◆オルーバの本来の姿

Character Collection 9

闇の魔法が造りし怪物
ヨクバール

ヨクバールは、ふたつの物を闇の魔法で合成して生み出される。ドクロクシー一味がプリキュアたちを苦しめた怪物で、力の源泉の違いによって「スーパー」「ハイパー」「モット」といったバリエーションがある。デウスマストの眷属たちは、ヨクバールよりはるかに凶悪な「ドンヨクバール」を出現させた。



※ここで紹介するヨクバールの名称は仮称です。


◆机絵筆
ドンヨクバール
（30話）
◆ぬいぐるみワーム
ドンヨクバール
（28話）
◆狼風船
ドンヨクバール
（27話）
◆麦わら鍾乳洞
スーパー
ヨクバール
（25話）
◆サッカーゴールコーン
ドンヨクバール
（32話）
◆ベンチゴミ箱
ドンヨクバール
（36話）
◆落ち葉噴水
ドンヨクバール
（33話）
◆鳩時計ベンチ
ドンヨクバール
（34話）
◆カゴつらら
ドンヨクバール
（37話）
◆うちわポスター
ドンヨクバール
（35話）
◆火石ハイパーヨクバール
（43話）
◆クラッカー帽子
ドンヨクバール
（40話）
◆アメお化け風船
ドンヨクバール
（39話）
◆パフェ網
ドンヨクバール
（38話）
◆小舟コンパス
ドンヨクバール
（41話）
◆クリスマスツリーポリバケツ
ドンヨクバール
（46話）
◆亀クモやもり
モットヨクバール
（45話）
◆時計ブランコ
ドンヨクバール
（45話）
◆看板サザエ
ハイパー
ヨクバール
（44話）

Illustration Gallery

各雑誌の描きおろしイラストや番宣ポスターなどの美麗イラストをチェック♪



●初出：魔法つかいプリキュア！ オフィシャルコンプリートブック表紙　原画／宮本絵美子

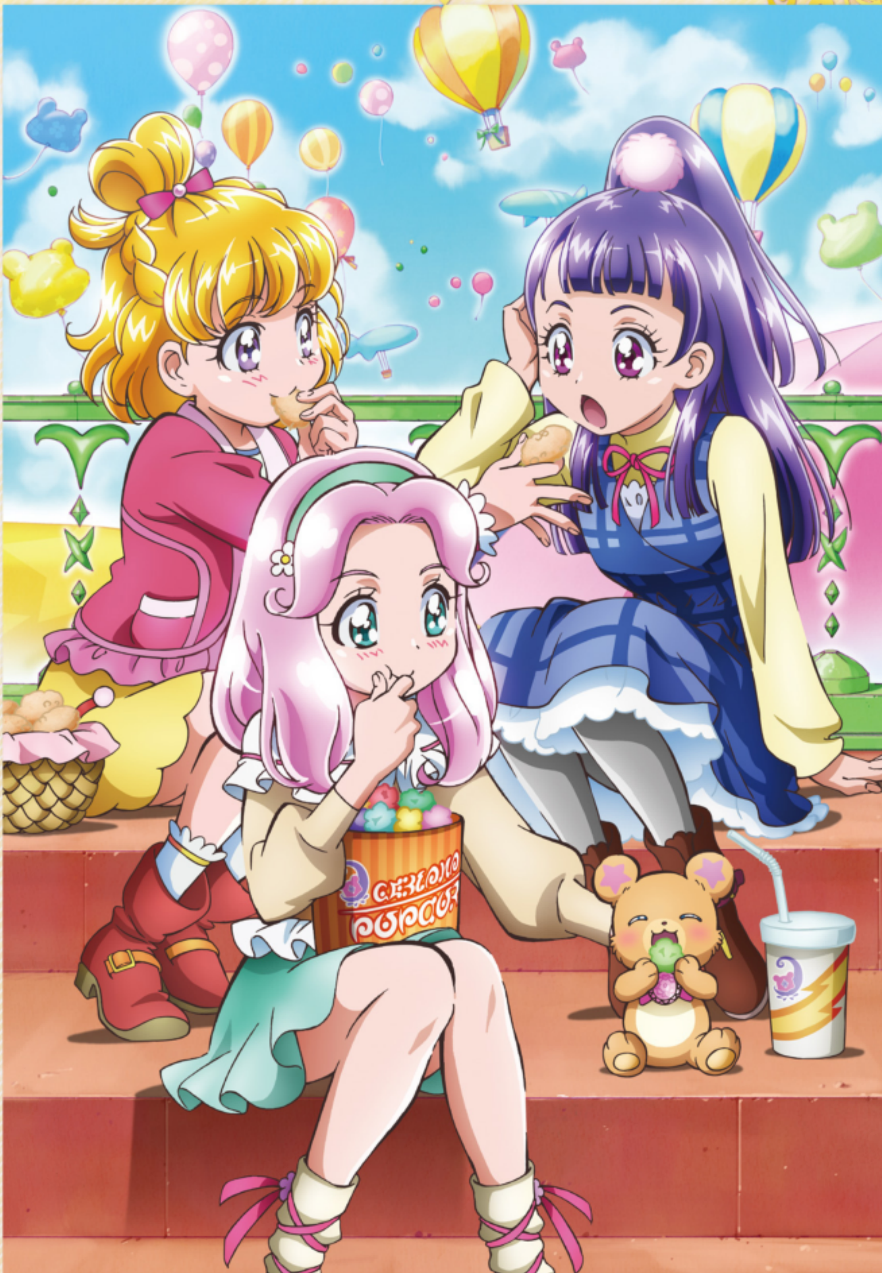


●初出：Febri Vol.36（一迅社刊）　原画／宮本絵美子





●初出：アニメディア2016年12月号　原画／上野ケン　仕上げ／竹澤聡　背景／西田渚



●初出：アニメージュ2016年10月号（徳間書店刊）　原画／上野ケン　仕上げ／竹澤聡　背景／西田渚



●『魔法つかいプリキュア！』提供バックイラスト



●『魔法つかいプリキュア！』提供バックイラスト



●『魔法つかいプリキュア！』提供バックイラスト



●『魔法つかいプリキュア！』提供バックイラスト



●『魔法つかいプリキュア！』番宣ポスターイラスト

Guide

キュアップ・ラパパ！ プリキュアたちの活躍をプレイバック！

みらい、リコ、モフルン、はーちゃん。魔法界とナシマホウ界に眠っていた12種類のリンクルストーンを目覚めさせ、その力を借りて闇の勢力と戦った4人の冒険を振り返ろう。

春休みは魔法界で補習授業モフ！



第1話 出会いはミラクルでマジカル！ 魔法のプリキュア誕生！

ふたりで伝説の魔法つかいプリキュアになっちゃった

朝日奈みらいは、春休みが明けると中学2年生になる女の子である。ある月夜、空を飛び回る何かが森に落ちるのを目撃したみらいが翌日そこを訪れると、探し物をする魔法つかい・リコと出会う。ふたりの前にリンクルストーン・エメラルドについて尋ねる謎の男・バッティが現れ、怪物・ヨクバールを生み出して襲ってきた。ピンチのふたりが「キュアップ・ラパパ！」という魔法の言葉を唱えると、ふたりのペンダントが輝き、みらいはキュアミラクル、リコはキュアマジカルという伝説の魔法つかい・プリキュアに変身。バッティとヨクバールを追い払うと、ぬいぐるみのモフルンが動いてしゃべりだした。リコは、みらいを魔法界へ連れて行くことにした。



▲みらいは、魔法つかいと出会えたことに大喜び。お腹をすかせていたリコにイチゴメロンパンをごちそうする



▲リコは、失敗を認めない強情さと、モフルンを落としたことをみらいに教えてあげるやさしさを備えた女の子



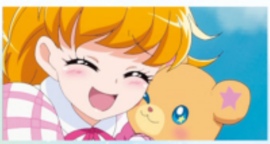


▶パンのお礼に「猫と会話する魔法」を披露するリコだが、猫は意味不明な言葉を発しただけ

猫（声／早見沙織）



▲みらいはキュアミラクル（左）、リコはキュアマジカルに変身する。闇の魔法つかい・ドクロクシーへの報告を急ぐバッティは退散した



▶プリキュアの魔法の力なのか、ぬいぐるみであるモフルンが動いて会話ができるようになった







▶ふたりが付けていた似たデザインのペンダントがリンクルストーン・ダイヤになった

第2話 ワクワクの魔法学校へ！ 校長先生はどこ!?

魔法の力を繰り出すリンクルステッキを手に入れた

魔法の実技が苦手なリコは、エメラルドを見つけた功績で補習を免除してもらおうと考えていた。エメラルドは手に入らなかったが、プリキュアになった功績による補習免除を期待する。しかし、信じてもらえず、校則違反で退学のピンチに。リコを救うため、みらいは校長に説明しようとする。みらいが魔法の杖の木付近で長い髪の男の人に話を聞いていると、木はみらいのために杖を実らせる。そこへバッティが襲来し、リコと共にみらいがプリキュアに変身。ふたりは、魔法の杖が姿を変えた「リンクルステッキ」が放つ魔法でヨクバールを撃退した。じつは校長だった長い髪の男の人は、リコを退学にはせず、みらいには魔法学校で勉強するようにと告げた。



▲リンクルステッキが放つ魔法「プリキュア・ダイヤモンド・エターナル」でヨクバールを撃退



▲教頭は、許可なく魔法界を出てナシマホウ界の人間を連れてきたリコは退学もあると警告



▲魔法の杖の木の前に立ったみらいが「リコを助けたい」と願うと、数百年ぶりに杖が実った

▼事情を知った校長から「授業を受けてもらいたい」と告げられて、ふたりは大喜び





第3話 魔法商店街でショッピング！目覚めるルビーの力！

みらいの魔法学校の制服とほうきをまとめて購入する

みらいは、春休み中に行われる魔法学校の補習に参加することになる。準備のためリコと一緒に魔法商店街を訪れたみらいは、学校の制服と魔法のほうきを購入。ほうきの調整をしてもらう間に、商店街を見て歩く。そこへ、闇の魔法つかい・ドクロクシーの手下のひとりであるスパルダが現れた。スパルダにみらいのリンクルストーン・ダイヤを奪われてしまい、ふたりはプリキュアに変身できない。しかし、大切な人たちが暮らしている街を破壊するスパルダを許せないというリコの気持ちが、リンクルストーン・ルビーを目覚めさせる。ルビースタイルに変身してヨクバールを追い払ったふたりは、調整を終えたおそろいのほうきを手にして微笑むのだった。


▶校長の口利きで魔法学校の制服はフランソワの店、魔法のほうきはグスタフの店で購入


▶リコが解凍に失敗した冷凍みかんは固かったが、青果店のトッドが解凍したみかんは柔らかく美味だった


◀ルビースタイルのふたりは「プリキュア・ルビー・パッショナーレ」で相手を撃退する


▶クモの力を備えているスパルダは、遠くから糸を伸ばしてみらいのペンダントを奪った

第4話 魔法の授業スタート！ふしぎなちょうちょを探せ！

魔法学校の図書館の本から小さな赤ちゃんが誕生した

リンクルストーンは、エメラルドを中心に12個ある。校長は、みらいとリコならば、それらとめぐり会えるかもしれないと期待した。補習の授業が始まり、参加した生徒は、ふたりと、ジュン、ケイ、エミリーの5人。授業は全6回で毎回テストに合格しないと進級できないが、みらいとリコはどちらかが合格すればOK。最初の授業は、折り紙の蝶を捕まえること。図書館で蝶を探すふたりは、ドクロクシーの3人目の手下・ガメッツに襲われる。逃げるふたりが導かれるようにして光る本を手にすると、別の空間へ飛ばされた。そこでヨクバールを撃退したふたりは、蝶を捕まえて補習のテストに合格。光る本に花が咲き、そこから赤ちゃんが生まれるのだった。






▲ガメッツとの戦闘中、何かに呼ばれたふたりが向かった先で不思議な本が光を放っていた

▼光る本は姿を変え、そこに咲いた一輪の花のなかから、小さな赤ちゃんが生まれた




▲ガメッツは、バッティとスパルダを退けた手強いプリキュアとの戦いを楽しみにしていた

第5話 氷の島ですれ違い!? 魔法がつなぐ友情！

魔法に失敗したリコがみらいに八つ当たり!?

赤ちゃんが生まれた本の名前は「リンクルスマホン」。リンクルストーンをはめると赤ちゃんの世話をする道具が現れ、赤ちゃんは、普段はそのなかで眠っている。それを持ってふたりは補習の授業へ向かう。2日目の課題は、極寒の氷の島で、魔法のやかんを沸かしてお茶をいれること。リコ以外はみらいが発案した〝おしくらまんじゅう〟で体と心を温めて魔法に成功し、全員合格。自力で合格したいリコはみらいとケンカになるが、雪洞(せつどう)で吹雪を避ける間に互いに反省して仲直りした。すると、空からリンクルストーン・アクアマリンが降りてくる。バッティのヨクバールを退けて互いの理解が深まったふたりは「みらい」「リコ」と名前で呼び合うことにする。


▶ふたりの心が強くつながって、バッティのヨクバールを退けた


▲▼みらいとリコは成長した赤ちゃんを「はーちゃん」と命名。互いを名前で呼び合った




▲▼リコは、みらいが課題をクリアすることで自分も合格するのが不満。ふたりはケンカをするが、仲直りしてヨクバールと戦った



第6話 特訓！魔法の杖！先生はリコのお姉ちゃん!?



▲ふたりは、ヨクバールがマジカルの放つ氷の魔法でひるんだすきにダイヤの力で退けた





◀リコは、幼いころから憧れているリズに、魔法の実技が苦手な姿を見られたくなかった



▲幼いリコに噴水を凍らせる魔法を披露したリズ。魔法が上手だった姉は、リコの憧れだった



▶リズの応援を受けるリコは、水をペンダントの形にして凍らせる高度な魔法を披露する

実姉で教育実習生のリズを避けてしまうリコの心は？

3日目の補習の授業は、魔法の杖の実技。腰痛のアイザック先生の代理で授業を担当するのは、リコの姉で教育実習生のリズ。みらいとジュンたち3人はリズの指導で上達するが、実技が苦手なリコは失敗の連続で授業を飛び出してしまう。リコは実家に伝わるペンダントをリズに託された幼い日からリズを目標にしてきたが、リズのように魔法がうまく使えないことがコンプレックスだった。そこへリズをリコと勘違いしたスパルダがヨクバールで襲撃。姉を大切に思う気持ちにリンクルストーン・アクアマリンが応えて、マジカルはリンクルステッキで氷の魔法を繰り出す。ヨクバールを撃退して補習の授業が再開し、リコは氷の魔法を使ってテストに合格した。

第7話 人魚の里の魔法！よみがえるサファイアの想い！

人魚の宝物の大きな貝からリンクルストーンが出現！

補習の授業4日目の舞台は、海底の人魚の里。5人は特別講師・人魚のロレッタから発声を学ぶ。マール貝に話しかけ、心が届いて貝が開けば合格だ。人魚の子どもたちと仲よくなったみらいとリコは、人魚の宝物の大きな貝を見せてもらう。そこへガメッツが襲来。モフルンを人魚の子どもたちに預けてしまい、プリキュアに変身できないふたりは大ピンチ。だが、決してあきらめないふたりの心がマール貝だけでなく里のみんなにも届いて光を放つ。光を受けた人魚の宝物の大きな貝も開き、リンクルストーン・サファイアが出現。それを使ってサファイアスタイルに変身したふたりは、新たな力でヨクバールを退治。マール貝が開いたので、補習テストにも合格した。



▲人魚の宝物の大きな貝からリンクルストーン・サファイアを発見



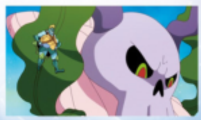
▲歌が得意な人魚のロレッタの授業は、魔法の言葉を唱えるのに欠かせない正しい発声法



▲5人にひとつずつ渡された今回の課題の貝。心が伝わると口を開き、中身が青白い光を放つ



▲新たな魔法は「プリキュア・サファイア・スマーティッシュ」



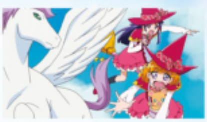
第8話 魔法のほうきでGO！ペガサス親子を救え！

ヨクバールに変えられた母ペガサスを助けよう！

5日目の補習の授業での課題は、魔法のほうきに乗ってペガサスと記念撮影をすること。しかし、まだうまくほうきに乗れないみらいは、彼女を助けようとしたリコと一緒に森へ墜落してしまう。ふたりは、そこで傷ついたペガサスの子どもと出会い、森の広場に咲く癒しの花を見つけて治療してあげた。それに感謝する母ペガサスの涙が癒しの花に触れると、リンクルストーン・ピンクトルマリンが生まれた。ところが、そこにスパルダが現れて、母ペガサスをヨクバールにしてしまう。その後、リンクルステッキのピンクトルマリンの魔法でミラクルが母ペガサスを救出して、ヨクバールを退けることに成功。ペガサス親子と記念撮影できたふたりはテストに合格した。



▲ピンクトルマリンの癒しの力で、母ペガサスをヨクバールから分離させることに成功



▲すばやい動きのペガサスとの記念撮影は、魔法のほうき初心者のみらいには難しい課題だ



▲▼ふたりはペガサスの親子と仲よしになるが、母ペガサスがヨクバールにされてしまった！



▼すっかりふたりと仲よくなったペガサス親子は、ふたりとの記念撮影に応えてくれた





第9話 さよなら魔法界!? みらいとリコの最終テスト！

補習メイト5人のチームとリズひとりが魔法で対決！

最終日の補習の授業は、生徒チームとリズの魔法対決。相手の帽子に付けた魔法の花を咲かせた者が勝ちとなり、花が咲いた者は失格となる。生徒全員が失格になれば、全員不合格。しかし、ひとりでもリズの花を咲かせることができれば全員合格だ。校長や教頭が見守るなか、対決開始。生徒は次々と脱落するが、ひとつのほうきに乗ったみらいとリコがすれ違いざまに放った魔法でリズの花が咲いて、全員合格に。バッティが合格証を使いヨクバールを生み出すものの、プリキュアの活躍で無事に合格証を取り戻すことができた。ナシマホウ界へ帰るみらいとモフルンを乗せたカタツムリニアへ、ほうきで追うリコが飛び乗る。みらいとリコは、これからも一緒だ。





◀▼相手の帽子の花を咲かせる勝負。みらいとリコの勝利で補習生徒は全員合格



▶春休みを共にしたみらいとリコは"ふたり一緒ならあきらめない"と心を通わせ戦う





◀▼魔法のほうきで追ってきたリコは、みらいに手を引かれてカタツムリニアのデッキへ飛び乗った

第10話 ただいま！ナシマホウ界！ってリコはどこ？

津成木駅に到着した途端リコとはーちゃんが迷子に

ナシマホウ界に着いたふたりは、津成木駅でリンクルストーン・トパーズを発見。だが、トパーズはカラスに奪われ、それを追って飛び出したはーちゃんとリコは、みらいとはぐれてしまう。親切な女の人に助けられたリコは、その人との会話から、みらいとの思い出の場所であるイチゴメロンパンの店を思い出す。そこへリコが駆けつけると、無事にみらいと再会できた。トパーズをくわえて逃げる猫を追うふたりをスパルダが襲撃。ふたりはヨクバールを退けるが、トパーズを見失った。みらいの家に案内されたリコは、親切な女の人がみらいの母だったことに驚く。だが、ふたりが初対面と思っているみらいもまた、リコと母が親しげに話す様子にビックリする。



▲プリキュアが戦っている間にトパーズはどこかへ行ってしまった





▶▼リコとはーちゃんはトパーズをくわえたカラスを追って迷子になり、親切な女の人に助けられた





▲迷子のリコを助けてくれた親切な女の人は、みらいの母だった

第11話 モフルンの初登校？ ワクワクのトパーズをゲットモフ！

みらいとリコにナイショでモフルンたちも学校へ♪

リコは、魔法学校の教頭の手配で津成木第一中学校への留学が決まって、みらいの家で暮らすことになった。魔法界へ帰る教頭は、「魔法を人に見られてはいけない」ときつく注意する。だがふたりは、登校するときにほうきに乗る姿や、学校についてきたモフルンやはーちゃんを同級生に見られて大慌てする。その一方でモフルンとはーちゃんは、学校で見つけたトパーズをガメッツから守るために大奮闘。その勇気に応えるトパーズの力によって、みらいとリコはトパーズスタイルに変身した。ヨクバールを退けると、はーちゃんが成長。「一緒にいたい」というはーちゃんたちの思いを知ったふたりは「見つからないように」と注意して、4人で学校に通うことにする。



▶2年に進級して初の始業式。リコは十六夜リコとして、みらいと同じクラスになった





◀授業中のふたりに代わってモフルンがトパーズを守るとトパーズはまばゆく輝やいた



▲トパーズスタイルに変身したふたりの魔法は「プリキュア・トパーズ・エスペランサ」

▼成長したはーちゃんは言葉を話せるようになって「ふたりと一緒がいいの」と訴えた



第12話 満天の星空とみらいの思い出

一途に前を見るだけでなく別の見方をすることも大切

魔法の実技以外は優等生だったリコは、ナシマホウ界の中学校でも勉強に意欲を見せる。ところが、魔法界とは星の呼び方が違うなど、リコの意気込みは空回り。何事も完璧を目指すリコはバレーボールに誘われても、ひとりで入門書を読んでやり方を覚えようとする。みらいはリコを夜の散歩に誘い、幼いころに夜の森で迷子になり〝満天の星の美しさで怖さを忘れた〟思い出を語る。それは「前を見るだけでなく、見方を変えてもいいのでは」というアドバイスだった。そこに現れたスパルダのヨクバールを撃退し、雲の上まで飛んでいくと、満天の星空からリンクルストーン・タンザナイトが降ってきた。翌日からリコは、素直な気持ちで同級生と話せるようになった。

▼巨大化して怖いヨクバールも、見方を変えれば、大きくて動きがにぶいところが弱点になる！





▲迷子になって不安だったみらいは、満天の星空を目にして満面の笑顔に♪



▲魔法界代表を自負するリコは、バレーボールのルールもプレイも完璧を目指す



▲リコは、壮太たちに自分のことを名前で呼ぶようにお願いする。同級生との距離が縮まった



▲きらめく星がリコの手のなかへ！　宇宙のリンクルストーン・タンザナイトだ

第13話 たのしいBBQ（バーベキュー）！幸せたくさんみ〜つけた！

便利な道具や魔法を使わないことで見えてくる幸せもある

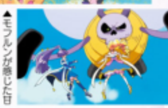
キャンプ場でバーベキューをすることになったみらいとリコ。まゆみ、壮太、ゆうとも一緒で、かなも家族で来ていた。校長からふたりへの手紙を託されたリズも合流。手紙には、近くにリンクルストーンがあると書かれている。リコは魔法で探すが、見つからない。バーベキューに戻ったリコは、支度が面倒な飯ごうで炊いたご飯や串焼き料理のおいしさに驚く。みらいはリコに、不便のなかから見えてくる幸せもあると教えた。バッティのヨクバールを退けたリコは、校長がリズに手紙を運ばせたのは「魔法を使わず探しなさい」というヒントだと気づく。リコが野原で光り輝く四つ葉のクローバーを見つけると、それはリンクルストーン・ペリドットになった。



▲自分たちで作って、みんなで食べるバーベキューの味は、格別♪



▲モフルンが感じた甘いにおいをたどるとハチの巣があり、ふたりはハチに追われた





▲広い野原で見つけた輝く四つ葉のクローバーがペリドットになる



▲リズは、星の杖を引き寄せた力を持つリコなら立派な魔法つかいになれると信じている

第14話 みんな花マル！テスト大作戦！

数学で〝赤点〟のみらいが再テストに本気でチャレンジ

中学校の数学のテストが返された。リコは花丸付きの満点だが、数学が苦手なみらいは落第点の〝赤点〟で、再テストを受けることになった。リコに勉強を教わるみらいの横で、はーちゃんは花丸を描く練習。人知れず努力するリコは「無駄な努力はない。頑張れば自分の力になる」と考えている。それを知ったみらいも、数学の勉強に本気で取り組んだ。リコの応援に応えようと頑張ったみらいが結果を待っていると、学校にガメッツが現れる。みらいとリコは、タンザナイトとペリドットの魔法を駆使してヨクバールを退治した。はーちゃんが合格したみらいへのご褒美として地面に花丸を描くと、そこへ月の光が舞い降りて、リンクルストーン・ムーンストーンが現れた。



▶ミラクルがタンザナイト、マジカルがペリドットの魔法でヨクバールの動きを封じて撃退



▲▼数学の再テストに臨むみらいが外を見るとリコが空に応援メッセージを描いてくれた



▼花から生まれたはーちゃんはリコの100点満点の答案に描かれた「花丸」がお気に入り





▲眠っていたムーンストーンが、地面に書かれた花丸から飛び出した





▶リンクルスマホンから出たごはんをいっぱい食べて、はーちゃんの不思議な力が爆発した

ハチャメチャ大混乱！はーちゃん七変化！ 第15話

魔法のごはんを食べすぎたはーちゃんが次々に変身！

ある朝、お腹をすかせたはーちゃんは、自分でリンクルスマホンから食事を出そうとする。ところが、すべてのリンクルストーンが代わる代わるセットされ、大量の食事が出現。満腹のはーちゃんは、リンクルストーンの力でしゃっくりをするたびにさまざまな姿に変身してしまう。家を飛び出したはーちゃんは多くの人に目撃され、学校中のウワサの的に。校外でスパルダに捕まるはーちゃんだったが、みらいとリコが救出。みらい、リコ、モフルンは、はーちゃんの話を聞いてあげられなかったことを反省し、はーちゃんもひとりで家を出たことをあやまった。中学校では、目撃した人たちが前向きな気持ちになったことから、はーちゃんは「幸せの妖精」と呼ばれた。









◀▼4人はそれぞれ深く反省。互いに謝罪をして仲直りすると、みんなすぐ笑顔に戻った





▲学校は、はーちゃんを目撃した生徒たちの「不思議な妖精」のウワサ話で持ちきりになった

▶▼はーちゃんが捕らわれたが、スパルダがヨクバールに命令している隙に、はーちゃんを救出！




久しぶりっ！補習メイトがやってきた！ 第16話

プリキュアの力が増してスパルダの撃退に成功！

魔法学校のジュン、ケイ、エミリーの3人が、服屋のフランソワに連れられナシマホウ界に遊びに来た。かなとまゆみを加えた一行は、ショッピングモールを訪れる。魔法学校の話やジュンの将来の夢を聞いたリコは、自分が置いていかれる不安を覚えた。リコをはげますみらいは、自分もなりたいものが決まっていないと打ち明ける。そこへドクロクシーから「リンクルスマホンを奪え」という新たな命令を受けたスパルダが現れた。スパルダに圧倒されるプリキュア。しかし、ふたりが仲間のために「闇の世界にさせない」と決意すると、リンクルスマホンとはーちゃんが輝く。力を増したふたりに敗れたスパルダは本来のクモの姿に戻り、バッティが回収した。





▲ケイとエミリーの間に、はーちゃんもピンボケ状態で写っている

▼▶はーちゃんとリンクルスマホンが輝くと、プリキュアの力が増す

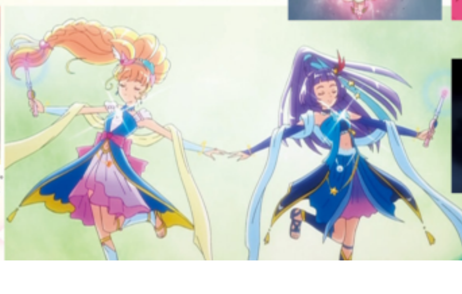




▲みらいの津成木第一中学校の仲間とリコの魔法学校の補習メイトは、すっかり仲よしに



▲みんなで見るから夕焼けはきれいなのかも。魔法界の友人は再会を約束して帰っていった




◀スパルダはヨクバールと合体してプリキュアに襲いかかる

第17話 水晶さんおしえて！ おばあちゃんの思い出の人

思い出の男の人は木の上の猫を助けた魔法つかい!?

みらいの祖母は、少女時代に不思議な男の人と出会った。その人を捜すために、みらいとリコは水晶を伴って街へ出た。公園のバラを写生するみらいの祖母に話を聞くふたりは、木から下りられない猫を発見。魔法のかかった服で姿を隠して猫を助けたふたりだが、ほうきで飛ぶ後ろ姿が突風でむき出しになる。それを見たみらいの祖母は、不思議な男の人もほうきに乗って猫を助けていたのを思い出す。みらいの祖母と別れたふたりは、蝶が姿を変えたリンクルストーン・ガーネットを発見したが、それをガメッツに奪われてしまう。同じころ魔法界では、校長が過去にナシマホウ界の少女にもらった思い出の味である〝つなぎせんべい〟をおいしそうに頬張っていた。



▲ふたりは姿を隠して猫を助けたが、男の人は堂々と魔法のほうきで飛行していた



▲老人Aはせんべい店の客。老人Bは絵画教室の先生。子どもは絵画教室への案内役




▲若き日のみらいの祖母は、猫を助けた男の人にせんべいを渡した




◀▲ヨクバールに襲われたはーちゃんの手からガーネットが落ちた

第18話 魔法界再び！ リンクルストーンを取り返せ！

魔法界の「最果て島」でガメッツと果たし合い！

ガーネットを奪ったガメッツから「最果て島で待つ」という果たし状が届いた。最果て島は、魔法界の奥地の空に浮かぶ島。魔法界へ急行したふたりは、人魚のロレッタとペガサス母子の協力で最果て島へたどり着いた。ふたりを待ち構えていたガメッツは、姿を変えて真の力を解放し、ふたりにはルビースタイルで戦うように要求する。ガメッツの力は強く、ルビースタイルのふたりもかなわない。しかし、倒れたふたりの前にはーちゃんが立ちはだかると、リンクルスマホンが輝いて、闇のフィールドが消滅。プリキュアの強さを信じるはーちゃんの思いを受け止めたふたりはガメッツを打ち破り、潔く負けを認めたガメッツはガーネットを返してカメに戻った。


▲誇り高き魔法戦士ガメッツは、ふたりと全力で戦うことを希望


▲▼ふたりは、人魚が使う「くじら船」とペガサス親子の協力で最果て島へ向かった


▶はーちゃんの不思議な力で、島をとりまく闇が消えていった



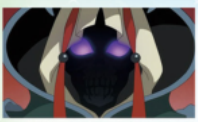



▼ガメッツを撃退し、無事ガーネットを取り戻すことができた

第19話 探検＆冒険！ 魔法のとびらのナゾ！

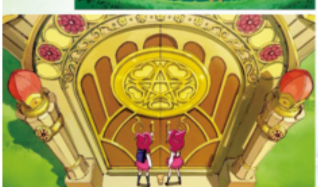
姿を消した校長を捜して学校を支える大木の頂上へ

ふたりは、はーちゃんとリンクルスマホンの秘密を校長に教えてもらうため、魔法学校を訪れた。だが校長は「しばらく留守にする」というメッセージを残し、水晶と共に姿をくらましていた。誰も校長の居場所を知らない。リズは、学校を支える大木の頂上に校長だけが開けられる「開かずの扉」があると話す。頂上へ向かったふたりの前にバッティが現れ、彼とスパルダとガメッツの3つの杖と彼自身が合体し、変身。だが、再びはーちゃんとリンクルスマホンの力で闇のフィールドが消滅し、バッティの撃退に成功。開かずの扉から出現したリンクルストーン・アメジストの導きで扉の鍵が開く。ふたりは、そこに校長がいることを期待して扉の先へ進むことにした。


▲ドクロクシーはバッティに新たな力を与え、リンクルスマホンとエメラルドの奪取を厳命





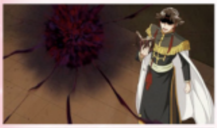



◀▲開かずの扉から飛び出したアメジストをふたりが手に入れると、解錠されて扉が開くようになった

闇の魔法つかいドクロクシーと対決モフ！



▼校長の友・クシィは魔法学校の優秀な教師だったが、強い力を求めて禁忌を犯し、命を落とした









▲◀正装に変身して戦う校長だが、ドクロクシーの強烈な一撃で老人の姿に戻る



▲11個のリンクルストーンの円陣の中心にエメラルドが蘇った

第20話 ドタバタでヤバスギ！魔法界に生まれたエメラルド！

蘇ったエメラルドの力でドクロクシーが完全体へ！

開かずの扉は、頭に浮かべた人や物の場所へ通じている。校長を思い浮かべたふたりが扉を開けると、そこはドクロクシーの本拠地。校長は、ひとりでドクロクシーたちに立ち向かっていたのだ。ドクロクシーの正体は、若き日の校長の友・クシィ。クシィは、禁断の闇の魔法を蘇らせて命を落とした。その欲望がかりそめの体に残ったのがドクロクシーだ。激しい戦いで力を使い果たした校長は本来の老人の姿となり、ふたりはドクロクシーにリンクルスマホンを奪われる。ふたりの「はーちゃんを返して」という思いに応え、ついにエメラルドが復活。だがドクロクシーは、エメラルドの力を得たリンクルスマホンを彼の本に取り込むことで、完全体へと変貌した。



◀エメラルドの輝きを彼の「本」に取り込む形で体内へ吸収したドクロクシーが完全体に

▶開かずの扉はドクロクシーの本拠地に通じていて、校長とバッティの戦いの最中だった



▲ドクロクシーがふたりから奪った「はーちゃんが眠るリンクルスマホン」にエメラルドが入る



第21話 STOP！闇の魔法！プリキュアvs（たい）ドクロクシー！

ドクロクシーを撃退するもはーちゃんが行方不明に

ドクロクシーが完全体になり、魔法界だけでなく、ナシマホウ界も暗黒の闇に覆われた。しかし、決してあきらめないふたりに11個のリンクルストーンが応え、ふたりは再び変身。ヤモーさえ吸収して力を増したドクロクシーは、校長も吸収しようとする。「力を合わせる」の意味をはき違えているドクロクシーに怒るふたりが猛反撃すると、光の玉となったはーちゃんがドクロクシーの口から飛び出した。ドクロクシーはふたりに撃破されたが、怨念だけが残った。成長したはーちゃんは、やさしく包み込んでドクロクシーの怨念を晴らすと、若き日の姿を取り戻したクシィの魂と共に消えていった。遠くに甘いにおいを感じたモフルンは「きっとまた会える」と言うのだった。



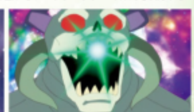




▲ふたりの望みは「はーちゃんを返して！」。はーちゃんも、ふたりの強い思いにドクロクシーの体内で反応する

▶ドクロクシーから出てきたリンクルスマホン。そこから飛び出したはーちゃんが成長！











▲魔法界に平和は戻ったが、はーちゃんは姿を消した。今のふたりは、モフルンの言葉を信じるしかなかった





▲ドクロクシーの怨念が晴れたクシィの魂とはーちゃんが、まばゆい光と共に消えていく

第22話 芽生える新たな伝説！キュアフェリーチェ誕生！

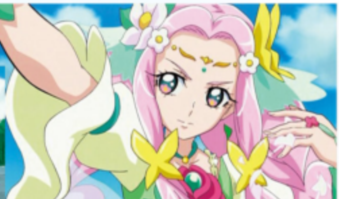
水晶の予言的中！〝強き命〟はーちゃんが戻ってくる

中学校のテストで学年1位になってもうれしそうではないリコ。明るくふるまうも悩みを隠している様子のみらい。ふたりとも行方不明のはーちゃんのことが気がかりなのだ。みらいはもう一度はーちゃんを捜そうと提案するが、リコは「魔法界へ帰って魔法を勉強し、もっと力をつけてエメラルドやはーちゃんを捜す」と考えていた。その魔法界では、水晶が「災いが蘇り、強き命が舞い戻る」というお告げを校長に伝えた。みらいとリコの前に、謎の怪物によって再生したヤモーが現れる。ふたりが苦戦していると、リンクルスマホンを持つ少女が現れて、キュアフェリーチェに変身。スーパーヨクバールをいともたやすく退けた彼女の正体は、成長したはーちゃんだった。


▲手を尽くして捜索したふたりだが、はーちゃんは一向に見つからない



▲謎の怪物によって蘇ったヤモー。彼は、ドクロクシーの骨でスーパーヨクバールを生む



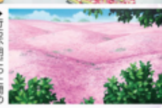
▲フェリーチェの魔法は「プリキュア・エメラルド・リンカネーション」

第23話 これからもよろしく！おかえり、はーちゃん！

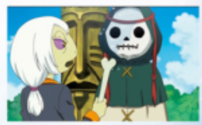
エメラルドを見つけたのでリコたちは魔法界へ帰る？

はーちゃんがなぜプリキュアに変身できて、今までどこにいたのかは、はーちゃん自身もわからない。はーちゃんが覚えているのは、花が海のように広がる光景だ。リコはエメラルドを探すためにナシマホウ界にいることを許されたので、はーちゃんがエメラルドと共に現れた以上、ふたり一緒に魔法界へ帰らなくてはならないかもしれない。3人は校長に相談すべくみらいの家へ向かうが、ほうきに不慣れなはーちゃんが迷子になる。スーパーヨクバールに襲われたはーちゃんは、駆けつけたふたりとの連携プレーで撃退に成功。報告を受けた校長は、みんながこれからも一緒にいることを許す。また、みらいの母も、はーちゃんがみらいの家に同居することを許してくれた。


▲スーパーヨクバールの攻撃をバリアーで跳ね返すフェリーチェ



▶行方不明だった間のはーちゃんが覚えていることは海のように広がる、あたり一面の花


▲はーちゃんは花海ことはとして、みらいの家で暮らし始める


▲ヤモーは、手作りのかかしをドクロクシーに見立て、崇拝の念を込めて話しかけている

第24話 ワクワクリフォーム！はーちゃんのお部屋づくり！

自分の力で努力をするとミルクがおいしく飲める♪

すっかり成長したことはと同じベッドで寝るのは窮屈なので、屋根裏部屋をことは専用の部屋にすることになった。ことはは高度な魔法を使って部屋の荷物を片付け、家具を生み出していく。さらにことはは、魔法を使ってみらいの父を手伝おうとするが、リコに注意され、自分の力でできる手伝いをする。手伝いを終えて飲んだミルクのおいしさに驚くことはに、リコは「努力をしたからおいしい」と教える。3人は部屋飾りの買い物の最中にヤモーに襲われるが、力を合わせてスーパーヨクバールを撃退した。きれいに飾りつけられた部屋が完成して、ことはは、みんなへの感謝の気持ちとして、魔法を使わずに手作りしたビーズのネックレスをプレゼントした。


▲リコはことはに「魔法を見せてはダメ」と注意して、不便でも努力する大切さを教える


▲ことはは、魔法を使ってあっという間に荷物を片付け、ベッドやテーブルなどの家具を出現させた



▲▼モフルンのアイデアの「手作りビーズ細工」で飾り付けをして〝ワクワクもん〟の部屋になった


▼ふたりがヨクバールの動きを止めてフェリーチェが魔法を放つ連携作戦で、3人は危なげなく勝利




▲みらいの祖母は「海の家のかき氷がおいしい」と教えてくれた


海の家店主

▶リコに魔法を注意されたことはは、誰にも見られないように魔法を使い、海を楽しくしようとする




▲家電メーカーに勤める機械好きのみらいの父が、海の家の故障した製氷機を修理することになった



第25話 夏だ！海だ！大はしゃぎ！かき氷が食べた〜いっ！

みらいとリコのためにおいしい氷を手に入れたい

みらい一家が海辺へやってきた。リコとことは、まゆみとかなも一緒だ。海の家の「イチゴメロン味のかき氷」がおいしいと評判だが、製氷機が故障して休業中。みらいの父が修理を買って出たので、みらいたちは遊んで待つことにする。だが、みんなを楽しませたいことはが使う魔法で浜辺は大騒ぎ。あと始末で魔法を使いすぎたみらいとリコはヘトヘトだ。ふたりに早くかき氷を食べさせたいことはは、「おいしい氷がある」というヤモーのウソにだまされて洞窟に誘い込まれた。駆けつけたふたりと一緒にスーパーヨクバールを退けたことはは、迷惑をかけたことを猛反省。でも、直ったばかりの製氷機に魔法をかけて氷を作り、みんなでおいしいかき氷を味わった。




▲みらいたちがビーチバレーやスイカ割りを楽しむ浜辺が、ことはの魔法で大騒動になる








◀修理を終えた製氷機にことはが魔法をかけて氷が完成した。絶品イチゴメロン味のかき氷を満喫♪




▶男に変身したヤモーにだまされたことはが洞窟に閉じ込められ、スーパーヨクバールに襲われた

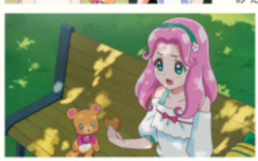
第26話 想いはみんな一緒！はーちゃんのクッキー

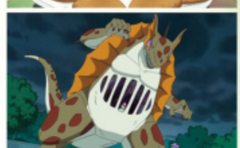
ふたりを巻き込みたくないやさしいことはが家出する

「ヤモーに狙われる自分が一緒にいると、みらいとリコまで危険な目に遭わせてしまう」。そう考えたことはは、手作りクッキーをふたりにごちそうすると、何も言わずに家を出た。元気をなくして魔法が使えないことはがクッキーを食べると、塩と砂糖を間違えていたことに気づく。ふたりがそれを指摘しなかったことが、ことはをさらに悲しませた。そこに現れたヤモーが自分自身をスーパーヨクバールに変え、ことはを体内に捕らえてしまう。駆けつけたみらいとリコに「クッキーを作ってくれたはーちゃんの気持ちがうれしくて、本当においしかった」と言われて、ことはの心は晴れやかになった。ヤモーを撃退した3人は、みんなで手をつないで家路に着くのだった。


▶みらいの家を出ることにしたことはは、手作りクッキーをみらいやリコたちに振る舞った




▲ことははクッキーに入れる砂糖と塩を間違えていた。だが、ふたりは「はーちゃんの気持ちがうれしかった」のだ


▲ヨクバールになったヤモー。腹の檻のなかにことはが閉じ込められたが、無事脱出してヤモーを撃退した



第1話～第21話「Dokkin◇魔法つかいプリキュア！」



映像では元気いっぱいの明るい楽曲にのせて、みらいやリコたちの日常が楽しげに描かれていく。敵をまったく描かない点や、みらいとリコの絆がわかるシーンがたくさん盛り込まれている点にも注目してみよう。6話から9話までは『映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法！』の映像が使用された。



第22話～第50話「Dokkin◇魔法つかいプリキュア！ Part2」



キュアフェリーチェの登場と共に、前期の歌詞をストーリー展開に合わせて変更。曲のアレンジも変わっている。はーちゃんがことはに成長していく様子が盛り込まれ、27話からはヨクバールがドンヨクバールに変更されている。36話から42話までは『映画 魔法つかいプリキュア！奇跡の変身！キュアモフルン！』の映像が使われた。



ED 第1話～第21話「CURE UP↑RA♡PA☆PA!～ほほえみになる魔法～」

「プリキュア」のTVシリーズにおいて、初めてプリキュア役の声優が主題歌を担当したEDテーマ。前期のEDは、キュアミラクル役の高橋李依、キュアマジカル役の堀江由衣が歌唱。近年のシリーズ同様に映像はフルCGで製作されており、ミラクルとマジカル、そしてモフルンが華麗に踊る様子を堪能することができる。



ED 第22話～第50話「魔法アラ・ドーモ!」

後期EDは、キュアフェリーチェ役の早見沙織も歌唱に参加した。およそ1か月ごとに、その季節に合わせて映像の一部が変更されるというバラエティーに富んだ作りとなった。38話と39話は「映画 キュアミラクルとモフルンの魔法レッスン！」のEDダンス映像を使用し、歌も渡辺麻友の「正しい魔法の使い方」に変更された。





●エンディングテーマ振り付け／原ななえ

●主題歌(OP)「Dokkin◇魔法つかいプリキュア!」
作詞／森雪之丞　作曲／奥村愛子　編曲／宮崎誠　歌唱／北川理恵

●主題歌(OP)「Dokkin◇魔法つかいプリキュア! Part2」
作詞／森雪之丞　作曲／奥村愛子　編曲／中村博　歌唱／北川理恵

●主題歌(ED)「CURE UP↑RA♡PA☆PA!～ほほえみになる魔法～」
作詞／六ツ見純代　作曲／多田彰文　編曲／中村博
歌唱／キュアミラクル(声／高橋李依)・キュアマジカル(声／堀江由衣)

●主題歌(ED)「魔法アラ・ドーモ!」
作詞／只野菜摘　作曲／前山田健一　編曲／サイトウヨシヒロ
歌唱／キュアミラクル(声／高橋李依)・キュアマジカル(声／堀江由衣)・
キュアフェリーチェ(声／早見沙織)

第27話 Let'sエンジョイ！ 魔法学校の夏休み！

魔法でも闇の魔法でもない「ムホウ」を使う新たな敵

みらいたちは夏休みを利用して魔法学校を訪れた。生徒が夏祭りの準備中で、補習メイト3人とも再会した。屋上庭園へ向かったみらいが魔法の杖が実る木の前で校長と話をしていると、ヤモーを蘇らせたラブーが現れる。魔法とは違う力「ムホウ」を使う終わりなき混沌・デウスマストの眷属で、降臨するデウスマストを迎えるため邪魔者を一掃するという。みらいと校長は結界に閉じ込められて、ラブーが生み出したドンヨクバールに襲われる。そこへエメラルドの力で結界を破ったリコとことはが駆けつけた。「みんなで一緒にいるためなら、できることはなんでもする」と言うみらい。校長も奮闘してドンヨクバールが撃退されると、ラブーは去っていった。





◀▲みらいは「何があっても、みんなと一緒にいると決めた」と校長に決意を語った





▲▶ムホウの力を使うラブーによって屋上庭園が結界に包まれる。脱出はできず、侵入もできない



◀ことはが持つエメラルドの輝きが手をつなぐリコも包み込み、ラブーの結界をくぐり抜ける



▼ドクロクシーとの戦いで力を使い果たした校長だが、できることをする決意を固めた







▲補習メイトは、ことはが「赤ちゃんのはーちゃんから成長した」と力説しても信じない

第28話 魔法界の夏祭り！ 花火よ、たかくあがれ！

花火を打ち上げる不思議な花を探す補習メイトが大奮闘

魔法学校の夏祭りのメインイベントは、生徒が打ち上げる花火。今回それを担当するのは、なんと補習メイトの3人だ。だが、花火を出す「ドンドン花」がしおれている。アイザック先生によれば、代わりとなる「パチパチ花」があるそうだ。そこで、みらいとことはたちは花を探しに行き、リコたちは図書館で花を調べる。洞窟で見つけたのは、色違いの3種類の花。リコたちはみらいたちを信じて準備を進め、みらいとことはリコたちの信頼に応えるべく、選んだ花を持ち帰る。ラブーのドンヨクバールに襲われるみらいたちだが、リコも急行して撃退に成功。みらい、リコ、ことはも加わった6人で打ち上げる花火は、魔法界のみんなの心をワクワクさせた。





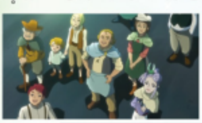


▲魔法学校の花壇で栽培していたドンドン花がしおれた。太陽の光がないと小さくなるのだが、晴天なのに育たないのは不思議なことだ

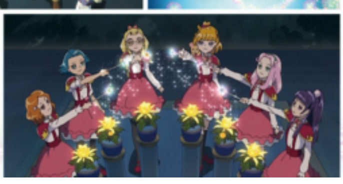




◀▲リコが発見した古い本は、花の図に色がなく、見分け方の説明が汚れて解読不能。みらいとはーちゃんは勘で選んだ







▲▶魔法商店街の人々だけではなく、人魚やペガサスも6人が打ち上げる花火を楽しんだ



▼花火を打ち上げたいみんなと気持ちが通じ合っている3人は絶対に負けない！





▲ペラペラ花は丸一日中おしゃべりになり、スヤスヤ花は丸一日中眠ってしまうという魔法の効果がある



第29話 新たな魔法の物語！主役はモフデレラ!?





▲継母（ガメッツ）と意地悪なふたりの姉（スパルダとバッティ）は、モフデレラを家に残してお城の舞踏会へ



▲魔法界の「シンデレラ」の主人公は、誰かの夢を叶えて笑顔にする魔法つかい



▶3人は、自分たちが童話の役柄を演じていることを自覚している



▶姉に意地悪をされたモフデレラが、留守番を命じられる

魔法界の『シンデレラ』とプリキュアのワクワクコラボ

ある夜、夢の世界で「シンデレラ」の物語が展開する。魔法つかいのリコ、ネズミのみらいとことはが、モフデレラとなったモフルンの願いを叶えるために城の舞踏会へ。モフデレラが王子の相手に選ばれるのが気に入らない継母と姉たちは、悪い魔法つかいにモフデレラを怪物にするように依頼する。だが、跳ね返された魔法を浴びた継母が巨大化したので、3人はプリキュアに変身。ダンス対決になり、敗れた継母たちが改心して大団円。元の世界へ戻るプリキュア3人の危機を救おうとするモフルンの強い思いと3人の魔法の力がひとつになって、新たな馬車が生まれる。翌朝、同じ夢から覚めたみんなの傍らに、魔法の馬車「レインボーキャリッジ」があった。





◀▲服を素敵なドレスに変えてもらったモフデレラは、王子（校長）の踊りの相手に選ばれる

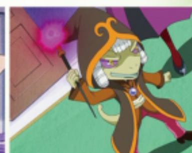


◀リコが魔法で冷凍みかんを馬車に変え、みらいとことはも加わって氷を解凍する

▼みんなが目覚めると、夢のなかで虹の道を走って次元を超えた魔法の馬車「レインボーキャリッジ」があった







▲悪い魔法つかい（ヤモー）が魔法を放つ。リコが魔法を跳ね返して、それを浴びた継母は巨大化してしまった

◀プリキュアと巨大化した継母がダンスで対決する。踊りのBGMは「プリキュア音頭 ～スマイル Wink ～」だ

第30話 魔法の自由研究！が、終わらな～い!!

補習メイト3人はそれぞれの将来の夢に向かって前進中

みらいたちが補習メイトの夏休みの自由研究を手伝う。ジュンはみらいとリコをモデルにアートを制作。エミリーはことはの髪でヘアアレンジの研究。ケイはモフルン図鑑の作成だ。3人は将来の夢につながる自由研究に取り組んでいたのだ。リコは、自分が将来の夢を見つけていないことを悩む。そんなリコにリズは「焦らず好きなことを見つければいい」とアドバイスしてくれた。そこへラブーが現れ、ジュンたちの道具を使ってドンヨクバールを生み出す。魔法をバカにするラブーに怒るみらい。彼女に応えるようにダイヤとレインボーキャリッジが輝き、ドンヨクバールを退ける。補習メイトの自由研究は完成し、みらいたちはナシマホウ界へ帰っていった。







▲ジュンは、ナシマホウ界のファッションや流行を取り入れたアートを目指す



◀リコは、立派な魔法つかいになるという幼いころからの夢の先が未定なのだ



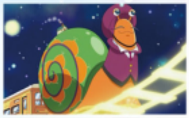
▶リズと補習メイトに見送られナシマホウ界へ帰るみらいたち



▲ふたりの仲間が目覚めたラブーは、ちょいとだけ本気で、みらいとリコを攻撃した



▲一行は冷凍みかんを味わったが、ラブーにカタツムリニアとの連結をはずされた客車はナシマホウ界と魔法界を結ぶ空間に取り残された





▲水晶から「古き伝説は終わりを迎える」という不穏なお告げを聞いて緊張する校長

第31話 結晶する想い！虹色のアレキサンドライト!!

13個目のリンクルストーンでプリキュアが新スタイルに！

カタツムリニアの連結からはずれた客車がふたつの世界のはざまに迷い込んでしまう。ラブーの仕業だ。立ち向かう3人は、巨大なラブーの強烈な一撃で吹き飛ばされて離ればなれに。弱気になる3人だが「まだ魔法がある」「みんなとつながりたい」「みんなと笑顔でいたい」という強い心で立ち上がる。3人が集結すると、13個目のリンクルストーン・アレキサンドライトが現れた。その力でアレキサンドライトスタイルに姿を変えた3人は、モフルンが呼ぶレインボーキャリッジの力と合わさって、新たな魔法「プリキュア・エクストリーム・レインボー」を放って、ラブーの撃退に成功する。すると、その周囲を12体の精霊がふわふわと飛び回るようになった。



▲巨大化したラブー。プリキュアのリンクルストーンを使った魔法が通じないばかりか、パンチの風圧だけで3人を吹き飛ばした



▶あきらめない心を奮い立たせた3人が集まると「アレキサンドライト」が誕生した！













◀アレキサンドライトスタイルの3人は「魔法つかいプリキュア！ オーバー・ザ・レインボー」と名乗りを上げる

▲レインボーキャリッジにまたがるモフルンも、空間にひとり取り残されて不安げだ

▲ラブーに手も足も出ない3人は、自分の力のなさを思い知らされ落ち込んでしまう



▶3人の周囲を飛び回る12個の光は「リンクルストーンの精霊」であることが、あとでわかる





▲「プリキュア・エクストリーム・レインボー」は、プレシャスブレスをつけた3人がレインボーキャリッジの魔法陣から放つ魔法。ラブーを虹の彼方へ吹き飛ばす



自転車に乗る親子（33話）

相手チームのユニフォーム（32話）

津成木第一中学校サッカー部のユニフォーム（32話）

第32話 ワクワクいっぱい！はーちゃんの学校生活！

みらいたちの同級生になることはが壮太の部活を応援

2学期が始まり、みらいやリコと同じ学校の同じクラスへ通うことになったことはは大喜び。楽しく授業を受けるなか、元気のない様子の壮太のことが気になる。壮太は、サッカー部の部長として部員をまとめられないことに悩んでいたのだ。だが、ことはの「壮太がワクワクならみんなが笑顔になる」というアドバイスで壮太は元気を取り戻す。一方、デウスマストの眷属・シャーキンスが復活し、試合前のサッカー場に来ていた3人を襲う。ことはが壮太から教わったサッカーのテクニックを駆使してドンヨクバールを退けるとシャーキンスは退散した。試合は引き分けたが、壮太は「ことはのおかげでサッカー部がまとまったので、いい試合ができた」と喜んだ。



▶ことはは、理科、美術、体育のソフトボールなど、学校のすべてが楽しくて、大満足！

3人が新たに強力な魔法を覚えたモフ！





▶壮太たちは善戦したものの、惜しくも引き分けた



▲ことははボールに魔法をかけ壮太からゴールを奪う。壮太がワクワクを取り戻すと、部員たちが戻ってきた





◀シャーキンスのサッカーゴールコーンドンヨクバール。ことははシュート攻撃を決めた

第33話 すれ違う想い！父と娘のビミョ〜な1日！

互いに接し方がわからない困った親子のリアン&リコ

リコの父で考古学者のリアンがみらいの家を訪れる。目的は校長に依頼された魔法界の古い伝説に関わる調査。リコは、久しぶりに会うのに仕事の話ばかりの父にさびしい気持ちになる。それはリアンも同じ。ふたりは、互いにどう接していいのかわからないのだ。その後、デウスマストの眷属・ベニーギョが現れ、マジカルをかばって傷つくリアンをあざ笑う。ベニーギョに怒りを覚えたマジカルたちは、ベニーギョのドンヨクバールを退けた。リコとリアンは、ほんの束の間だが親子だけの時間を過ごし、互いの気持ちを確かめ合う。再会を約束したリアンは、調査に旅立った。一方みらいたちは、精霊がレインボーキャリッジの魔法陣を変化させるものだと知った。



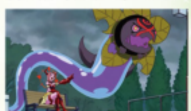
▲リコとリアンは、みらいやことは、みらいの家族から「親は子を思い、子は親が大好き」というアドバイスを受け、わだかまりが消える



▲ナシマホウ界の遺跡や伝説を調査しているリコの父・リアンが、みらいの家を訪問



▲リアンの傷は軽いものだった。「もっと話したい」と願うリコだが、リアンは「次は母と一緒に来る」と言い残して調査の旅へ戻っていく





▶リアンは、自分の身を楯にして、ドンヨクバールの激しい攻撃からマジカルを守った

第34話 ドキドキ！初恋の味はイチゴメロンパン!?

まゆみが雨の日に出会った他校の男の子にひと目惚れ♥

まゆみに好きな男の子ができた。きっかけは、雨の日の通学時に転倒したまゆみの傘を他校の生徒である男の子が拾ってくれたこと。断られるのが怖いまゆみは告白をためらうが、かなは「あきらめたら何も始まらない」とはげます。みんなに応援されたまゆみは、勇気を出して手紙を渡そうとする。だが、男の子には彼女がいた。失恋したまゆみ本人ではなく、かなが大号泣。ふたりを元気づけようとしたみらいたちの前にシャーキンスが現れる。恋愛を「愚かなこと」と見下すシャーキンスに反発する3人の力が増して、ドンヨクバールを撃退。友情を深めたかな&まゆみの前に、イチゴメロンパンが降りてくる。それは、かなが信じる魔法つかいからの贈り物だった。



▲名前で呼び合うことになったふたりを祝福するように、イチゴメロンパンが降ってくる



▲かなたちにはげまされたまゆみが男の子に手紙を差し出す。だが、男の子に彼女がいることがすぐにわかり、手紙を渡すことなく失恋



▲友情で結ばれたかなとまゆみは、もっと仲よくなれそう。ことはは、自分たちのような仲よしが増えてうれしかった



▶場の空気を読まずにノコノコ現れたシャーキンスは、3人に無視された



◀シャーキンスがベニーギョの元へ戻ると、新たな眷属・オルーバが姿を現した

第35話 生徒会長総選挙！ リコに清き一票を！

生徒会長にふさわしいのはリコとゆうとのどちら？

中学校の生徒会役員選挙が行われる。みらいたちにすすめられたリコは会長に立候補し、同級生のゆうとも会長に立候補した。リコは、みらいたちの応援で活発に選挙運動を展開。一方、ゆうとは人前で自分の気持ちを表現するのは苦手。花壇の崩れたレンガを直したり、図書館の本を整理したりする彼は、学校をもっと素敵な場所にしたいと考えている。その学校にベニーギョが現れ、ドンヨクバールが校舎を破壊しようとする。必死で花壇を守るゆうと。その姿を見たプリキュアたちも、学校を守るためドンヨクバールに立ち向かい、撃退した。選挙直前の演説会で、リコは自分が何をしたいか考えずに立候補したことを反省し、ゆうとに生徒会長になってと応援した。



▼生徒会長になってやりたいことが思い浮かばないリコ。将来と同じく、目標が決まっていないのがリコの悩みだ



▲リコは立候補者なのに、ゆうとの応援をしてしまう。だが、その素直な言葉に生徒全員が称賛の拍手を贈った



▲リコの選挙運動は、声かけやポスターで名前を知ってもらう作戦。モフルンもマスコットキャラとして協力





▲ゆうとは、クラブやクラスに関係なく生徒全員が仲よくなれることを願い、自分ができることとして生徒会長を目指す

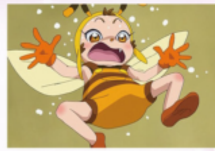
第36話 みらいとモフルン、ときどきチクルン！って誰!?

敵のスパイとは知らずに仲よしになっちゃった

デウスマストの眷属・オルーバは、手下の妖精・チクルンにプリキュアのことを調べさせている。みらいの家へ探りに来たチクルンは、ハチミツのにおいにつられてパンケーキをつまみ食い。それをきっかけに、スパイであることを隠してみらいたちと仲よくなった。チクルンに誘われて花畑を訪れたモフルンが、待ち受けていたオルーバに捕まってしまう。駆けつけたみらいにモフルンを返すオルーバは、ドンヨクバールを生み出した。暴れ回るドンヨクバールの前に立ちはだかったのはモフルン。その花畑は、モフルンが初めてみらいに連れてきてもらった思い出の場所なのだ。ふたりの思い出の場所を守るために、プリキュアたちは協力してドンヨクバールを退けた。



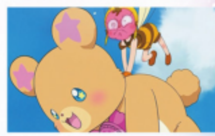
▲ハチミツ好きなところで気が合い、チクルンとモフルンが友達に



▲プリキュアをスパイするためにみらいの家に侵入したチクルンは、見つかって大あわて



▲みらいたちがコスモスの花畑へすぐに駆けつけたのは、モフルンと同じく、そこがみらいにとっても思い出深い場所だったからだ





▲▶オルーバの指示で、チクルンはモフルンとふたりだけでハチミツ探りへ行く

第37話 魔法が決め手？ 冷凍みかんのレシピ！

アイスドラゴンにため息をついてもらういい方法は？

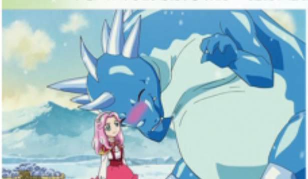
魔法学校の教頭から「校長が水晶と共にいなくなった」という連絡を受けて、みらいたちは魔法界へ急行。校長は「ぬっくい島」でピーカンみかんの収穫を手伝っていた。冷凍みかんは、ピーカンみかんをアイスドラゴンのため息で凍らせたものだ。「ひゃっこい島」へ向かった一行はアイスドラゴンにため息をついてもらおうとするが、うまくいかない。そこへベニーギョが現れて、一行をドンヨクバールで襲撃。プリキュアは、冷凍みかんをまだ食べたことのないチクルンのためにドンヨクバールを撃退して、アイスドラゴンのため息で冷凍みかんを作る。チクルンは、冷凍みかんのおいしさと、自分のために戦ってくれたプリキュアのやさしさに目を潤ませた。



▲寒さでほうきを持つ手が凍えて、みんなと離れた場所に墜落したみらいをアイスドラゴンが助けてくれた



▲校長は、晴天続きなのにピーカンみかんの生育が悪いことを心配している



▲ことはに恋をしたアイスドラゴンの「恋のため息」で冷凍みかんが完成。初めての味にチクルンは大感激



▶アイスドラゴンは陽光を浴びたみかんが羨ましくてため息をつく。そうしないのは陽光の不足？



◀苦い味の冷凍みかんを食べさせられて怒るベニーギョが、ドンヨクバールをけしかける

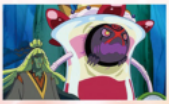



▶ナシマホウ界のアイドルで、じつは魔法つかいだった渡辺麻友が実況、校長が解説を担当

▼エミリーのテクニックで目を回したカボチャドリにケイが接近。歯に触ると、カボチャドリは表情を一変させて、森へ逃げていった




▲カボチャドリと握手を交わしたモフルンが、カボチャドリを捕まえた者として認められた


◀プリキュア3人がドンヨクバールに捕らわれる大ピンチに陥った


◀お菓子を食べたら、歯磨きの木に実った歯ブラシで、きちんと歯を磨くことが大切だ！

第38話 甘い？甘くない？魔法のかぼちゃ祭り！

カボチャドリが怖い顔で逃げ回っていた理由とは？

魔法商店街の「カボチャドリ祭り」は、年に一度現れるカボチャドリを捕まえるお祭り。カボチャドリに近づくとお菓子に変えられてしまうので、捕まえるのは至難の業だ。捕まえた者は「至上の喜び」が入った「金の卵」をカボチャドリからもらえる。逃げるカボチャドリを追うみらいたちの前にシャーキンスが現れる。カボチャドリを力づくで捕らえようとしたことをシャーキンスに責められ「カボチャドリは追い回されるのがイヤだったのかも」と反省するみらいたち。だが、カボチャドリは虫歯に苦しんでいただけ。その虫歯を抜いたモフルンがカボチャドリから金の卵をもらう。卵は、お菓子を食べたあとに歯を磨くための歯ブラシが実る木のタネだった。

第39話 今日はハロウィン！み〜んな笑顔になぁれ！

ふたつの世界の友達同士が仲よくなってハッピー！

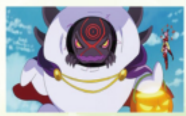
「みんなが仮装するハロウィンは魔法つかいがいてもおかしくない」。そう考えたみらいの発案で、校長と教頭が引率する魔法学校の生徒たちが、ナシマホウ界のみらいが住む街のハロウィンのイベントへ遊びに来た。屋台エリアでは壮太やゆうとたちのクレープ店が人気で、みらいとリコ、補習メイトも裏方作業を手伝う。みらいは魔法界とナシマホウ界の友達が仲よくする姿を見て大喜び。そこへベニーギョがドンヨクバールで襲撃する。プリキュアは、ふたつの世界がつながったハロウィンを守るため、ドンヨクバールを撃退。仮装パレードが始まり、手をつなぐ人々を眺めるチクルンはさびしげな表情を浮かべ、モフルンが差し出す手を握ろうとしなかった。


▲魔法界とナシマホウ界のみんなが力を合わせて切り盛りしたことで、クレープ店の行列に無事に対応することができた


▲補習メイトとまゆみ＆かなが再会を喜ぶ。魔法学校の制服は、おそろいの魔法つかいの仮装に見える


▶3人の衣装は、ことはが魔法で変えたもの。ことはの仮装は宇宙人風だ


▲ふたつの世界の友達が笑い合う。その様子を目にしたみらいとリコもとてもうれしい気持ちになって、手を握り合った


◀ベニーギョは見物の親子に着ぐるみと勘違いされて、お菓子をもらった





▲リコは、近所の人を巻き込む大々的なパーティーに赤面してしまう





▲リコの家庭は、リコの誕生日を盛大に祝う。でも、魔法界ではそれが普通なのかも

第40話 愛情いっぱいのおめでとう！リコの誕生日！

盛大な誕生日パーティーはうれしいけれど恥ずかしい

リコの母で、最近ナシマホウ界で活躍する料理研究家のリリアが、リコの誕生日を祝うためにみらいの家を訪れた。リコの父・リアンと姉・リズもやってくる。しかしリコは、誕生日会を盛大に祝ってくれる家族のノリがうれしい半面、恥ずかしいので苦手だった。パーティーのあと片付けをしていると、プリキュアたちはシャーキンスが作った空間に引き込まれる。デウスマストが星々を飲み込む様子を見せたシャーキンスは、いずれ混沌に消える命を祝福する意味はないと言う。それに反発するマジカルの思いにタンザナイトが応え、シャーキンスが作った空間を消し去った。ドンヨクバールを撃退したリコは、みらいの家から帰る家族に感謝の気持ちを伝えた。





◀家族からリコへのプレゼント。リズは1万年使ってもインクが切れない仕様の「インク出まんねん筆」、リアンは「石」、リリアは「物語の読み聞かせ」を贈る





▲宇宙のような空間を作ったシャーキンスだが、タンザナイトの力で元の世界へ戻る

近所の主婦





▲"ふたつの星"は、リコが大好きな、リリアが読み聞かせる物語の主人公だ



◀みらい＆ことはからのプレゼントは、魔法のほうきで夜空に描いた光のメッセージ

第41話 ジュエリーな毎日！魔法学校へ放課後留学！

オルーバが狙っているのはドクロクシーが残した本

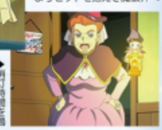
最近、魔法界とナシマホウ界の往復にかかる時間が短くなった。そこで、みらいたちは中学校の放課後に魔法学校へ通うことにした。魔法学校の寮に泊まることになったみらいたちは、ジュンの部屋で補習メイトとパジャマパーティーを楽しむ。普段は規則に厳しい教頭が見逃してくれる。それは、校長が「友とにぎやかに夜を過ごすのも人生を豊かにする貴重な経験」と言って教頭を諭したからだ。その校長が出かける姿を見たみらいたちは、あとを追う。ドクロクシーが消えた場所までやってきた校長の前に、オルーバが現れた。校長を守って戦うプリキュアはドンヨクバールを退ける。オルーバは、海底から「ドクロクシーの本」を引き上げると去っていった。

▼ジュンの部屋でお泊まり会。女の子が6人集まると、とってもにぎやかになる





▲明日は祝日でナシマホウ界の中学校は休み。3人はお泊まりセットを抱えて魔法界へ

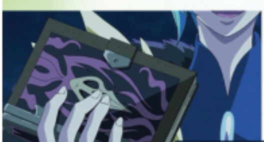


▶消灯時間を過ぎて教頭が何度も見回りに来る。だが、今回は大目に見てくれた





▲▶校長は、若き日を共に過ごした友人・クシィを思い出し、痕跡を求めて、彼がいなくなった場所に向かった

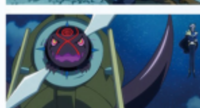




▶◀オルーバの狙いは、今後の準備に必要だという"ドクロクシーの本"だった。闇の魔法を記録した、魔法の本だ



▶「終わりなき混沌が世界をメチャクチャにする」とほくそ笑むオルーバに3人は猛反発



◀オルーバはドンヨクバールにプリキュアの始末を任せ、ほかの用事を済ませに行った





◀▼「プリキュアを叩きつぶす」と言うシャーキンスに、チクルンは3人に危害が及ばない作戦を提案する



▼3人は、補習メイトと一緒にお菓子作りをリズに習っている。その隙に、チクルンがプリキュアの変身アイテムを奪取する



▲▼巨大化したシャーキンスが飲み込んだ変身アイテムを、口内へ飛び込んだチクルンが取り戻す





第42話 チクルンにとどけ！想いをのせた魔法のプリン！

チクルンが敵のスパイでもみんなの友情は変わらない

チクルンは仲よくなったみらいたちを傷つけたくないと思うようになった。そこでシャーキンスたちに「リンクルストーンを奪えば、プリキュアを倒したも同然」と提案する。チクルンが盗み出したリンクルストーンとリンクルスマホンを受け取ったシャーキンスは、みらいたちに「チクルンはスパイ」と明かし、約束を破って3人を攻撃する。それに怒ったチクルンがリンクルストーンとリンクルスマホンを取り戻して3人は変身。「チクルンはこれからも友達」と言う3人と、それを聞いて喜ぶチクルン。友情でトパーズの力が増し、シャーキンスを撃退した。チクルンから事情を聞いたみらいたちは、そこに現れた「開かずの扉」を開けて、妖精の里へと向かった。



◀チクルンの正体がスパイだと知らされて驚くみらいたち



◀▼チクルンとプリキュアたちが抱く「友達とわかり合えたワクワクした気持ち」によって、トパーズの力が増したのだった



▶精霊の「ミトメール」の声と共にアメジストがリンクルスマホンに装着されると「開かずの扉」が出現！



◀3人が作ってくれた「ハチミツプリン」のおいしさに、スプーンが止まらない！



第43話 いざ妖精の里へ！あかされる魔法界のヒミツ！

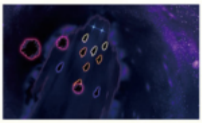
デウスマストを追い払った生命の母、マザー・ラパーパ

みらいたちはアメジストの扉を通って妖精の里へ。チクルンは仕事をサボったのを女王に叱られたくなくてオルーバの言いなりになっていたが、女王はチクルンを心配していた。女王は、ことはの記憶にある「花の海」とはかつて世界を覆っていた花園だと言う。当時を知るレジェンド女王の話では、マザー・ラパーパを中心に平和だったひとつの世界はデウスマストの襲来で混乱した。デウスマストを追い払ったマザー・ラパーパは母なる樹と共に大地を離れた。母なる樹は魔法界になり、残された大地はナシマホウ界になったのだ。そこへオルーバによって蘇ったスパルダが現れるが、プリキュアが追い払う。みらいたちはチクルンと再会を約束して帰っていった。



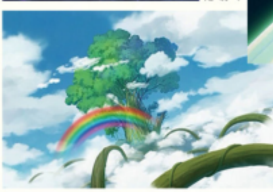


▲現在の女王は就任してから3000年。先々代のまた先々代の女王である「レジェンド女王」は、まだ健在



▶◀あまねく生命の母・マザー・ラパーパは、突如現れたデウスマストと戦った







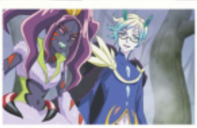
◀デウスマストは彼方へ追い払われ、母なる樹は時空のはざまで魔法界になった



▲"プリキュア"とは、ふたつに分かれた世界が再び結ばれるためにマザー・ラパーパがかけた魔法の言葉だった

▼素直でないチクルンは、一行がアメジストの扉と共に消えたあとから「ありがとな」とつぶやいた





▲オルーバは、蘇らせたスパルダをプリキュアと戦わせることで闇の魔法をテストする



第44話 モフルン大奮闘！ みんな子供になっちゃった!?




▲▶オルーバが上空から落とした闇の魔法が光を放つと、3人は幼い子どもの姿になり、それを目にしたモフルンは驚く

太古のマザー・ラパーパとフェリーチェとの関係とは？

ある日、買い物から帰ったみらいたちの目前で謎の光が炸裂すると、3人は幼い子どもの姿になった。ことはの正体を探るオルーバが闇の魔法を試したのだ。モフルンは、行動も子どものようになった3人を守るために孤軍奮闘。一方スパルダは、オルーバに頼んでバッティとガメッツを復活させる。モフルンが頑張る姿にはげまされた3人は、プリキュアに変身したことで元の姿に戻る。オルーバはフェリーチェを拘束して、彼女とかつてデウスマストと戦ったマザー・ラパーパとの関係を問う。オルーバが騒動の犯人と知ったフェリーチェは怒り、拘束を消滅させた。フェリーチェの力に何かを感じ取ったオルーバはスパルダとガメッツを連れて去っていった。





▲3人の昼寝の世話、ことはが出した巨大パンケーキの処理、スパルダのクモの糸からの脱出とモフルンが大奮闘



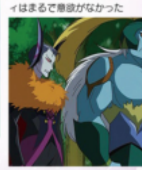
▲オルーバは、拘束したフェリーチェに「マザー・ラパーパと何か関係があるのか？」と問う

▼ことはの変身時のこのカットは、通常は足下が見えない。子どもの頭身では足の裏まで披露




▲子どもの姿で変身シーンへ突入。「ダイヤ」の掛け声のあと、モフルンと手をつなぐシーンはなく、いつもの姿へ戻るシーンがある

▼ガメッツは"エメラルドのプリキュア"との対戦に胸をおどらせるが、バッティはまるで意欲がなかった



第45話 想いは時を超えて…！ 友情のかたち！

闇の魔法に関わるすべてはオルーバが仕組んだこと

ナシマホウ界を訪れた校長を迎えたみらいたちに、オルーバが闇の魔法の真実を語る。本当の役割は「デウスマストの眷属を復活させるもの」で、マザー・ラパーパと戦った大昔にオルーバが仕組んだこと。だが、クシィがたどり着いた闇の魔法は人間の心があるため「心の弱さが欠点のできそこない」とあざけるオルーバ。彼はさらに、フェリーチェはマザー・ラパーパの力を受け継ぐ者だと言う。フェリーチェは「人間の心は想像を超えた力を生む」と反論。すべてを知ったバッティは、闇の魔法の仲間を合体させたモットヨクバールでドンヨクバールを退ける。一方でオルーバは、プリキュアに撃退される寸前、自分の身を捧げてデウスマストの眷属を復活させた。




▲校長を迎えるみらいたちが戸外に魔法で出したこたつで暖を取っていると、本を手にしたオルーバが現れる

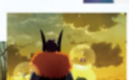
▶本性を現したオルーバ。闇の魔法は、彼が大昔に思い描いた筋書きから生まれたのだ



▼オルーバを撃退するプリキュア。フェリーチェはマザー・ラパーパの力を継ぐ者だった

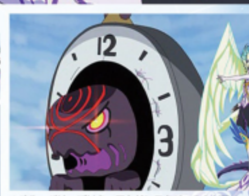


▼校長が取り戻した本の最初のページには、禁断の魔法に挑むクシィの「親友の校長を巻き込みたくない」という思いが記されていた

◀▼▶バッティは、闇の魔法の仲間たちを合体させた"モットヨクバール"を使ってドンヨクバールを倒し、去っていった





▲オルーバは、プリキュアとドンヨクバールとが戦う力を利用して眷属を復活させる計画を立てていた



終わりなき混沌が姿を現わしたモフ！


▶ギックリ腰で配達に行けないアイザック先生に代わって、3人がサンタクロース役に！

第46話 魔法のクリスマス！ みらい、サンタになる!?

子どもにプレゼントを配るサンタは魔法つかいだった

クリスマスで賑わう魔法商店街を訪れたみらいは「サンタクロースは魔法つかい」と知って驚く。魔法界の人々が手分けして魔法界とナシマホウ界の子どもたちにプレゼントを配っているのだ。腰痛のアイザック先生に代わって、みらいたちがサンタ役を買って出る。ナシマホウ界でプレゼントを配るみらいたちがほうきで飛ぶ姿を、かな&まゆみが目撃。そこへベニーギョが現れる。ベニーギョは、オルーバが言った「フェリーチェはマザー・ラパーパの力を受け継ぐ者」という言葉が真実か確かめようとしていた。だが、プリキュアが駆けつけてドンヨクバールを撃退する。3人から「魔法つかいであることは秘密」と聞いたかなは、誰にも言わないと約束した。




▲魔法界の配達を終えた3人はナシマホウ界の配達へ。ソリを引くエスカーゴが肩こりでダウンしたので、ほうきで移動する




▲「おとどけソックス」に贈り物を入れると、子どもの枕元の靴下に転送される




▲赤いコスチュームのベニーギョは、かな&まゆみにサンタクロースと誤解され、激怒して攻撃！

▲魔法つかいが本当にいたことがわかって満足したかなは「誰にも言わない」と約束した


▶3人にアイザック先生からケーキが届いた


▲かなは、何度も魔法つかいの姿を目撃して、追いかけてきた。魔法つかいと直に対面して大興奮

第47話 それぞれの願い！ 明日はどっちだー？

ついにデウスマストが降臨 目覚めると世界が一変！

常春の魔法学校に雪が降る。予言されていた災いの前兆だろうか。やがて太陽が何かに隠され、ナシマホウ界と魔法界両方の空が暗くなる。ナシマホウ界の神社で初詣をしていたみらいたちに、ベニーギョが襲いかかった。不完全な形で復活したデウスマストの眷属と融合したベニーギョが、巨大化して街を破壊。だが、明日を信じてあきらめないプリキュアの反撃でベニーギョと眷属の融合が解ける。ベニーギョが撃退される寸前、デウスマストが降臨。倒したはずの眷属も蘇ってしまった。混乱のなかダイヤとエメラルドが輝くと、プリキュアたちは光のなかに吸い込まれた……。その日の朝と同じようにみらいは目を覚ましたが、窓の外には奇妙な景色が広がっていた。




▲▶冬休みの宿題を終えたみらいたちが神社に初詣していると、突然太陽が何かに隠され、暗闇に包まれる

▼3人の「プリキュア・エクストリーム・レインボー」の威力が勝り、ベニーギョは元の姿に




▲デウスマストの眷属と融合して巨大化したベニーギョは、街を切り裂く強烈な光線を口から放つ

▼デウスマストが降臨した。頭頂部は雲をはるかに超える高さで、プリキュアが撃退したラブー、シャーキンス、オルーバも復活!?








▲ナシマホウ界に魔法界を支える木がそびえ、ほうきに乗る魔法つかいやペガサスが……!?





第48話 終わりなき混沌！デウスマストの世界!!

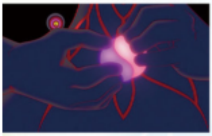
ナシマホウ界と魔法界がひとつに混ざり合った!?

津成木町の人々が魔法を当たり前のように受け入れている。ナシマホウ界と魔法界が混ざり合っているようだ。ことはは「混沌に完全に飲み込まれる手前で、マザー・ラパーパの母なる樹が止めている」と言う。校長は、混ざり合う世界を引き離すと行き来できなくなると危惧する。だが、3人は明日を守るためにデウスマストを追い払う決意を固め、校長は世界の人々に「プリキュアに思いを託そう」と語りかける。ふたつの世界を強引に混ぜ合わせて飲み込もうとするデウスマストに、プリキュアは「違う者同士がつながれるのが素敵」と主張する。ダイヤとエメラルドの精霊が祝福の言葉「ミトメール」を発すると、レインボーキャリッジの魔法陣が完成した。





▲魔法学校の生徒が魔法を使っても、中学校の生徒と先生は驚かない。ふたつの世界が混ざり合っている!?





▲リンクルスマホンに記された昔の記録がことはに語りかける
▼強引に混ぜられた世界を引き離すと、反動で遠くへ離れる!?

第49話 さよなら…魔法つかい！奇跡の魔法よ、もう一度！

ふたつの世界を救って離ればなれのふたりが奇跡の再会

レインボーキャリッジの太陽の魔法陣によって3人は「プリキュア・エクストリーム・レインボー・サンサン・ジュエリーレ」を放ち、デウスマストは巨大化して3人に襲いかかる。だが、混沌に飲まれたはずの地上に生命の光があふれ、そのエメラルドの輝きでデウスマストは追い払われた。ことははふたつの世界を元に戻す手伝いをするためにふたりと別れ、みらいとリコも離れゆくナシマホウ界と魔法界に戻って離ればなれになる。モフルンも普通のぬいぐるみに戻った。数年後、大学生になったみらいが木の枝を振ってリコに会いたいと願うと、奇跡が起きる。木の枝は魔法の杖へと変わり、リコとことはが現れる。そしてモフルンも再び話せるようになったのだ。





▲▶ミラクルとマジカルは次々にスタイルを変えて攻撃し、フェリーチェはマザー・ラパーパのように巨大化して戦う







▲エメラルドの輝きでデウスマストを追い払ったことはは、みんなを見守りながら世界が元に戻れるよう尽力する





▲リコは「私たちは、必ず、絶対、また会える！」と魔法をかけて、みらいの前から去っていった



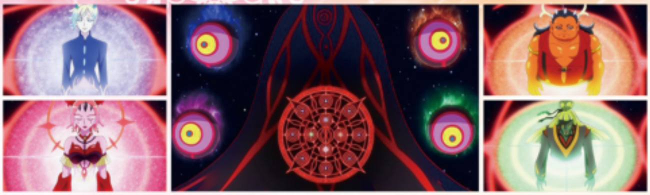
▶数年ぶりの再会を喜ぶ3人とモフルン。みんなと会えてワクワクもんだぁ







最後の戦いとちょっと未来のお話モフ！



▲眷属とは終わりなき混沌を呼ぶための道具。ラブー、シャーキンス、オルーバ、ベニーギョの4人は本体の手前に浮かぶ魔法陣のなかにいる





▶▼最後のふたつの精霊が認めると、レインボーキャリッジの魔法陣が完成した



◀世界は混沌に飲み込まれつつあるが、まだ救うチャンスはある。3人はあきらめない！





▲世界が闇に包まれて不安を抱く人々に校長は「希望はある」と呼びかけた。人々は手をつなぎ合って3人に希望を託す

キュアップ・ラパパ！未来(あした)もいい日になあれ!!

第50話

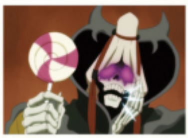




◀▲ことはの「キュアップ・ラパパ！ イチゴメロンパン」の魔法で3人が変身した

ドクロムシーを追いかけてふたつの世界の仲間と再会

みらいたちは、イチゴメロンパンで再会をお祝い。昔のように楽しむために、ことはが魔法で3人を魔法学校2年生の姿に変える。そこへドクロクシーの虫歯から生まれ、スイーツを独り占めするドクロムシーが現れた。イチゴメロンパンとことはの魔法の杖を吸い込んだドクロムシーを追いかけるみらいたち。ドクロムシーに吸い込まれかけたチクルンがことはの魔法の杖を取り戻し、3人はプリキュアに変身。逃げるドクロムシーを不思議な少女が引き止めてくれた。プリキュアの魔法で虫歯を治したことでドクロムシーはスイーツを味わえるようになり、感謝して改心する。仲よしの輪をつなげたいみらいたちは、みんなにイチゴメロンパンを配って回るのだった。



▲ドクロムシーは、甘いものが大好きだったドクロクシーの虫歯から生まれた存在。その姿を見たヤモーが復活して付き従う



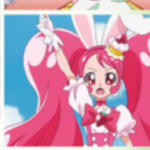


▲ドクロムシーたちも、バッティと同じように魔法学校の生徒になる？









▲▶「またプリキュアになれた」と喜ぶみらいとリコに協力する不思議な少女は、「キラキラ☆プリキュアアラモード」の宇佐美いちかが変身したキュアホイップ



▲レインボーキャリッジに乗ったみらいたちが、成長した仲間たちにイチゴメロンパンを配って回る。みらいたちの未来は光り輝いている



End-Card Gallery

一部の話数では、放送終了後にエンドカードが流れた。22話までは一部告知をのぞき、
視聴者から送られたイラストを紹介していた（視聴者イラスト回は未掲載）。
イラストは50話を宮本絵美子が、ほかすべてを演出助手の豊田百香が担当した。

第32話



第27話



第02話



第33話



第28話



第23話



第34話



第29話



第24話



第35話



第30話



第25話



第37話



第31話



第26話



第42話



第43話



第44話



第45話



第46話



第47話



第48話



第49話



第50話



YouTube『3分でわかる魔法つかいプリキュア!』より



魔法文字

魔法界で使われている文字



Movie Guide

ムービーガイド

『魔法つかいプリキュア!』の映画での活躍をチェックしよう♪

映画でも、友達同士の絆を見せてくれた『魔法つかいプリキュア!』。彼女たちが、2016年の春、秋の映画でどんな活躍をして、最新の映画でどんな晴れ姿を見せてくれたのかを確認してみよう。

2016年3月19日に公開された「映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法!」は、歴代のプリキュアが全員そろう「プリキュアオールスターズ」シリーズを締めくくる作品となった。第1作「ふたりはプリキュア」から「魔法つかいプリキュア!」までの44人のプリキュアたちが出演。この映画のために作られた新曲7曲を含む計9曲の歌をスクリーンで披露する、「プリキュア」シリーズの映画では初となるミュージカル形式だったことでも話題となった。

本作の物語は、「魔法つかいプリキュア!」のみらいとリコが、街中で「Go!プリンセスプリキュア」の春野はるかたちと出会うところからスタートする。みらいたちは出会ったはるかたちの前で魔法を使ってしまうが、そこにプリンセスプリキュアたちが戦って倒したはずの敵・ディスピアが現れる。みらいとリコははるかたちと共にプリキュアに変身して戦うものの、なぜかディスピアは姿を消し、新たな敵である魔女のソルシエールと、その手下のトラウーマが出現する。ソルシエールは彼女の亡くなった魔法の先生を蘇らせるために、「プリキュアの涙」を求めていたのだ。その後トラウーマの力で、キュアミラクルとキュアマジカルは別々の世界に飛ばされてしまうが、先輩プリキュアたちがミラクルたちを救うべく力を振りしぼって加勢してくれるのだった。

トラウーマによって先輩プリキュアたちが捕らえられてしまい、ミラクルとマジカルは彼女たちを助けるために奮闘していく。いつも一緒にいたふたりが離ればなれになったとき、それでも相手を信じ、立ち上がることができるのだろうか。友情や絆の強さについて、今一度考えることができる作品へと仕上がっていた。



▼妖精ではないモフルンがプリキュアの妖精たちと出会うのは、これが初めて!



http://www.precure-allstars.com/
●2016年3月19日公開
■STAFF 原作/東堂いづみ 監督/土田豊 脚本/村山功 ミュージカルプロデュース・作詞/森雪之丞 音楽/高木洋 作曲/小六禮次郎、さかいゆう、高取ヒデアキ 振付/西田一生 オリジナルキャラクターデザイン/稲上晃、香川久、馬越嘉彦、川村敏江、高橋晃、佐藤雅将、中谷友紀子、宮本絵美子 キャラクターデザイン・作画監督/青山充 美術監督/渡辺佳人 CGディレクター/中西信輔、小林真理 色彩設計/澤田豊二 撮影監督/高橋賢司 製作担当/大町義則 アニメーション制作/東映アニメーション 主題歌/プリキュアオールスターズ「みんながいるから☆プリキュアオールスターズ」
■CAST 朝日奈みらい(キュアミラクル)/高橋李依 リコ(キュアマジカル)/堀江由衣 春野はるか(キュアフローラ)/嶋村侑 海藤みなみ(キュアマーメイド)/浅野真澄 天ノ川きらら(キュアトゥインクル)/山村響 紅城トワ(キュアスカーレット)/沢城みゆき ゲスト声優:ソルシエール/新妻聖子 トラウーマ/山本耕史 ほか

どんなに離れていても ふたりの絆は消えない！





▲人形プリキュアたちのラインダンスは圧巻……



▲トラウーマに捕まったプリキュアたち



▲トラウーマが元凶であると知ったソルシエール（中央）は、プリキュアたちを援護する

EDでは華麗なダンスも！









◀ソルシエールが歌った子守唄の魔力によって、プリキュアたちに力がみなぎっていく！





◀EDでは、44人のプリキュアたちによる恒例のダンスシーンも見られた。とても華やかだった！

▲後方の右がソルシエール、左がトラウーマ。トラウーマは世界を無にしようと企んでいた

映画 魔法つかいプリキュア! 奇跡の変身!キュアモフルン!

http://www.precure-movie.com/
●2016年10月29日公開
■STAFF　原作／東堂いづみ　監督／田中裕太　脚本／田中仁
キャラクターデザイン・作画監督／上野ケン　音楽／高木洋　美術監督／西田滋
色彩設計／竹澤聡　撮影監督／安西良行　製作担当／大町義則
アニメーション制作／東映アニメーション
テーマソング／渡辺麻友「正しい魔法の使い方」
■CAST　朝日奈みらい(キュアミラクル)／高橋李依
十六夜リコ(キュアマジカル)／堀江由衣
花海ことは(キュアフェリーチェ)／早見沙織
モフルン(キュアモフルン)／齋藤彩夏　ダークマター／浪川大輔　ほか



「魔法つかいプリキュア!」の映画は、「モフモフモフルン、キュアモフルン!」の掛け声と共に、妖精的なポジションとしてミラクルやマジカル、フェリーチェをサポートしてきたモフルンがプリキュアに変身してしまうという、ほかに例を見ない展開が起こって「プリキュア」シリーズのファンを驚かせた作品だった。

ドンヨクバールを撃退し、家に帰ろうとしていたみらいたち。そこに、魔法界の校長先生からミラクルライトが届けられる。ミラクルライトは100年に一度開かれる大魔法フェスティバルに参加するために必要なものだった。大魔法フェスティバルは、100年に一度だけ目覚めて「一番純粋な願い」を叶えてくれるという「願いの石」の復活のお祭り。みらい、リコ、ことは、モフルンがフェスティバルを訪れてミラクルライトに願いを込めると、なんとモフルンが「願いの石」に選ばれたのだ。モフルンが願ったのは「みらい、リコ、ことはの願いを叶えてほしい」というもの。他人に願いを譲るというモフルンに周囲が困惑していると、そこにダークマターが現れる。ダークマターはこの世界からすべての魔法つかいを消し去ろうとしているのだが……。ダークマターにさらわれ、みらいたちと離ればなれになってしまうモフルン。モフルンを必死に捜し、再会した際にはモフルンと「一緒にいたい」と強く願ったみらいがピンチに陥ったとき、モフルンは大切な友達を助けるために、キュアモフルンへと変身する。「誰かと一緒にいたい」「誰かと一緒にいるから楽しい」という思いを丁寧に描いた本作。きっと観終わったころには、友達の手を強く握りしめたくなるはずだ。



◀普段は洋服を着ていないモフルンも、フェスティバルに合わせてオシャレな洋服を着た



▼衣装募集当時はことはの登場前だったが、ことはにもフェスティバル用の衣装(右)が用意された

▲▶左が映画オリジナルの私服。右は、「オシャレコンテスト」でグランプリを取ったイラストを元に制作された衣装だ。劇中にも登場した

同時上映
キュアミラクルとモフルンの魔法レッスン!

■STAFF　監督／貴庭秀明
演出／日向学

キュアミラクルとモフルンが、ミラクルライトを使ってスクリーンの向こうのファンに魔法のレッスンをしてくれる短編。フルCGで製作され、丁寧な描写も見どころ。ミラクルとモフルンがテーマソングに合わせてダンスをする姿がキュート。



◆キュアモフルン

◀モフルンが変身した姿。目のなかにある星や口元に、ぬいぐるみ姿の面影が残っている



◀ダークマターにさらわれたモフルンだが、森のクマたちとはすぐに仲よくなる



◀大魔法フェスティバルを訪れると、バルーンがいっぱい。ことはは大はしゃぎ

映画オリジナルのハートフルスタイル!





◀ミラクル、マジカル、フェリーチェは、ダークマターからモフルンを取り戻そうと奮闘する

劇場版オリジナルの服装も登場!

魔法界の仲間たちも、普段よりもおめかししてフェスティバルを楽しんだ。



◆フランソワ

◆エミリー

◆ジュン

◆ケイ

◆ピエロ



◆クマタの影



◆クマタ（声／浪川大輔）

▶ひとりぼっちで過ごしていた、クマの男の子。モフルンと「友達になりたい」と願う



◆ダークドラゴン



◆ダークマターの影



◀映画オリジナルのハートフルリンクルストーンで、4人は「プリキュア・ハートフルレインボー」という魔法を使う



◆ダークマター（声／浪川大輔）

▶モフルンと願いの石を使って、魔法つかいを消し去ろうと企んでいた謎のクマ

歴代のプリキュアが勢ぞろいしていた春の映画がリニューアル！ 直近３世代のプリキュアたちが登場して、キャラクターの魅力や友情、活躍をさらに丁寧に描く!!

これまで歴代の「プリキュア」シリーズのプリキュアたちが登場して描かれた映画「プリキュアオールスターズ」が、2017年からは大胆なリニューアルを行った。登場するのは「Go！プリンセスプリキュア」「魔法つかいプリキュア！」、そして放送中の「キラキラ☆プリキュアアラモード」の、3世代のプリキュアたち。人数を凝縮したことで、今までの「オールスターズ」とは違った形で、プリキュアたちの交流を描いていく。

「キラキラ☆プリキュアアラモード」の宇佐美いちかは不思議な夢を見る。そこには謎の女の子が登場するが、ある日、現実世界でその女の子と遭遇。「桜が原」という別の世界で暮らしていたサクラと名乗る女の子は「世界中のキレイなもの」を狙う鴉天狗に襲われて離ればなれになった友達の狐・シズクを助けるために、いちかたちの世界へやってきたのだ。シズクを助けるために必要なのは、「鍵」「宝石」「スイーツ」のプリキュアたち。仲間たちと共にプリキュアを捜していたいちかは、ついに「Go！プリンセスプリキュア」「魔法つかいプリキュア！」たちと出会う。そんないちかたちの前に、鴉天狗の手下である赤狗・黄狗、そして謎の敵・五月雨が立ちはだかる――。

本作は、「映画Go！プリンセスプリキュア Go！Go!! 豪華3本立て!!!」の「プリキュアとレフィのワンダーナイト！」を手がけた宮本浩史が監督を務めている。また、CGの割合も「オールスターズ」より多めとなっている。セルとCGの違いを活かした演出も巧みで、キャラクターの活躍以外にも映像面での見どころがたっぷりある。「魔法つかいプリキュア！」から「キラキラ☆プリキュアアラモード」へのバトンを渡す意味を持つ本作。息の合った戦いっぷりを見せる「魔法つかいプリキュア！」の頑張りを大きなスクリーンで確認してほしい。



**2017年
3月18日
公開**

http://www.precure-dreamstars.com/

■STAFF 原作／東堂いづみ
監督・キャラクターデザイン／宮本浩史 脚本／坪田文
オリジナルキャラクターデザイン／中谷友紀子、宮本絵美子、井野真理恵
総作画監督／中谷友紀子 演出／佐藤宏幸、村上貴之 作画監督／大田和寛
美術監督／倉橋隆 音楽／林ゆうき CGディレクター／鄭載薫
CGアニメーションスーパーバイザー／金井弘樹 色彩設計／澤田豊二
撮影監督／中村俊介、高橋賢司 製作担当／澤守洸
CGプロデューサー／野島淳志 アニメーション制作／東映アニメーション
OPテーマ／北川理恵（コーラス／五條真由美＆うちやえゆか）
「桜MISSION ～プリキュアリレーション～」
EDテーマ／木村佳乃「君を呼ぶ場所」

■CAST 宇佐美いちか（キュアホイップ）／美山加恋
有栖川ひまり（キュアカスタード）／福原遥
立神あおい（キュアジェラート）／村中知
琴爪ゆかり（キュアマカロン）／藤田咲
剣城あきら（キュアショコラ）／森なな子 ペコリン／かないみか
サクラ／阿澄佳奈 朝日奈みらい（キュアミラクル）／高橋李依
十六夜リコ（キュアマジカル）／堀江由衣
花海ことは（キュアフェリーチェ）／早見沙織 モフルン／齋藤彩夏
春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑
海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄
天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響
紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき
パフ／東山奈央 アロマ／古城門志帆
ゲスト声優：シズク／木村佳乃 鴉天狗／山里亮太（南海キャンディーズ）
赤狗、黄狗／ライス（関町知弘、田所仁） ほか



▲劇中では、トラブルが起こってから知り合ういちかたち。のんびりピクニックができる日は来るのだろうか……？



▶それぞれのシリーズに登場した妖精たちも勢ぞろいした。みんなで大切なプリキュアたちの背中を押して応援する



シズク
（声／木村佳乃）

サクラの友達である狐。自分の身を挺して、鴉天狗からサクラのことを守ろうとしていた。

サクラ
（声／阿澄佳奈）

鴉天狗に狙われた少女。シズクから渡された3枚のカードに関わる人物を捜している。



▲サクラが捜していたプリキュアたちがそろった！　笑顔が頼もしい



▲「桜が原」にある巨大鳥居の奥の扉が、サクラの世界とプリキュアの世界をつなぐ



▲鴉天狗の手下である赤狗、黄狗に襲われて、てんてこ舞いのプリキュアたち



▲プリキュアたちは力を合わせて五月雨に立ち向かおうとする



◀プリキュア12人の作戦会議。鴉天狗は、結論が出るのを律儀に待ってくれているようだ……

▼五月雨との戦いでは、プリキュアがピンチに陥るひと幕もある。はたして、その正体は誰なのか

プリキュアがサクラの世界を友情パワーで守ってみせる！



『魔法つかいプリキュア！』の活躍は？

「宝石」を持つプリキュアを捜していたいちか、ひまり、あおいが、コンビニエンスストアの扉を通って魔法界に現れる。そこで、みらいやリコたちと出会うのだが、なぜかヨクバールが現れ、みらいたちも変身して戦うことになる。その後、自然公園に吹き飛ばされたキュアミラクルたちは、そこで『Go！プリンセスプリキュア』とも合流。3世代のプリキュアがそろい、鴉天狗に立ち向かっていく。キュアミラクルたちの息の合った戦い方は映画でも健在。春の映画は初めての出演となるキュアフェリーチェの頑張りも見どころだ。

絶対にあきらめないプリキュアたちのパワーが全開に！

赤狗（あかいぬ）
（声／関町知弘）

▼鴉天狗の手下。獣のように吠えたりうなったりする

黄狗（きいぬ）
（声／田所仁）





鴉天狗（からすてんぐ）
（声／山里亮太）

▲キレイなものをねらっている悪いヤツ。プリキュアにも興味を示している



▲サクラとの交流やプリキュアが出会ったときのやりとりなど、楽しめる要素が盛りだくさん



▲ゆかり＆あきらの前に「Go！プリンセスプリキュア」が見参！



▲「魔法つかいプリキュア！」の3人からは、頼もしさが感じられる



▲圧倒的な強さを誇る五月雨。その仮面の下にはどんな表情が隠れているのか



▲サクラの「ある夢」を叶えるため、プリキュアたちは手を取り合って戦う



▶12人が力を合わせれば、どんな強敵だって怖くないはず

【監督】

宮本浩史 Interview

Profile／【みやもと・ひろし】
4月16日生まれ、兵庫県出身。アニメーション演出家、キャラクターデザイナー。『映画Go！プリンセスプリキュア Go！Go!!豪華3本立て!!!』の『プリキュアとレフィのワンダーナイト！』で監督を務める。

『プリキュア』の映画の可能性を感じてほしいです

——監督としてのオファーはどのような形であったのでしょうか？

自分がやりたい企画を提出していたなかで、「次の映画をやってみたら」という話をいただきました。

——例年、春の映画は「オールスターズ」でしたが、今回は3世代になりましたね。

3世代にするのは、あとになって決まったことなんです。僕は「オールスターズ」の次作を、と話をもらっていたので、やる気は満々だったんですよ。でも、子どもたちが覚えていられる世代はかぎられているし、今観ている世代に今作を届けたいという気持ちも伝わってきたので、登場するプリキュアを新シリーズを含めた3世代でやることになりました。僕も、過去のプリキュアに好きなキャラクターはたくさんいますし、「オールスターズ」を愛してくれている人がたくさんいるのも知っていますからプレッシャーはありますが、そういう方たちにも面白いと言ってもらえるものを作れた自信はあります。

——人数が絞られたことで当初想定していたストーリーに変化はありましたか？

「サクラ」という女の子が登場すること、サクラがシズクを取り戻す物語であることは変わっていませんが、それ以外はほぼ変わりました（笑）。でも、人数が絞られたことで、プリキュアと妖精たちは全員セリフや目立つシーンがありますし、「Go!プリンセスプリキュア」のノーブル学園の生徒たちや『魔法つかいプリキュア！』の魔法界の人々を登場させることができました。

「オールスターズ」では、全員集合するための理由付けが、どこかに招待されるなど受動的なことが多かったんですよね。でも、今回はプリキュアがこちらから誰かを迎えに行くという能動的な形にしたかった。それは僕自身が待っている状況を好きではないからです。それから今回の映画は、序盤は「キラキラ☆プリキュアアラモード」の単独映画のように始まります。でも、自分たちだけではどうしようもなくて、仲間集めをするようになる。仲間が増えて力を付けることの快感や心強さを、子どもたちにも感じてほしかったんです。また、時間の整合性を取りたかったという事情もあります。「Go!プリンセスプリキュア」では最終話ではるかたちがドレスアップキーを返してしまっているし、『魔法つかいプリキュア！』ではみらいたちが大学生になっていますから、その後の話と考えると今作がTVシリーズのパラレルになってしまう。それを僕はやめたかったんです。そこで今作には、サクラに時空をまたぐ能力を持たせることにしました。今作は「Go!プリンセスプリキュア」と『魔法つかいプリキュア！』のTVシリーズのどこかの時間軸に行ったと考えてもらえたらと思います。ちなみに、『魔法つかいプリキュア！』だとある話数からある話数の間という、かぎられた時間のなかでしか成立しないんです。「Go!プリンセスプリキュア」も調べれば、ここにしか入らないというポイントがわかるので、ぜひ観返してほしいですね。

——となると、『魔法つかいプリキュア！』の50話で、みらいたちといちかが会っているというのは……。

あれには僕も驚きました（笑）。でも、鷲尾天プロデューサーから「子どもたちにわかりやすくバトンタッチを示すものだから、整合性については考えなくてもいい」と言われたので、そこは気にしていません。

——今回、「サクラ」というオリジナルキャラクターを登場させた意図は？

大なり小なり「プリキュア」の新しいファンを開拓したいという思いがあります。今の若い子はSNSですぐに情報を共有できますから、そういう子たちが、「あの映画はすごかった」とか「観たことがない」と言ってくれたら、「プリキュア」を知らない世代も興味を持ってくれるんじゃないかと。そういう意味では、新規のキャラクターが登場しても面白いと思えるものにしたかったんです。

——本作は、映画恒例のミラクルライトを、実際に戦いの場面以外でも使っているところも新しいポイントと感じました。

映画館で観ているとわかるのですが、子どもたちはミラクルライトを振るときに、すごく必死なんです。彼女たちにとってプリキュアは架空の存在ではない。だからこそ、より彼女たちにプリキュアとつながってほしいと感じて、今回はスクリーン内のキャラクターからの語りかけを多めにしました。

——CGに変わるシーンで、あえてプリキュアたちが自分たちの容姿の変化に気づくのも、面白い演出ですね。

CGをセルの見た目に寄せて、違和感なく続かせようかと考えた時期もあったのですが、ABCアニメーションの西出将之プロデューサーから「せっかくだから、それぞれのよさを描こう」というオファーがあって、じゃあCGはCGで、セルの作画は作画で面白いことをやろうと、しっかりと演出を分けました。

——今作はCGパートもかなり多くなったと思いますが、これまで以上にCGパートで挑戦したことはなんですか？

これまでのCGではなかなかできなかった心情芝居には、すごく踏み込んでいると思います。セルの作画は「キラキラ☆プリキュアアラモード」に寄せているのですが、作画とCGを完全に分けるということで、CGパートでは今まで観たことがないような意外な戦い方や動きをさせています。今回、登場するキャラクターがみんなボケ倒すので、子どもたちにはぜひ心のなかで「なんでやねん！」とツッコんでほしい（笑）。これは見慣れていないCGパートだからこそできる、面白い演出だったなと思います。

——CGの動きといえば、鴉天狗がかなりなめらかに動きますよね。

鴉天狗の動きには、かなりこだわりました。CGとはいっても、アニメ作品の場合、1秒あたり24コマのフルコマを使って動いていないことが多いのですが、鴉天狗だけはフルコマで動いている。そうすることで、動きは〝ぬるぬる〟しますから、登場して動くだけで空気が変わるんです。不気味な感じで、鴉天狗の敵らしさを表現できたのではないかと思います。

——改めて振り返って、今回の映画を作ってみた感想を教えてください。

セリフで語らせるところと、絵で状況描写するところを完全に割り切って作るという試みもしました。語らずに絵で観せたほうがいいシーンは、あえてセリフを入れていません。『映画Go！プリンセスプリキュア Go！Go!! 豪華3本立て!!!』で「プリキュアとレフィのワンダーナイト！」を作ったときに、フローラが意図せずにゼツボーグをボウリングのように倒して「ストライク！」と言うセリフがあったのですが、子どもたちにはわかってもらえなかったんですね。小さな子どもを言葉で笑わせるのは難しいんだなと思って、説明を極力排除して、楽しいシーンは絵だけでも楽しいと思ってもらえるようにしています。それから今回、モノローグをかなり効果的に入れました。僕の映画においては、モノローグでだいたい一番言いたいことを語っているので、そこに注目してほしいですね。そして、セリフを聞いて感じたことを各自で持ち帰って、苦しかったりしんどかったりするときに、頑張ろうと思えるものを感じてもらえたらうれしいです。

——では、最後にファンに向けてのメッセージをお願いします。

僕はこの映画を「〈プリキュア」の映画はこうでなければいけない〉という固定観念に穴を開けられたら」という思いで作りました。「プリキュア」の映画はまだまだ進化していける、可能性が広がっていけるタイトルなんだと、少しでも感じてもらえたらうれしいです。個人的には、50人のプリキュアがいても面白いと思ってもらえる話を作れる自信はあるので、いつか挑戦してみたいです。

キャストインタビュー1

キャラクターを演じたキャストが本作への熱い思いを語る！

Rie Takahashi



Profile／【たかはし・りえ】2月27日生まれ。埼玉県出身。主なアニメの出演作品は、『それが声優！』（一ノ瀬双葉／息の根コロリ役）、『Re:ゼロから始める異世界生活』（エミリア役）、『この素晴らしい世界に祝福を！』シリーズ（めぐみん役）など。

高橋李依



キュアミラクル　朝日奈みらい

私は世界で一番『まほプリ』が大好きです！

「私の声がしそう」だと感じたみらい

――1年間お疲れさまでした。『魔法つかいプリキュア！』（『まほプリ』）の放送が終わった今の率直な感想は？

49話で終わっていたらさびしくて仕方なかったかもしれないけど、にぎやかな50話があったおかげで、今は「楽しかった」という言葉のほうが強いです。1話1話の思い出が鮮明に蘇るような50話が放送されたので、幸せな1年だったなと感じています。

――オーディションは、ミラクル／みらいとマジカル／リコのふたりが課題の役だったと聞きましたが、最初からミラクル／みらい役で受けたのですか？

はい。スタジオでのオーディションは、みらいとリコでの掛け合いもあって、自分の番が終わってからも、ひとり分だけリコを受ける方の相手がいない時間帯があって、たまたま2回分みらいのお芝居をしたことを覚えています。みらいを2回演じたあと、「せっかくだからリコも受けてみる？」と声をかけていただいて受けたのですが、自分的にその段階で「これは記念受験だな」と感じるほどの手応えのなさでした（笑）。

――ミラクル／みらいとしての手応えはあったのでしょうか？

受かった今だから言えるんですが、じつは最初にみらいのイラストを見たときに「私の声がしそう！」って思っていたんです。みらい役に決まらなかったら、私は今後プリキュアを演じることはないだろうなと思えるくらいに、みらいとの波長に心地よさを感じていて。

――実際に合格の知らせが来たときは？

寝起きで連絡を受けたので、本当に「寝耳に水」状態でした。これまでも何回か『プリキュア』シリーズのオーディションを受けさせていただいたことはありましたが、まさか翌朝に連絡がくるとは（笑）。

――オーディションの段階で、ミラクル／みらいへの印象はいかがでしたか？

私の小さいころも、好きなものに対しては人一倍興味を示して、ワクワクしていることを人と共有したがる、みらいのようなところがあったらしくて。自分が感じている「楽しい」をいち早くみんなに伝えたくて、リコと掛け合うシーンも、自分のテンポを押しつけてしまうくらいの、そんな女の子なんだろうなという印象を、自分と重ねながら持っていました。実際に本作のアフレコが始まってからも、リコと出会ったばかりのみらいに対する印象は、ほとんど変わりませんでした。私の母にしてみると、私はみらいよりも『ワクワク』が押しつけがましかった」と困っていたのですが（笑）、『プリキュア』の世界だったら、それがプラスに働き続ける女の子になれるのではないかと感じて、こんなふうになったらいいなという思いを詰め込みました。

――ミラクル／みらいは、『プリキュア』の物語を引っ張る「座長」的な役割ですが、プレッシャーは感じましたか？

じつは、座長としての不安よりも、ちゃんとみらいをお芝居で表現できるかということばかり考えていました。みらいを通して伝わってくるワクワクや、新しい現場で新しいスタッフやキャストの方とお芝居ができるワクワクが強すぎて、自分の浅いキャリアや、プリキュアになったという重みを気にしていませんでした。1クール終わったあとくらいから、みらいが勝手に動き出す感覚がして。みらいだったらこう感じるだろうなとか、こういうリアクションをするだろうなとか。先輩プリキュアのキャストの方から、「プリキュアは必要な人のところにやってくるんだよ」と聞いていて、これがその一歩なのかなと。私がみらいになれたというより、みらいが私の隣に来てくれたという感覚が強かったんです。

――みらいの印象に変化はありましたか？

変化を感じたのは、校長先生に「どんなことがあっても、みんなと一緒にいると決めたから大丈夫です」と言った27話です。あのときに「みらいはどのくらい先まで見通したんだろう」と考えるようになって。みらいは理屈がなく突っ走ることはありますが、何も考えていないのではなくて、何かを感じ取ったうえで、自分の判断で行動している子だと思ったんです。そこから「みらいの感覚」を軸に三塚雅人シリーズディレクター（SD）とも話し合いながら突き詰めていきました。いつかリコとはーちゃんと別れる日が来ることを、きっとみらいは誰よりも早く受け止めていたんだと思います。

――みらいはリコのような「立派な魔法つかいになる」という目標を持たない子ですが、それは決して先が見えていないというわけではないんですよね。

直線的な子ですが、意外と視野が広いんですよね。自分に目標がないことって、普通ならマイナスにとらえがちですが、みらいはプラスにとらえられる。3話や16話の「夢や目標がない」といったセリフも、反省とか自嘲なのかと思ったら、単にないんだよねというだけの話で。ひと言ひと言でみらいの考え方が発見されていくのが面白かったし、その言葉がパズルのようにつながっていって、「ザ・主人公」という型にくくられたくない、ひとりの魅力的な女の子だと思っています。

みんなのことが大好きなみらいを表現できるように

――みらいを演じるうえで、どんなことを心がけましたか？

とにかく、私もみんなを大好きでいることです。いつの間にかみらいに引っ張られて、リコ、はーちゃん、モフルン、育ててくれたお父さんとお母さん、おばあちゃんなど登場キャラクターはもちろん、役者の方やスタッフの方、『まほプリ』の現場が大好きになっていて。みんなのことが大好きなみらいを演じる軸は、最終的にとてもシンプルなものになりました。最初にみらいを見たときの話ですが、中学2年生のなかでは幼いほうかなという印象で、すごくかわいいなと思ったんです。そして、オーディションの段階から「みらいはふわふわとかわいく」と言われていたし、キャラクターデザインの

宮本絵美子さんの絵に声が合うようにと思うと、自分のなかでは限界に近かった、あの高いトーンでしゃべりたいという理想が生まれて。今まで、みらいくらいの高いトーンで演じることがなかったので、1年前の放送開始告知CMを観ると「すごく頑張っているなぁ」と自分でも恥ずかしくなります(笑)。1年を通して、高い声を出せるようになったのは耳で聞いて実感できたことですし、表現としては、楽しい、うれしい、明るいというポジティブな思いの幅が、とくにたくさん見つけられたと感じています。

──ミラクルに変身した際には、みらいとの演じ分けを考えていましたか?

初期の変身は、等身が高くなることをすごく意識しました。でも、みらいはどんどんミラクルと同じくらいに凛々しくなっていって。回を追うごとにそれを感じ、ミラクルの発言が等身大のみらいの強さになったと感じた際に、演じ分けはやめました。

──プリキュアといえば、変身の名乗りや決めの技(魔法)の叫びも印象的です。

「Go!プリンセスプリキュア」に女子生徒役で参加させていただいたときに、プリキュアのみなさんが名乗っているのをうしろから見ていたのですが、プリキュアを演じている声優の方がいることがうらやましくて。私にとって、その段階でのプリキュアは「夢の世界」に近いものがあったので、ふと、同じ職業の方が名乗りをあげているんだ……というのを実感したら、叶う・叶わないという感覚ではなく、本当にうらやましいと感じるものでした。

──ちなみに、自分とミラクル/みらいとで似ているところはありますか?

1年を通して、みらいがだいぶ自分に近寄ってきてくれたこともあって、似すぎているというか、似ていないところを探すほうが大変かもしれません。

──では、似ていないところは?

ホットケーキを取られても(36話)、私はあそこまで泣かないですね(笑)! みらいは泣き虫というわけではないから、あんなに激しく泣くのは衝撃的でした。

プリキュアは笑顔をつなぐ存在だと思う

──50話を振り返ってみて、とくにお気に入りのエピソードを教えてください。

9話と49話です。これをなくして「魔法つかいプリキュア!」は語れないと思っています。この2話は「別れ」を描いているという点で共通していて、その過程で取る行動が見どころだなと感じました。今の時代は、SNSや携帯電話などで簡単につながることができて、永遠の別れなんてなかなか感じられないものですが、永遠の別れに直面してしまった中学生は、どんな行動をするんだろうと。

──49話は、リコとの別れはもちろん、モフルンとの別れでもありましたね。

『映画魔法つかいプリキュア!奇跡の変身!キュアモフルン!』でも、モフルンは一度ぬいぐるみに戻ってしまった。そんな経験もしたモフルンが「みらい、リコ、はーちゃん、大好きモフ」とモノローグで語りかけていると思うと、とにかく泣けましたね。あのシーンは、秋の映画があったからこそ、より胸に響いたんだと感じています。

──49話といえば、みらいが走りながら「キュアップ・ラパパ……リコに……みんなに……会いたいよ」という、ささやきのような言葉も印象的でした。

正直なところ、あのセリフ、よく録ってくださったなと……。録音の川崎公敬さんは、「ふたりはプリキュア」のころから音響を担当されている、とても厳しいベテランの録音の方で。「セリフをもっときちんと音にして」とか「マイクに近すぎる」とか……役者としての姿勢や、声優としての技術まで、恥ずかしながらたくさん怒られていました。なので、普段だったらあのささやきは「聞こえない」って怒られるんじゃないかと、お芝居がすべて終わったあとに「やばい……」と思ってしまったんです。ただ、49話は泣きっぱなしのシーンだったこともあって、思いがあふれると、あの声量が精一杯で。実際にどのテイクが使われるかはわからなかったのですが、オンエアを観て「あのときの芝居をきれいに録ってくれてる!」と感激でした。49話のリコたちに会いたいと叫ぶシーンは、とくに私のペースや呼吸で収録をさせていただいたのですが、スタッフの方は私がどこで、どのくらいの大きさで叫ぶかわからないから、ものすごく気づかってくださったと思うんです。みらいとして思いを吐露することだけに集中させてくださった周りのみなさんには、本当に感謝しかないです。

──みらいの口元だけを映すという演出も憎かったですね。

そのシーンは原画の板岡錦さんを筆頭にこだわって絵にしてくださったシーンなんだそうです。どの泣き顔を切り取っても、みらいが美しく見えるように、持てる力をすべてに込めたとおっしゃってくださって。アフレコの段階で絵もほぼあがっていたし、さらにそこから私の声に合わせようという形にしてくれて。本当にうれしくて自慢のシーンです。

──それを受けての、楽しい50話でした。

みらいが「ヤミー」と言うシーンがあるのですが、きっと海外に行くお母さんの仕事を手伝っている大学生なので、学部もグローバル系にいるんだろうと思って、あえてネイティブな感じで発音したのですが、オンエアを観たら唐突で笑っちゃいました(笑)。きっと49話でみんなと別れたときから「ワクワクもんだぁ」と言わなくなった毎日だったんじゃないかなと思うんですよね。それを取り戻すことができて、さらにみんなとまた再会できて、当時の気持ちを全身で感じている姿が見られてうれしい50話でした。

──ちなみに、本作のアフレコで印象に残っていることは?

13話のモフルンとはーちゃんが四つ葉のクローバーを探しているとき、モフルンがアドリブで「ないねー」って言ったのがツボにハマりました。齋藤彩夏さんの声はモフルンなのに、何かがおかしいなって思ったら「モフ」がついてないって(笑)。

──最終話を迎えて、今みらいに声をかけるとしたら?

感謝もあるし、大好きな気持ちも伝えたいんですが、分身みたいな感じもあって、自分に大好きって言っているみたいで恥ずかしくなりそうなので……。みらいに出会えた奇跡にありがとう、かな。

──そんな高橋さんにとって「プリキュア」とはなんでしょうか?

笑顔をつなぐ人だと思います。無理に笑顔にさせるのではなくて、笑顔を「つなぐ」というところがポイントです。「つなぐ」ということは自分も笑顔じゃないといけないと思うんです。そうしてどんどん笑顔が増えて、それを守っていく。それがプリキュアなんだなと感じました。

──改めて、1年間応援してくれたファンにメッセージをお願いします。

この本をここまで読んでくれた人は、全50話と映画も観てくれたのでしょうか。改めて応援していただき、本当にありがとうございます。役者として反省はあっても、みらいとしての後悔はないように、すべての話数に大好きを込めました。私は世界で一番「まほプリ」が大好きです! この大好きが、いつまでも、みなさんの笑顔とつながっていますように!

高橋李依からプリキュア&モフルンのみんなへ



堀江由衣さま

私では見えない、はるか先を走っている先輩なのに、いつもリコのように隣にいてくれたから、私はみらいでいられたし、由衣さんの隣が大好きな場所でした。先輩としても役者としても人としても大好きすぎるあまり「映画プリキュアドリームスターズ!」の収録のとき、ほかのチームの方と話している姿を見て思わずヤキモチをやいてしまって「私の由衣さんが……私も、もっとお話したい!」って思ってしまってごめんなさい……(笑)。おこがましいかもしれませんが、由衣さんにとって、大切な存在になれていますように! いつまでも仲よくしてください!



早見沙織さま

いつも、どんなときも、私が突っ走ってしまっても波長を合わせてくれて、遊びたいときには一緒に遊んで、真剣なときはその空気を大切にしてくださっていたのを、ずっと幸せに感じていました。沙織さんが見てくれている、沙織さんが待っていてくれる。そう思うだけで、頑張ろうって気持ちがたくさん湧きました。「沙織さんが愛しているこの現場」が、宝であり自慢であり、沙織さんが「まほプリ」で見せてくれる笑顔が大好きで、毎週、おうちに帰ってくる思いで足を運んでいました。これからも、沙織さんと、ただいまとおかえりの関係でいられたらうれしいです!



齋藤彩夏さま

みらいの明るさは、彩夏さんからあふれた明るさをいただいたものです。私自身は普段、人がいないと明るくなれないタイプだけど、どんな角度を向いても彩夏さんがいて、やさしさをいっぱい胸に直接届けてくれて、私が満たされて、みらいも満たされて。それでもあふれるほどに大切に大切に思ってくれたおかげで、座長としての私でいられました。子どもたちからの声援は、彩夏さんが照らしてくれた太陽があって、もらえることができたものです。たくさん愛を注いでくれて、ありがとうございます。全部全部受け止めて、力に変えることができました。大好きです。

キャストインタビュー2



Profile／【ほりえ・ゆい】9月20日生まれ、東京都出身。主なアニメの出演作品は、「〈物語〉シリーズ」（羽川翼役）、「初恋モンスター」（二階堂夏歩役）、「にゃんぼー!」（シロ役）など。

堀江由衣

キュアマジカル  十六夜リコ

『まほプリ』を来年も再来年も長く観てもらえたらうれしい

リコのツンツンした声のバランスが難しかった

——まずは、1年間お疲れさまでした。全50話、すべてを走りきった感想を教えていただけますか?

まず、ケガや病気をしなくてよかったなと思いました。1年という長丁場なので、最初はそちらを気にかけていたんです。でも元気に、無事に終わることができて本当によかったです。

——アフレコもすべて終わった今、『魔法つかいプリキュア!』が「終わった」という実感はありますか?

正直なところ、終わったという実感はあまりないんです。アフレコが終わってからも打ち上げがあったり新年会があったりイベントがあったり……集まる機会があったので。49話に関しては、だいぶ物語が終わった感じがありましたが、50話は「こういうドタバタが今後も続いていくんだろうな」という感じなので、終わった感じは全然していません。

——オーディションの時期まで振り返っていただきたいのですが、堀江さんはオーディションでは最初からマジカル／リコ役で受けたのですか?

最初はほとんど資料がなかったこともあって、ピンク（ミラクル／みらい）を受けました。掛け合いでのオーディションだったのですが、そこで「リコもやってもらえませんか?」と声をかけていただいたんです。掛け合いですから、ミラクル／みらいを演じたときに相手役としてリコがいて、そのときは「こういう子がいるんだな」というくらいの認識だったのですが、いざリコを演じるにあたりセリフを見てみると、クールそうに見えるけど、じつはクールを装っているだけで不器用な女の子なんだなという印象を受けました。

——実際、マジカル／リコ役でオーディションに受かったと連絡をもらったときの感想はどうでしたか?

掛け合いをやってみて、個人的にはリコのほうが好きかも、と思ったんです。好きなキャラクターを担当させてもらえると聞いて、うれしかったです。

——「プリキュア」は長期にわたる人気シリーズですが、シリーズの一員となったことで、プレッシャーのようなものは感じましたか?

先ほどもお話したように、役を演じることのプレッシャーもありましたが、まず気力や体力的な面での心配が先に立ちました。それから、小さな子どもたちが観る作品なので、その子たちが楽しめなかったら、食いついてくれなかったらどうしよう、みたいなドキドキ感はありましたね。でも、1話を観て、絵もかわいいしお話も面白かったので、それ以上の心配はありませんでした。

——マジカル／リコを演じるにあたって、どういったアプローチをしましたか?

アフレコが始まる前に「リコは素直になれない子で、魔法が下手なことがコンプレックスだけど、みらいと触れ合うことで変わっていく」というお話は聞いていました。リコは気難しいタイプの子なのかなとちょっと構えていたのですが、1話でほうきに振り回されながら飛んでいくシーンを観て、クールぶってはいても、表情は崩れるし、感情の振り幅もちゃんとある子なんだとわかって、少し安心しました。リコのコンプレックスって、魔法界だけのものではないんですよね。実技ができないことへのコンプレックスや、意固地になって頑なになってしまう思いは私のなかにもあるものだったので、感情移入はしやすかったです。シリーズ序盤のリコは「立派な魔法つかいになること」が目標で、理想の大人や魔法つかい像がしっかりとあったと思うんです。それになれない自分へのもどかしさや、立派な魔法つかいになるんだという強い思いが前面に出るといいなと思いながら演じていました。

——演じ方について、スタッフからのオーダーはありましたか?

直接こうしてほしいという感じではありませんでしたが、最初のころはリコとみらいとの距離感やさじ加減みたいなものを大事に演じさせていただきました。ふたりは少しずつ打ち解けていくので、打ち解けすぎてもいけないし、かと言ってツンツンしすぎると、リコはみらいのことを嫌いなのかと思われてしまいそうで。自由にやっているみらいにあっさりと追い抜かれてしまう歯がゆさ、悔しさ、ヤキモチのような気持ちを表現するのは難しかったです。

——「プリキュア」といえば、名乗りや決めの技（魔法）の叫びも欠かせません。実際に名乗ったり叫んだりしてみたときにスカッとするものはありましたか?

最初のころはミラクルとマジカルのふたり、中盤からはフェリーチェも加わって3人、『映画魔法つかいプリキュア!奇跡の変身!キュアモフルン!』でキュアモフルンも入って4人……ピッタリ合うと気持ちがよかったです!『映画プリキュアドリームスターズ!』では、最初のころよりも声がそろっていて、長くやってきたんだなぁと感慨もひとしおです。

リコはみんなに共感してもらえる子

——全50話の放送が終わりました。改めて振り返ってみて、マジカル／リコへの印象に変化はありましたか?

私のなかでは、あまり変化はないと思っているんです。リコはただ、みらいと出会ったころはちょっと大きなスランプに当たっていたことが原因で素直になれなかっただけなんです。リコが本来持っているやさしさや素直さが、みらいたちと触れ合うことによって解きほぐされて出てきた印象です。

——先ほど「リコのコンプレックスは魔法界の人だけのものではない」とおっしゃったように、マジカル／リコと堀江さん自身も似ているところは多そうですね。

そうですね。私にかぎらず、リコの境遇は観てくださっているみなさんにも共感してもらいやすい部分が多いと思います。強いてあげれば、私とはツンデレなところが似ているかもしれません。実家限定ですけど。私、実家にいるときはクールなんです（笑）。

——全50話を走り抜けた今は、みらいやはーちゃん、モフルンたちには、どんな印象を持っていますか？　それぞれのキャラクターについて教えてください。

みらいは天才肌なのか、いきなりすごいことをしだす子という印象です。でも基本は、まっすぐで天真爛漫。周りの人がついていきたい、一緒にいたいと思わせるような子なんだなと感じています。モフルンは、もうそこにいるだけで魅力的ですよね。するいとしか言いようがないです（笑）。声も動きも、モフモフ具合も全部がかわいくて、今モフルンで一番気になるのは、素材は何かということです（笑）。はーちゃんは、成長度合いもあっていろいろなことを超越している感じがします。純粋無垢ですし、成長が早すぎるがゆえに現代のことで知らないこともあるけれど、それが原因で生まれるトラブルもかわいい。マザー・ラパーパの力を受け継いだ存在でもあるので、一番深いところまで物事を理解しているようでもあるなぁと感じました。早見（沙織）さんの声の力があるのかもしれませんが、とにかく大きくなったなぁという印象を持っています。

——どのエピソードも印象的だったと思いますが、全50話のうち、とくに印象に残っているエピソードを今、挙げるとしたらどの話でしょうか？

とくに好きだったのは25話と34話と、44話で子どもになるのもかわいかったし、49話も忘れられません。25話は、みんなで海に行ったエピソードで、衣装チェンジが多かったのがうれしくて。水着はもちろんですが、カジュアルな服も髪形も普段とは違っていて、スタッフの方のリコたちへの愛情を感じました。子どものころにあまりできなかった「海に行ってみんなで遊ぶ」というのを体験できたのがうれしかったです。34話のまゆみちゃんの恋愛話は、台本を読んで泣いてしまいました。かなちゃんがまゆみちゃんの代わりに泣いているのを見てグッときました。44話は、変身に入る前の姿が小さいままだったのがすごく面白かったですね。いつもと同じだけど違う、遊び心のある回だったと思います。49話は、「まほプリ」を1話でも観たことがある人なら、絶対に観てほしい回です。

——49話については、1月に行われたBlu-ray第1巻の発売記念イベントでも、ファンの方に熱くプッシュされていたそうですね。

なんのために「まほプリ」を1年間観てきたのかといったら、私はあの回のためだったんじゃないかと思うんです。それもあって、イベントでは強めに言いました（笑）。じつは、私はモフルンはぬいぐるみに戻っちゃダメだろうと、ずっと思っていたんです。それは『映画魔法つかいプリキュア！奇跡の変身！キュアモフルン！』のときも同じで。すごく悲しくてたまらなくて、子どもたちに観せてはダメだろうと思っていたんですね。それをまさかTVでまたやるなんてと。目から星が消えていく様子が本当に悲しかったんです。

——でも、49話のBパートではリコやモフルン、はーちゃんが戻ってきて、50話はとても明るい展開になりました。

私的には、バッティさんやヤモーさんが救われていてよかったなという気持ちです。大きくなったリコもかわいかったのですが、ポニーテールだと少し印象がキリっとしすぎかなぁとも思って、髪形だけなら中学生のときのほうが個人的には好きです（笑）。もしかしたら、魔法学校の先生になったので、子どもたちにしっかりしたところを見せようとして、あの髪形なのかもしれませんが。

リコやみんなの日常はこれからも続いていく

——1年という長きにわたるアフレコだったと思いますが、印象に残っている出来事はありますか？

「プリキュア」の現場は本当に素敵で、みなさんがやさしくしてくださるんです。ですから、居心地もすごくいい現場だったなと思っています。ちょうど私のお誕生日のときに、みなさんから冷凍みかんをもらったことはすごく印象的でした。たまたま夏に冷凍みかんにハマっていたのですが、夏の終わりになると店頭から姿を消してしまって。自分が出演するラジオ番組でも「冷凍みかんがなくなった」と騒いでいて。それを覚えていてくれたりーちゃん（高橋李依）が「冷凍みかん券」をくれたんです。名前とか住所を書いてくれたら届くようにしますからって。それが手書きだったんですよ。もったいなくて使えなくて、結局メールで住所とかは送ったのですが（笑）、今でも食べきるのがもったいなくて、ひとつだけ冷凍庫のなかに残っています。

——全50話が終わった今、マジカル／リコにひと言、声をかけるとしたら、どんな言葉になりますか？

みんなの日常がTVに映らなくなるだけで、彼女たちの生活は普通に続いていくと思うんです。リコもこの先、魔法学校で学級崩壊とか起きちゃうかもしれないし、きっと悩んだり迷ったりを繰り返しながら、生徒たちと向き合っていくんだと思います。そう考えると、今は「ひとつひとつ、1日1日を頑張ってね」と伝えたいかな。

——1年間マジカル／リコを演じてきた堀江さんにとって、「プリキュア」とはなんですか？

それは『魔法つかいプリキュア！』しかないです。私にとっての「プリキュア」は『魔法つかいプリキュア！』以外の何ものでもないです。もう、タイトルも『魔法つかいプリキュア！』でなければしっくりこないくらいに、私にとっての「プリキュア」のすべてになっています。うちの子が一番かわいいって、こういうことを言うんですね。

——最後に、1年間『魔法つかいプリキュア！』を応援してくれたファンにメッセージをお願いします。

『まほプリ』は、とにかくいいお話だったと思います。それぞれのキャラクターも魅力的ですし、スタッフのみなさんもキャストのみなさんも素敵な方ばかりでした。毎話毎話が見どころ満載で、あげればキリがないくらい、全50話それぞれにいいシーン、好きなシーンを挙げられるほどです。ですから、今後も「プリキュア」は続いていくと思いますが、私としては「まほプリ」をぜひ、みなさんの心のなかで一番の「プリキュア」にしてもらって、Blu-rayやDVDなどで振り返ってもらえたらうれしいなと思っています。それ以外でも、たとえば自分にお子さんができたときや、小さな妹さんがいるようなら、ぜひ一緒に観てもらえたらと思います。きっと、『まほプリ』は来年観ても面白いと思いますし、そうやって長く楽しんでいただきたいですね。そしていつか、『魔法つかいプリキュア！リターンズ』でお会いしましょう。ありがとうございました。

堀江由衣からプリキュア&モフルンのみんなへ



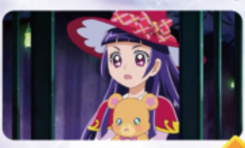
高橋李依さま

りーちゃんはすごくパワフルで、真面目で、頑張りやなところが、いつもすごいなと思っています。「まほプリ」の収録現場では台本をしっかり読み込んで、真摯に作品に取り組む姿勢と、何よりも突っ走っていくパワーに圧倒されていました。マジカルという役どころをいただいたからには、座長であるミラクルを全力で支えるつもりでいたのですが、むしろ支えられて引っ張ってもらえたので、りーちゃんの頑張りを本当に尊敬しています。



早見沙織さま

ずっとお話をしてみたいなーと思っていたのですが、なかなか機会がなかったなかでの今回の共演でした。はーちゃんが天真爛漫でありつつも不思議な存在になったのは、早見さんの力がすごく大きいのではないでしょうか。その表現力をとても尊敬しています。最終話のアフレコ後に「今度ごはんに行きましょうね」と誘ってもらえたのが、「私のためにプライベートを割いてくれるの!?」という驚きで、うれしかったです（笑）。おだやかで芯がある本当に素敵な方なので、一度ダメなところも見てみたいな（笑）。



齋藤彩夏さま

彩夏ちゃんは、いつも現場に元気と華やかさを与えてくれました。普段アフレコのときは、あまりスタッフの方と話すことは多くはないのですが、彩夏ちゃんがスタッフの方と仲よくなって、キャストとスタッフをつなぐ架け橋になってくれていたように思います。個人的には古い付き合いでもあるので、1年間改めて一緒にやれてうれしかったです。モフルンみたいな役は私にはできないので、とにかくすごいです！　尊敬です！

Saori Hayami

キャストインタビュー3



Profile／【はやみ・さおり】5月29日生まれ。東京都出身。主なアニメの出演作品は、「覆面系ノイズ」（有栖川仁乃役）、「エルドライブ【ělDLIVE】」（貝方美鈴役）、映画「聲の形」（西宮硝子役）など。

早見沙織

キュアフェリーチェ  花海ことは

何年も何十年もみなさんの心に残ってほしい

物語の進展と共に決まったことはの性格

——1年間の放送が終わりました。終わった実感はありますか？

全然そんな気がしていないんです。アフレコは終わって、スタジオに毎週行くことはなくなるんだとさびしさが押し寄せた日はあったのですが、翌週に打ち上げか何かがあって、新年もコンスタントに顔を合わせているので、まだ作品が続いているような感覚もあります。

——オーディションは、ミラクル／みらいとマジカル／リコがメインの課題だったとうかがいました。

そうですね。オーディションを受ける際は、ミラクル／みらいか、マジカル／リコかという感じでした。オーディションのときの記憶は少し曖昧なのですが、私はミラクル／みらいとマジカル／リコの両方を受けて、その後に「もうひと役あるんですが」と声をかけてもらって、フェリーチェ／ことはに出会いました。そのとき見たのは、赤ちゃんと成長したところ、それからフェリーチェの姿だったかな。ただ、ことはは成長するキャラクターということもあってか、オーディションの段階では、たしか面倒見がよくてみらいとリコを引っ張っていくお姉さん的なキャラクターになると聞いた気がします。実際の性格は、アフレコをしながら決めていったようでした。みらいとリコの妹的な立ち位置で、天真爛漫だと動かしやすいということもあったのかな。私も演じたことのないタイプのキャラクターだったので、序盤のアフレコはドキドキしながらスタジオに向かったのを覚えています。

——はーちゃんからことは、そしてフェリーチェへと、ある意味わかりやすく成長する子でしたが、実際に演じるときには、どのようにアプローチしましたか？

つねに再構築が求められるキャラクターで、0歳で生まれて、大まかに言うと1歳、3歳、6歳、14歳というイメージなんですね。さらにフェリーチェでタイプが変わりますし、絵を見ながら考えていった部分はあります。フェリーチェに関しては「変身後にお姉さんっぽくなります」と聞いていて、実際にことはのときとガラッと雰囲気が変わるので、どの部分でことはとフェリーチェがつながっているのかなと考えました。三塚雅人SDにそのことについて相談をしたら、「中身は別人ではない」と言われたんですね。フェリーチェになって凛とした雰囲気が出るのは、ことは自身が思い描く「みらいやリコ、モフルンを守れる人の姿」なのだと。プリキュアになったときに、しっかりしてみんなを守るという意識が、あの変化に結びついていると言っていただけて、しっくりきた感じです。

——はーちゃん／ことはとしての演じ方については、いかがですか？

はーちゃん／ことはは1秒ごとに表情が変わるくらいなので、それをひとつひとつ丁寧に拾っていくことを心がけました。15話では、学校で七変化をするのですが、こんなにもバリエーションが豊かなキャラクターなんだと思って、それに合わせていかないと……と考えて、かなりドキドキしました。アフレコ前には胃が痛かったくらいです。23話の「これからもよろしく！　おかえり、はーちゃん！」のあたりからは、またガラッと動き方が変わって、場を引っかき回すムードメーカー的な役割にもなるので、緊張しましたね。でも、自分が楽しい気持ちになるのが一番だと思ったので、現場の空気に助けられながらやりきった感じです。三塚SDは「こうしてください」とか「絶対こうじゃなきゃダメです」とは言わない方で。自分が作っていったものに関しては、一度聞いてもらい、そこから軌道修正をしていく感じだったので、すごく楽しく演じることができました。

——早見さんは、はーちゃんが登場する前、1話でリコが魔法をかける猫の役でも出演していますよね。

あの猫、48話にも登場したんですよね。気がつけば、OPの映像のなかにもいて、ちゃっかり重要なシーンに登場するキャラクターになっていっていたのが面白かったです。じつは、あれはスタッフの方のご厚意なんです。これからレギュラーで関わることになる作品だし、途中から参加をすることになると私が緊張するだろうと気づかってくださって、同じ空間で顔合わせも兼ねて収録しましょうという形で猫役を振ってくださったんです。とてもありがたかったですね。

——プリキュア役に決まったということで、プレッシャーなどはありましたか？

受かったと聞いたときは純粋にうれしくて、一方で実感もあまりなかったんです。台本をいただいて、表紙にプリキュアのみんなのイラストが描いてあるのを見て、「あ、『プリキュア』の台本だ」と認識した感じで。もちろん、出演はしているのですが「自分が知っている『プリキュア』なのかな？」という疑問は、かなり長くついて回りました。近所の子どもたちや母の知り合いの娘さんが観ているのを知ったり、はーちゃんのお面をお祭りで被っている女の子を見たりして、じわじわと実感していった感じです。

涙が止まらなかった49話のみんなとの別れ

——本作では、変身時の名乗りや決めの魔法の叫びも特徴ですよね。実際に演じてみて、いかがでしたか？

名乗りや決めの魔法は毎週収録しているので、先週と違うなと感じることもありました。自分の名乗りで、その日のテンションがわかったりして。佳境になればなるほど、思い入れがありすぎて力が入りすぎていたので、最後の変身シーンは、最初とは全然違うんじゃないかな。変身シーンに関しては、最初にみらいが不思議な空間に行ってミラクルに変身するシーンを観たときは、忘れていた胸の

高鳴りを思い出しました。「プリキュア」は（リハーサル）ＶＴＲをアフレコ当日にみんなで観るのですが、感動しすぎて帰宅後に母に熱弁したくらいです（笑）。男性のみなさんが、ヒーローの変身シーンに熱くなる気持ちがわかりましたね。

——セリフといえば、ことはみらいとリコの口グセを見事に受け継いでいます。

「ワクワクもんだし！」という口グセは、ふたりに育てられて大きくなったという感じが、すごく強く出ていますよね。はーちゃんの育ち方、育てられ方は全部観ていたし、はーちゃんは基本的に素直で、全部まっすぐ吸収していくので、すごくわかりやすかったですね。

——そんなフェリーチェ／ことはと自分との共通点はありますか？

はーちゃんほどに天真爛漫ではありませんでしたが、小さいときは公園で転んだりケガをしたりして帰ってくることがよくあったので、走り回って何かがしたいと叫んでいるところは、すごくわかります。それから年がら年中、食べ物を食べているところも似ているかな（笑）。私、なぜか食べ物をよく食べる役が多いんですが、はーちゃんはすごくおいしそうに食べるので、すごく素敵だなと思います。フェリーチェのようにここまでみんなをまっすぐに引っ張っていく強い女性というのは、私の憧れの対象です。フェリーチェの石はエメラルドなんですが、自分も5月生まれで誕生石がエメラルドなので、恐るべき縁を感じましたし、彼女に引き寄せられているなと思いました。

——全50話を通して、印象に残っているエピソードはありますか？

まずは45話。これはプリキュアらしさが詰まっている回だと思います。校長先生が、昔クシィさんが書いた本を見つけて彼の思いを知るという、あったかい回です。バッティさんや敵方の魅力もすごく素敵に表現されていました。はーちゃん的には、ドクロクシーさんと戦ったあとに帰ってくる23話かな。一度いなくなって翌週、森のなかに立っていたはーちゃんが、謎めいた人かと思いきや、明るい人だったという展開がすごく好きです。

それから本当に本当に49話が大好きです。ダビング作業の見学をさせてもらったのですが、そのときから大号泣していて、どの1分、どの1秒もいいんですよ。みらいが「キュアップ・ラパパ！　みんなに会いたい」と何度も何度も言うんです。台本にも何回言うんだろうと思うくらいに書いてあって、それを（高橋）李依ちゃんが言うたびに泣いてしまって。「ダメじゃない、気をつけなきゃ。モフルンは大切な友達でしょ」って言って帰ってくるリコもいいし、挿入歌も相まって本当に最高で。モフルンが「苦しいモフ」って言ったら、はーちゃんがやってきてみんながひとつになったので「よかったね～」っていう思いばかりで。号泣しまくりだったのですが、とくに涙腺を刺激したのはモフルンのモノローグですね。「モフルンは、『魔法つかいがいた』ってみらいに教えてあげたくて、一生懸命伝わるように願ったモフ」って言われて、うわあああって。さらに「みんな大好きモフ」で号泣して「いい最終回だった」となりました（笑）。でも、来週も収録があると告げられて、一体どうなるんだろうと思ったのですが、50話は「まほプリ」らしい大団円だったなと。コミカルなシーンがありつつも、「まほプリ」の温かさを感じられました。悲しい話でも重くなりすぎない、そこが「まほプリ」らしくていいと思います。『キラキラ☆プリキュアアラモード』（『プリアラ』）の宇佐美いちかちゃんが登場したときは、選曲担当の方がいちかちゃんの登場シーンに「プリアラ」のBGMを乗せてもいいか相談されていて。新しい作品への受け継ぎが素敵だなと思いました。

大好きとありがとうをはーちゃんに伝えたい

——アフレコで印象的だったことは？

スタジオの照明が、ある時期に交換されて、すごく光るものになったんです。その回だけ、みんなが入ってくるたびに「おおっ！」と驚いていたのが印象的でした。それから、女の子たちのハートを打ち抜いたのは、45話のオルーバさまがスパルダさんに「返して」ってやったシーン。45話はバッティさんがサラリーマンみたいなスタイルになっているなど、とにかく笑いのポイントもいっぱいあったのが印象的でした。感動的なシーンや面白いシーンは、みんな笑いや涙をこらえる声が誤って収録されないようにこらえていることが多かったですね。

——全50話が終わり、フェリーチェ／ことはにひと言、声をかけるとしたら？

「はー！」じゃないですかね（笑）。

——その「はー！」という言葉には、どんな思いを込めますか？

いっぱいありますが、愛情を込めたいです。「大好き」って言う意味の「はー！」かな。はーちゃんからだけでなく、「プリキュア」からいろいろなものをもらったと思うんです。普遍的に、人間として大事にしていたいものを教えてくれたので、「大好き、ありがとう」の意味を込めた「はー！」を贈りたいですね。

——ちなみに、早見さんが「プリキュア」から受け取ったものは？

いっぱいあります。私は個人的に、みらいのおばあちゃんが〝名言クリエイター〟だと思っているんです。とくに49話の「素直な言葉は力になる。思いがつながっていれば、それは奇跡を起こすのよ」という言葉が胸に響きました。素直な心の大事さとか、物事にまっすぐ向き合っていくことは素敵だなと思うので、これからもそうしていきたいです。45話での「離れていても、どこかでつながっていたのかもしれないわ」というものも、ある人との出会い、別れ、別れたときに出会う人など、円のようにつながっていくし、交差点のようにぶつかっていくのかとも思うので、信じることが力になるというのを学びました。

——全50話を終えたところで、早見さんにとっての「プリキュア」とは？

今考えると、変身シーンを観てどうしようもなく、知らない胸の奥のときめきを思い出したところにヒントがある気がします。何年経っても、私にとってはもちろん、リアルタイムで観た幼稚園生や小学生が私くらいの年齢になっても、ふとしたきっかけで忘れていた感情やドキドキワクワクを思い出させてくれるような作品なのかもしれないなと思いました。

——ファンにメッセージをお願いします。

イベントなどであのシーンがよかったという話をすると、ファンの方に全部伝わるのがすごくうれしいです。思い出を振り返るコーナーなどでは、私たちと同じように涙ぐんでくれたことに愛情の強さを感じますし、「まほプリ」のよさを共有できている気がします。そんなみなさんとだから、「まほプリ」の空気を作ってこられたと思います。重ね重ねありがとうございます。放送は終わりましたが、映像商品の発売もあるし、まだまだみんなで発展できると思うので、日常のふとした隙間に「みらいだったら、どうするだろうな」と考えたり、ぬいぐるみを見てモフルンを思い出したりして、何年も何十年もみなさんの心に残ることを願っています。ありがとうございました。

早見沙織からプリキュア＆モフルンのみんなへ



高橋李依さま

座長として、李依ちゃんが中心にいてくれたからこそ「まほプリ」ができたと思うし、李依ちゃんなくして「まほプリ」は始まっていないと思っています。みらいとしてそこにいてくれたから、私もはーちゃんやフェリーチェとして話している意識を強く持つことができました。李依ちゃんが台本を読み込んでいる姿にもキュンときましたし、監督とみらいのセリフについて話し合っている姿も素敵でした。座長、ありがとうございました。



堀江由衣さま

由衣さんは、なかなかしっかり話せないままその存在を目で追っていたのが、1年にわたる作品で一緒になれて、同じ舞台挨拶に立ったり、毎週アフレコで話し合ったりできて、個人的には舞い上がりそうな気持ちでした。気さくで気兼ねなく話してくれる姿が、本当にかわいいんです。「とてもかわいい」とかではなく「マジで超かわいい」んですよ。語彙が「ヤバイ」しかなくなるくらい大好きです。ときめきを、ありがとうございます。



齋藤彩夏さま

彩夏さんとは、私のアニメデビュー作でご一緒して、それから10年近く経って、相棒のような関係で一緒になれたことがうれしかったです。100万回「ありがとう」を言ってもたりないくらい、彩夏さんが現場の空気感を明るく作ってくれました。現実世界のモフルンみたいな存在です。私がセリフを間違えたりしたあとに、ひとりでマイク前で録るときのプレッシャーも、彩夏さんがやわらげてくれました。ありがとうございました。

キャストインタビュー4

Ayaka Saito



Profile／【さいとう・あやか】6月2日生まれ。東京都出身。主なアニメの出演作品は、『ジュエルペット』シリーズ（ルビー役）、『みなみけ』シリーズ（ヒトミ役）、OVA『げんきげんきノンタン』シリーズ（ノンタン役）など。

齋藤彩夏



モフルン

『まほプリ』には大事にしたい言葉が詰まっていました

「モ」と「フ」を一番話した1年

——まずは、1年間の放送が終わっての感想を教えてください。

あっという間でしたし、濃密でもありました。とにかくいっぱい笑ったし、「モ」と「フ」を人生で一番言った1年だったと思います（笑）。でも、私はそれを一番言えたことを誇りに思っています。私、今まで演じたキャラクターに語尾がついたキャラクターがいなかったんです。記念すべき初語尾キャラクターがモフルンだというのもすごくうれしくて。やたらとモフモフ言っていました（笑）。モフ、という単語は当初慣れることができるかなとも思っていたのですが、「私、モフルンだし」と思っていたからか、すごく自然に発することができたと思います。よくぞ「モフ」という言葉を思いついてくれたなと感謝しかありません。

——終わったという実感はありますか？

あまり湧かないです。50話で楽しく終われたこともあるのかな。まだまだ続いているような、いつかまたミラクルでマジカルなことが起こるんじゃないかなという期待もあります。だから、またモフルンに会えるように頑張っていこうと思っています。

——モフルン役もオーディションを受けられたそうですね。

オーディションを受けたあと、速攻でマネージャーさんに「ダメだと思います」って電話をしたくらい、手応えを感じられないオーディションでした。自分は精一杯やったのですが、セリフを言ったあとに振り返ったら、スタッフの方からのリアクションが何もなくて、心を動かせていないんだなと感じたんです。それが「モフルンに決まりました」と連絡をもらって、しばらく本当なのかとソワソワしていたのを覚えています。

——ちなみに、オーディション段階でのモフルンの印象は、いかがでしたか？

その段階では、クマのぬいぐるみという情報はあったのですが、イラストはなかったんです。セリフで「ハチミツ甘いモフ」みたいなセリフがあったので、とある有名なクマのキャラクターが頭をよぎりました。性格についての設定もふわっとした感じだったのですが、クマのぬいぐるみは好きだったので、決まったのはとにかくうれしかったです。

——では、実際にモフルンのイラストを見た感想は？

本当にかわいくて、ギュッとしたいというのが第一印象でした。モフモフ具合はたまらないし、この姿から自分の声が聞こえてくるのかぁと感慨深かったです。

——人気シリーズということで、決まったあとにプレッシャーはありましたか？

始まる前には、すごくありました。緊張はしていたけど、モフルンはモフルンだし、と言い聞かせて気負わずにできたかなと思います。1年間走っていくのがとにかくうれしくて楽しみでした。

——モフルンを演じるにあたっては、どういうアプローチで臨みましたか？

プリキュアの現場は、スタジオで映像を観て声を合わせる感じなので、すごく読み込んだり、作り込んだりしたわけではないんです。それよりも、休憩中にみんなと話をするなど、現場の空気感や作っていく瞬間を大事にしていました。ただ、モフルンは悟りを開いているような、なんでも受け入れられるパワーがあるので、どうしたらモフルンみたいにいられるのかなと考えはしましたね。みんなの熱を取りこぼさないようにキャッチすることを意識しました。それ以外だと、キャラクターが前に出すぎていないかを気にかけていましたが、「こうしてください」と言われることはほぼなくて、そのままを受け入れていただけた感じです。ただ、たまにモフルンが発する「モフルンジョーク」はなかなかハードルが高かったです（笑）。

——モフルンは悟りを開いているという言葉通り、みらいやリコたちよりも大人っぽくなる瞬間がありましたよね。

モフルンの言動は、私にとってもこうありたいと思うものばかりでしたね。49話で異変を察したリコにも「大丈夫モフ」と言える強さを表に出せるところが、本当に憧れで。それでいて、みんなの癒しになっていたらうれしいです。

——はーちゃんとモフルンのコンビは、とても微笑ましかったですね。

モフルンがはーちゃんを愛でる姿は、私にとっても癒しでした。お母さんポジションを体験できたのもうれしかったです。でも、はーちゃんが大きくなってからはモフルンのことを守ってもらえたりしたことも印象的でした。

——ちなみに、モフルンと自分とで似ているところはありますか？

手触り？（笑）あるいは食いしん坊なところでしょうか。普段から「甘いにおいがするモフ」とかなり言っていたので、私自身、においには相当敏感なんだと思います。きっと、1日に10回くらいは言っていたんじゃないかな。この言葉は作中でも、リンクルストーンを見つけるときにも使う言葉でしたね。

モフルンもしっかりと生きていたと思う

——全50話が終わって、モフルンに対する印象に変化はありましたか？

モフルンは、外見的に成長するキャラクターではなかったのですが、個人的には「大きくなったなぁ」という思いがあります。ひと皮もふた皮もむけたんじゃないかなと。みらいが生まれたときからずっと一緒にいて、みらいと話したいと思っていて、それがリコとの出会いで話せるようになった。でも49話で話せなくなってしまった姿を観て、ちゃんと生きたんだなという感覚はありましたね。

——49話のモフルンのモノローグは、涙なしでは観られません。

そう言ってもらえると、本当にうれし

いです。モフルン自身にも、話せなくなったさびしさはあると思うんです。でも、これまで動いて伝えてきたし、動けなくなって話せなくなっても、みらいの部屋にいるかぎり何かを伝えることはできているんじゃないかな。

49話でモフルンが話せなくなってからは、モフルンよりもみらいが心配でした。リコたちと再会するまでの数年間をどう過ごしていたんだろう、あれだけ動いて「モフモフ」言っていたモフルンがじっとしているのを見て、どんな気持ちだったんだろうって。私自身も、家にモフルンのぬいぐるみがあったので、見つめてみたりもしましたね。

そういえば、りーちゃん（高橋李依）が、「モフルンが『みらい、リコ、はーちゃん』って呼ぶときに、今まで過ごした時間を込めて呼んでくれるのがうれしい」と言ってくれたんです。モフルンはみらいとの距離がすごく近いけど、リコやはーちゃんとも、みらいとは違った近さがあったと思っていて、その思いを込めて呼んだんですね。たった3文字、2文字、5文字の言葉ですが、49話までに過ごしてきた時間を込めて名前を呼べたらいいなと思っていたから、りーちゃんからそう言ってもらえたのがすごくうれしくて。きっとモフルンは、みらいに抱っこされたとき、リコの肩を揉んだとき、はーちゃんと遊んだときの思いを全部あの言葉に詰めていたんじゃないかな。

――『映画魔法つかいプリキュア！奇跡の変身！キュアモフルン！』に続き、TVでもモフルンが話せなくなる展開になるというのは予期していましたか？

最初から、漠然と話せなくなるだろうなというのは自分のなかでも感じていました。だからこそ、話せるうちに思いを伝えておきたくて、たくさん話していたのかもしれません。

――モフルンは、変身のキーになるキャラクターなので、変身シーンでも毎回いいところにいるんですよね。

本当に贅沢だなと思いました。手をつなぐということ自体、大人になるとレアなことですし、モフルンはぬいぐるみだけど、じつは体温からみらいやリコの体調がわかったなんてこともあったんじゃないかなと思うと、夢がふくらみます。モフルン自身も、映画でプリキュアになっていますし、おいしいところばっかりもらっていますよね（笑）。

――プリキュアの姿もかわいかったです。

映画でプリキュアになると聞いたときは、ドッキリかと思っていたんです。でも、舞台挨拶にも立たせてもらえて、本当に贅沢という言葉しかない。私としては、自分の持てるものをすべて出して、『まほプリ』のみんなのことをより好きになってほしいと思って、収録にも舞台挨拶にも臨んだんです。

――モフルンのかわいさで、新たな魅力が伝わったと思います。

モフルンの口や、目のなかの星はぬいぐるみのモフルンのままだったのがうれしかったです。戦いだと小回りが利くし、意外と武闘派で、すごく強かったですよね。

『まほプリ』から大切なことを学んだ

――ほかのキャラクターへの印象は？

みらいは、りーちゃんそのままだと思います。お日様みたいだし、私もみらいみたいなお友達がほしくなりますね。リコはツンデレなのがたまりません（笑）。いたずらを仕掛けて「〇〇しないし！」って言ってほしくなっちゃう。はーちゃんは子どもみたいで、モフルンとしてはお兄さんやお姉さんになったような気持ちだったんじゃないかな。守ってもらったりもしたけど、娘というよりは妹みたいなイメージでしたね。

――TVシリーズの全50話を通じて、印象的なエピソードはありますか？

みんなと言いたいところですが、29話のモフデレラの回が熱かったです。それから11話で、はーちゃんと一緒に初めて学校に行った回。モフルンは、はーちゃんを守ろうとして凛々しい姿を見せてくれたし、ぬいぐるみになるのも上手になっていて、すごく好きな回です。

――アフレコで印象に残ったことは？

モフルンは戦いには参加しないので、うしろで収録の様子を見ていることも多かったのですが、りーちゃんはアクションのときに体がかなり動くんです。それが、うしろから見ていると面白かったかな。（堀江）由衣さんは、手が床と平行になって、ペンギンみたいでかわいいなぁと思って見ていました。（早見）沙織ちゃんは、スッと普段通りな感じでしたね。立ち姿が美しかったのは（井上）喜久子さん。スタイルがいいのはもちろんですが、台本までもが体の一部になったようで、すごく美しかったんです。〝うしろ姿イケメン〟は、遊佐浩二さんや内田夕夜さん。速水奨さんはシャーキンスみたいでしたし、中田譲治さんはマッスルポーズをキャストのみんなから指摘されていたのが面白かったですね。

――今モフルンに声をかけるとしたら？

「お疲れモフ」かなぁ。あと戦いが終わったところで、また洗濯してもらってください（笑）。みらいが生まれたときからなので、14年は一緒にいる計算だと思うのですが、きっと洗ったり直したりはされていると思うんです。それでもあれだけきれいなので、みらいがどれだけ大事にしてくれていたのかがわかるなぁと。

――もしかしたら、お風呂に連れ込まれていた過去があるかもしれませんね。

びしょびしょになってお母さんに怒られて、ドライヤーで乾かされたりしていたかもしれません（笑）。そう考えると、『まほプリ』の世界は、アニメでは描かれなかったけれど、まだまだ広がっていけるとも思います。赤ちゃんのときにみらいと出会ってからの年月を観たいです。きっと「初めて肩に乗った記念日」とか、「一緒にお出かけした記念日」とかもあるだろうなと。

――それでは、齋藤さんにとっての「プリキュア」とは？

忘れてはいけない、大事なことがいっぱい詰まっていた作品です。言葉にしたら恥ずかしかったり、表だっては言わなかったりすることも、しっかりと言ってくれた作品でした。7話で人魚の先生が「声は自分の気持ちを相手に伝えるものです」って言っていたのが、すごく印象に残っているんです。言葉にとらわれてしまうこともあるけど、声をもっと感じられたら、もう少し相手を知ることができるのかなと思うくらい、大事にしたい言葉がいっぱいありました。とても勉強になりました。

――最後に、1年間応援してくれたファンへメッセージをお願いします。

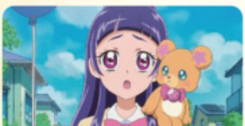
たくさんのスタッフの方がいて、キャストがいて、いろんな人の力が合わさって50話を走りきることができました。もちろん、応援してくださった方がいてこその1年だったとも思います。モフルンとして過ごせた1年は、私がこれまで28年間生きてきてベストな1年でした。自信になる、誇りになる役をいただけたと思いますので、支えてくれて、見守ってくれてありがとうございます。あわよくば、ファイルに保存するように『まほプリ』がひとりでも多くの方の心のなかに残ってくれたらと思います。

齋藤彩夏からプリキュアのみんなへ



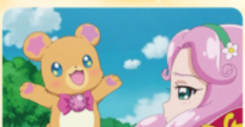
高橋李依さま

今までもいっぱい伝えているけど、言い尽くせないから、まずはありがとう。笑顔はもちろんだけど、りーちゃんの泣いた顔を見られたのもうれしかったです。なんだか距離がいっそう近くなった気がしたんですよね。周りの方からは「支えてあげてね」とも言われたのですが、りーちゃんは真ん中をしっかりと走ってくれていたので、ついていきたい、そばにいたいなと思いました。下を見ればモフルンがいるし、横を見たら私がいるよ。



堀江由衣さま

由衣さんとは3回目の共演なのですが、今でも私にとって憧れの存在です。由衣さんを見ていると、声優としての心意気や筋、ぶれない何かを感じるんです。私が、どうしたらセリフがもっと伝わるかを由衣さんに相談すると、私が持っていない価値観をくれたり、あと押しをしたりしてくれて、本当に素敵な先輩だなと思っています。別録りをお願いする手順の踏み方もすごくしっかりされていて、いつもずっと、かっこよかったです。



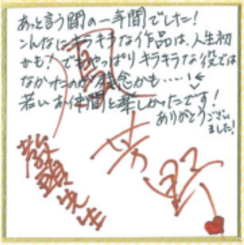
早見沙織さま

沙織ちゃんは、現場の空気をマイナスイオンで包んでくれていた気がします。プリキュアとモフルンは並びで座っていて、どうしても4人で話すことも多かったのですが、先輩への配慮も忘れず、ほかのみなさんとの架け橋になってくれていた感じです。同時にマイクに入ったときも、さりげなく手を背中に置いてくれて、キュンとしました。あと、沙織ちゃんのお母さんがモフルンを好いてくれているそうなので、お母さんに会わせてください（笑）。

まほプリマメ色紙

プリキュアたちを支えた魔法界、ナシマホウ界の人々や、敵キャラクターを演じたキャストのみなさまから、作品への愛がたっぷり詰まった素敵なマメ色紙が到着しました。

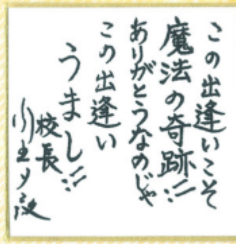
教頭／鳳芳野



魔法の水晶／新井里美



校長／内田夕夜



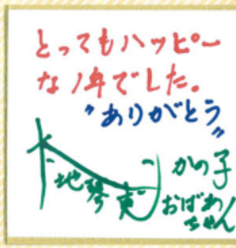
アイザック先生／桜井敏治



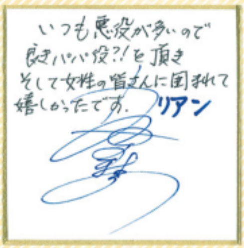
ジュン／金田アキ



結希かの子／太地琴恵



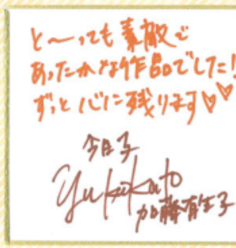
リアン／小原雅人



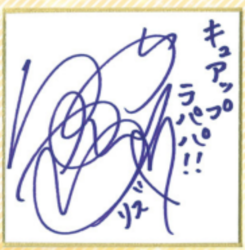
ケイ／吉岡麻耶



朝日奈今日子／加藤有生子



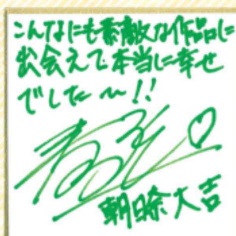
リズ／名塚佳織



エミリー／橋本ちなみ



朝日奈大吉／青木強



キャストおつか



◆ラブー／龍田直樹



◆ヤモー／高戸靖広



◆ドクロクシー／秋元羊介



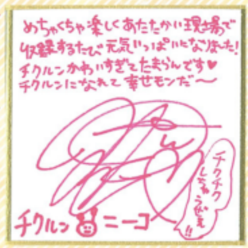
◆ベニーギョ／井上喜久子



◆バッティ／遊佐浩二



◆チクルン／ニーコ



◆シャーキンス／速水奨



◆スパルダ／小林ゆう



◆勝木かな／菊地美香



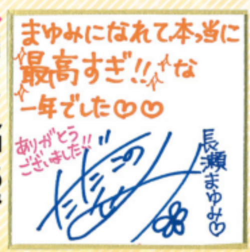
◆オルーバ／杉山紀彰



◆ガメッツ／中田譲治



◆長瀬まゆみ／多田このみ



スタッフインタビュー1

【シリーズディレクター】
三塚雅人

Profile／【みつか・まさと】アニメ演出家。東映アニメーション所属。主なアニメの担当作品は、『Go!プリンセスプリキュア』（絵コンテ・演出）など。

×

【プロデューサー】
内藤圭祐

Profile／【ないとう・けいすけ】2月3日生まれ。東京都出身。アニメプロデューサー。東映アニメーション所属。『ワールドトリガー』のアシスタントプロデューサーを経て、『魔法つかいプリキュア!』でプロデューサーを務めた。

スタッフが製作の裏側について、熱く語ります!

プリキュアたちが自分たちのために戦う物語にしたかった（三塚）

「手をつなぐ」というコンセプトを大事に

——本作におけるスタッフは、どのような形で決まったのでしょうか?

内藤　僕は、鷲尾天プロデューサーに呼ばれて「やって」という感じでしたね。2015年の春くらいだったと記憶しています。当時、僕は『ワールドトリガー』のアシスタントプロデューサーをやっていたのですが、まだ作品が動いている段階で声をかけられたので、最後まで同作を担当したいという思いもありました。でも『プリキュア』は大役ですし、大きなチャンスだなと考えて「頑張ります」と答えたと思います。

三塚　僕に話が来たのは、2015年の6月くらいだったかと思います。たしか『Go!プリンセスプリキュア』の21話か22話の編集作業の日でしたね。気がつけば依頼を受けるための外堀が埋まっていたなぁと感じたのを覚えています（笑）。

——今回、「魔法」というこれまでにはなかった超常的な要素が盛り込まれていますが、おふたりはどういった世界を描きたいと考えられたのですか?

三塚　じつは、僕のところに話が来た段階では、魔法、ふたつの世界、ふたりでの変身、モフルンを使っての変身、4つのスタイル、そしてはーちゃんが成長することは決まった状態だったんです。僕が入って新しく考えたことは、作中での魔法の扱い方や、作品全体を通してどんなドラマにしていくかということでした。

内藤　玩具的な提案で「ぬいぐるみで変身をしたい」という発想がありました。そのうえで、魔法をモチーフに取り入れようということになったんです。そこから先は、とにかくスタッフ陣の話し合いで、いろいろなことが決まっていきました。ぬいぐるみと手をつないで変身するなら、人数はふたりがいいだろうとか。そこから派生して「手をつなぐ」というコンセプトがあるなら、個々の違いを認めることで世界が広がるんだとか、多様性を見せたいという思いにつながっていきました。正直なところ「『プリキュア』は魔法少女モノではない」という、初期の『プリキュア』シリーズから一貫してきたテーマを覆してしまうということには緊張感もありました。

——ぬいぐるみで変身というコンセプトありきで人数がふたりに決まったということは初代の『ふたりはプリキュア』のオマージュというわけではないのですね。

内藤　そうですね。『魔法つかいプリキュア!』は13作目の『プリキュア』ですが、干支も一周したから初代のイメージをなぞろうという発想はありませんでした。もっとも、変身のコンセプトがあって、テーマがあって、人数がふたりと決まったところで、初代のことを多少意識することもありました。

　敵に対するスタンスは、三塚シリーズディレクター（SD）から提案がありました。日々を過ごしているなかで、よくわからないことを言って襲ってくるやつらを、自分たちの日常を守るためにぶっ飛ばすというのをやりたいと。そこは初代に近いんじゃないかなと思っています。



三塚　近年の『プリキュア』シリーズは、普通の女の子たちが困っている妖精のためであったり、人々を苦しめる敵に対して「戦わなきゃ」と立ち向かったりする「ヒーローモノ」としての側面に寄り続けた感があって。でも僕自身は『プリキュア』は必ずしもそれ“だけ”に縛られたものではない、ときにはもっと自分自身寄りの感情のストレートな表現として変身し、目の前の障害とぶつかり合うという形があっていいのではないかと考えました。結果としては、世界を救うことにつながるけど、プリキュアが使命感



に突き動かされるという話の作り方以外のアプローチを探ってみたいと思っていました。ただ、その試みについてもモフルンという存在から考えた部分があります。やはり、子どものころから大切にしていたぬいぐるみに「戦ってほしい」と言われるのは夢がないなと思いまして。

内藤　「魔法つかいプリキュア！」は、世界がふたつあって、前半と後半とで敵が変わって、さらに妖精役となるモフルンがプリキュアについては何も知らないという、かなりタフなストーリーになりましたね。

三塚　ふたつの世界をきちんと描くというテーマがありましたからね。そうなると、魔法界がどんな世界かを、みらいが体験しなければいけなくなるから、安易に魔法界を滅ぼせない。さらに、校長先生のようなすごい魔法つかいが存在している状況で、子どもたちを戦いの矢面に立たせたら、魔法界の大人たちはなんてひどいんだと思われてしまう。切羽詰まった状況を作りだしづらかったので、リンクルストーン集めも「いつか来るかもしれない災いに備えるため」という、ふわっとしたものになりました。



——その結果、魔法学校での補習授業やナシマホウ界での海の話など、観ていても楽しい話が多かったように思います。

内藤　終盤になって話が重くなったり、絵も展開もシリアスになっていったりすると、子どもたちが怖がって、TVから目を背けてしまうのではないかということは、いつも議論されていました。ですから、ギリギリまでやさしい世界、楽しくて明るい世界を見せていきたかったんです。その結果が、49話のAパートの最終決戦のあと、Bパートから50話にかけての物語になったと思っています。



——ストーリー構成的には、ドクロクシーと戦った1部、終わりなき混沌と戦った2部と明確に分かれていたり、最終話（50話）に次作「キラキラ☆プリキュアアラモード」の主人公・宇佐美いちかが登場したりと、新しいチャレンジもたくさんあったと思いますが、一番強く描きたかったのは、やはり「手をつなぐ」ということですか？

内藤　そうですね。先ほどモフルンありきで人数が決まった部分もあったとお話しましたが、それ以上に5～6人プリキュアがいると、ひとりひとりのドラマが薄くなってしまうなと考えたからでもあるんです。ふたりによる濃密なドラマを描いていきたいという思いもありました。ナシマホウ界と魔法界という、出自も価値観も何もかも違うふたりが出会って、手をつないで心を通わせてすごい力を発揮する。それが世界にも広がって、人と人とがつながっていく……というのを描きたかった。1年間のシリーズですから、子どもたちの反応を見ながら途中で軌道修正することも可能ではあるのですが、今回は初期に思い描いた通りの着地点まで行けたと思っています。ちなみに、2部構成にしたのは、データ的な話になってしまうのですが、夏休みになると子どもたちの視聴が離れてしまうという傾向があるんです。興味を持ち続けてほしくて、前半のリンクルストーン争奪戦から、世界を揺るがすような出来事を描こうという形になったんです。50話のいちかの登場に関しては、1月をオールスター月間にしようという案もありましたが、あまりにも「魔法つかいプリキュア！」感が薄れてしまうのではないかと話し合って、50話のみの登場になりました。



三塚　最終話に次のプリキュアが登場するということ自体は、これもまたSDになる前からの決定事項でした。当然ながら、その時点では次作がどんなコンセプトなのかはまだわかっておらず、詳細が耳に入り始めた夏ごろになっても、登場させるにあたって、まず50話自体を49話の展開の続きとするか、別個のドラマとするかは悩みどころでした。正直なところを言うと、50話のシナリオのプロットに取り組むまでは、話の内容およびキュアホイップの描き方はほぼ白紙でした。扱うからにはもちろん、面白くできたらとは思いましたが。

——「魔法つかいプリキュア！」の話自体は、49話のAパートで決着がついていて、Bパートから成長したみらいたちを見せるというのも、これまでのシリーズになかった一面でしたよね。

内藤　その後の彼女たちがどうなったのかというのは、想像の余地を残して終えるという手法ももちろんアリだと思いますし、そのほうが子どもたちも余韻に浸れるのかな……とは感じます。自分としても、最後に彼女たちの数年後の姿を提示したことが、いいのか悪いのかはわからないんです。ただ、成長した姿を描いたからこそ、50話でのにぎやかな引き継ぎ回ができたかなとも思っていて。それこそ「魔法つかいプリキュア！」らしい明るくて楽しいハッピーエンドにはなったし、みらいたちは何年経っても再会したら昔と同じ関係値で楽しくやっていける子たちなんだよ、というのを提示できたと思っています。

——ちなみに、作り手側としては「魔法つかいプリキュア！」と「キラキラ☆プリキュアアラモード」の作品世界に地続きという感覚はありますか？

内藤　50話は「感謝祭」みたいなノリなので、「オールスターズ」のようなものだと思っていただければ。

三塚　50話だけ「オールスターズ」のように独自の世界観を舞台にした、なかば別作品にする手もあったのですが、あくまで「魔法つかいプリキュア！　第50話」という作品として描きたいという思いが強くて。理屈は抜きの奇跡の出会いであると考えていますね。

——50話で、みらいやリコをあえて中学生の姿に戻したのはなぜなのですか？

内藤　ストーリー上で大きくなっているとはいえ、メイン視聴者は子どもたちですから、大人の姿のまま話を続けるというのが怖いなと思った部分がありましたね。魔法でうまい具合に中学生に戻してもらえたと思っています。

三塚　プロットの段階では、ドクロクシーの力で3人を子どもに戻すという案もあったのですが、悪い力で戻っちゃうのも夢がないなと思って、はーちゃんにいたずらしてもらいました。

敵のバックボーンはできるかぎり描かないように

——本作は、1話ごとにフィーチャーされるゲストキャラクターがほとんどいな

かったことも特徴だったかなと思います。

内藤　一般人にあまり危害を加えたくないというのは、三塚SDが強く意識していたところですね。だから、ヨクバールも無機物の合成で生まれる存在になって。

三塚　ぶっちゃけた話をすると、毎週20分という尺のなかで、季節のイベントごとや行事ごとを盛り込みたかったこともあり、怪物の発生源となるゲストを出す時間的余裕がなかったというのも大きな理由です。それから、今回のテーマである「魔法」は対になる存在がない。たとえば「愛」であれば「憎しみ」、「幸せ」であれば「不幸」、「夢」であれば「絶望」という対になるものがあって、負の感情や思いが敵につけ込まれるというパターンだったんですね。でも「魔法」の対になるものは、強いて挙げれば「科学」ですが、「科学」は悪いものではないので敵にすることはできない、というのもありました。あとは、先にもお話した通り「誰かのためにプリキュアが戦う」とは違った状況作りのため。だいたいこれらの理由から、敵がたまたまミラクルたちと出会って、いちゃもんをつけてきて、それをミラクルたちが追い返すという構図になったんです。

内藤　みらいとリコが手をつないで心を通わせて変身するのに対し、ヨクバールは無理矢理ふたつのものを合成するという点で、対比になっていましたよね。

――敵といえば、今回はプリキュアと敵との関係は深く描いていませんよね。

内藤　敵の事情に配慮をしてしまったり、感情移入をしたりすると、気持ちよくぶっ飛ばせないんじゃないかということは話し合いました。とはいっても、僕としては敵の事情を描かなかったことで、敵が魅力的に見えなかったとは思っていなくて。1部と2部とで敵が変わったこともあり、けっこうインパクトはあったんじゃないかと思っていますよ。

――敵はビジュアル的にも敵らしくて、印象に残りやすかったと思います。

内藤　前半のドクロクシー一味は、白目を作らずに黒目一色で統一しているところに〝怪人感〟が出ていたのではないかと思います。人間っぽさがあると、どうしても人間同士の争いのように見えてしまいますから、そこは三塚SDのこだわりでもありました。後半の「終わりなき混沌」絡みは白目が出ていましたが、見た目などを含め神々の領域のような存在にしたので、ドクロクシー一味とも人間とも明確に違った感じが出せたと思います。

――じつはドクロクシーが校長先生の旧友のクシィであるというのは、どの段階で決まったのでしょうか？

三塚　悪い魔法つかいとしてドクロクシーを立てて、中盤に向かって彼はどんな存在なのかと話し合ううちに、シリーズ構成の村山功さんからクシィを提示されました。でも、その段階では、クシィはミラクルとマジカルが倒しておしまいというキャラクターだったんです。それが、後半になってオルーバが登場するにあたり、彼の性格を考えた際に「人間が作ったものを興味本位でいじる」という設定が生まれて。そこでクシィの存在が強く活きてきた感じですね。後半になってクシィの存在感が増したのは、オルーバのおかげと言ってもいいと思います。

――一方で、デウスマストはいわば概念的な敵キャラクターですよね。

三塚　1部と2部とで敵の形態が同じではつまらないだろうというのがまずあって、前半が悪い魔法つかいなら、後半はそれを上回る存在でなければならないだろうと。魔法以上の不思議な力ってなんだろうと考えたら、神様めいた存在になってしまうんですよね。マザー・ラパーパと悪い神様が、人間を愛するか従わせるかみたいな対立をするという構図も考えたのですが、神様に寄りすぎると話が難しくなってしまうので、敵の主張は深く掘り下げずに、よくわからないもの、というところに落ち着きました。

バランスを重視したキャラクターデザイン

――キャラクター造形についてもうかがいたいのですが、まずはミラクル／みらいは、どういう雰囲気の子にしたいと考えられましたか？

内藤　デザイン自体はオーディションで選んでいますが、イメージ的にはふわふわした曲線的な感じですね。たしか、名前が決まっていなかったころは、ミラクル／みらいの原型を「白子」、マジカル／リコの原型を「黒子」と呼んでいたように記憶しています。白子は人間の子で、黒子は魔法界の子。黒子のほうが直線的なデザインで、と伝えていました。オーディションの際にキャラクターデザインの宮本絵美子さんが描いてくれたイラストは、完成版とほぼ一緒ですね。

三塚　ミラクル／みらいに関しては、「今どき魔法なんて……」と斜に構えたキャラクターにするか、「魔法だ、わーい！」って食いつくキャラクターにするか、どちらかをまず考えました。リアルに考えれば前者なのでしょうが、『プリキュア』という作品を考えると後者のほうがいいだろうなと。不思議なこともすんなり受け入れて、ちょっと抜けているけど頼りがいがある。憧れの魔法つかいに出会って、魔法つかいの悩みごとを知って、助け合い、そこから生まれる関係を大事にする子にしました。そういう子ですから、赤ん坊のころにもらったモフルンを中学生になっても大事にしていることに違和感はないかなと。そういった行動基準はすんなり決まったのですが、我々が悩んだのは、目標とか夢をどうするかということでした。物語の主人公としては、やはりなんらかの夢があったほうがいいのではないかなと。でも、これから魔法という超常的な力に出会う子ですから、あらかじめ何か具体的なものを持っていると、夢や目標を達成するために魔法を使うか使わないか、というところに重きを置いてしまう可能性があるなと思って。「魔法に頼るのはずるいか否か」という点に強くスポットが当たるのは避けたかったのです。結果として序盤は「目標がまだわからないんだけど、今は楽しいんだよ」という女の子になりました。後半になると、みんなをつなげることがうれしいということに気づき始めて、そういう人間になりたいとも思い始める。ただ、具体的にそれができる職業は現実には一概に「これ！」と絞れるものはありませんし、エピローグでは漠然と学生にして、具体的にどんな職業に就きたいかというのはぼかしました。

――それではマジカル／リコに関しては、いかがでしょうか？

三塚　デザイン的に直線的ということから、しゃきっとした女の子というイメージはありました。理想の自分像というものも持っているし、それに向かって頑張ってもいるんだけど、なかなかうまくいかない。そう考えてからは、1年かけて自然と理想に近づいていくようなキャラクターになりましたね。

内藤　マジカル／リコのほうが、悩みごとがあってコンプレックスがあって……とリアルだし、感情移入もしやすい女の子だとは思っていました。ただ、あくまでもミラクル／みらいが中心であって、ミラクル／みらいのほうが話を引っ張っていかなければならないということは再三、打ち合わせで話をしました。何かを決断したり、強い思いを持ったりするのは常にミラクル／みらいなんだと。

――フェリーチェ／ことはは、作中で成長するキャラクターでした。

内藤　フェリーチェ／ことはは難しかったですね。とりあえず、変身前と変身後のギャップを作りたかった。

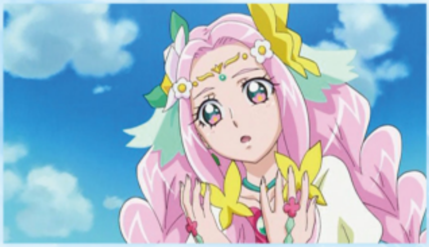


三塚　キャストのオーディションの段階でも、性格がふわっとしていたんですよね。ことはが大人びていたりする可能性もあったし、あれこれ考えながら作っていったんです。フェリーチェの性格に関してだけは、玩具用の収録がありましたから、それまでには決まりました。

　ミラクル／みらいとマジカル／リコに関しても、変身前の悩みを変身後に解決してしまえるくらい、もっとキリッとしているという案もあったんです。でも、そうなるとあまりにも変身前と変身後が別人になってしまうのではないかと危惧したので、ミラクル／みらいとマジカル／リコは頭身は変わっても性格は変わらない形にしました。ただ、フェリーチェは特殊な事情を背負っていますし、いっそガラッと変えてしまうのはどうだろう









子どもたちに楽しんでもらえる工夫をたくさん盛り込みました（内藤）

という話になり、変身前は朗らかで無邪気な感じに、変身後はキリッとした感じになりました。

内藤　変身前はみらい、リコ、モフルンに育てられたこともあって、甘えん坊な子になっていますよね。

――モフルンも、4人目のプリキュアと言っていいくらいに、印象の強いキャラクターになりましたね。

内藤　ほかのシリーズでいうと妖精の立ち位置だけど、実際は妖精とは呼べないという、すごく複雑な子になりましたね。あくまでも「ぬいぐるみ」ですから。モフルンは、計算されたかわいさやあざとさはないように、〝かわいい〟を煮詰めたような5歳児くらいのキャラクターにしたいと考えていました。でも、大人たちが集まって会議をすると、辛辣なことを言う「黒モフルン」を考えたがるんですよね（笑）。それは徹底的に止めました。

三塚　モフルンはみらいの成長を願って与えられた子ですから、言うなれば願いが人格を持ったような存在だとも思うんです。だから、みらいの幸せを願うし、魔法つかいに会わせるために頑張るし、みらいとリコがケンカをすれば仲直りをさせようとする。動けるようになって、みらいと一緒に成長した部分もあるとは思うのですが、大元にはみらいが健やかに、幸せになりますように、という思いがあるんですよね。だから、あざとさはなく、純粋に物事を考える子になりました。たしか、名前を「モフルン」にするか「モフリン」にするかで悩んだんですよね。でも「ふりん」はよくないだろうということで、「モフルン」になりました。

――ミラクルやマジカル、フェリーチェの名前は、どのように決まりましたか？

三塚　名前に関しては、みんなで案を出して決めました。なので、明確に誰が決めたかと言われるとわからないんです。ミラクルとマジカルに関しては、名前リストのなかにあって、ABCアニメーションの西出将之プロデューサーが、シンプルなほうがいいんじゃないかということで、すんなり決まりました。フェリーチェは、これも誰かスタッフが漠然と「きれいな言葉」を探して。たとえば「幸せ」をほかの国の言葉にしたらどうなるか、というのを探していくうちに決まりましたね。変身前の名前に関しては、たしか名前が先にあって、それから名字を決めたんだと思います。「みらい」というのは「魔法」に対するイメージで決めて。

内藤　家が石を扱っているということもあって、最初は「きせきの」という名字だったような気がします。でも、しっくりこなくて朝日奈になりました。

三塚　リコは、有名な魔法関係の映画や役者の名前などをヒントにして、当初は「リズ」だったんです。でも、なんだかこれもしっくりこなくて、結果「リコ」になりました。「リズ」はお姉ちゃんに引き継がれましたね。

――ことはは、元々は「はーちゃん」と呼ばれていましたが、ことはへの流れはどのように決まったのですか？

三塚　これもギリギリで決まった気がします。まず「はーちゃん」という名前は先にあったんですよね。そのあとに「フェリーチェ」が決まっていて、じゃあどうしようかと。ことはに関しては、名字を決めてから名前を決めました。フェリーチェのイメージから、花に関する名字がいいだろうということで「はなみ」。音だけが先にあって、漢字をどうしようかとなって、「花」はいいとして「み」をどうするかと考えて、一面の花が広がっているという意味で「海」はどうだろうということになりました。この段階では、たしか「花の海」の話は出てきていませんでしたね。名前は「はーちゃん」ですから「は」は絶対必要だろうと。それで試行錯誤して決まったんだと思います。

――魔法界やナシマホウ界の、ほかのキャラクターについてはいかがですか？

三塚　だいたいのキャラクターは、村山さんが構成の段階で考えてくれていたんです。魔法界での補習編にはこんなキャラクターがいるとか、ナシマホウ界のクラスメイトはこんな感じとか。名前も村山さんの案をいじらずにそのまま使いました。魔法界のジュン、ケイ、エミリーの3人は、わかりやすさを重視しましたね。姉御肌とか怖がりとか、すぐ忘れ物をするとか。そして彼女たちもみらいやリコと接することで少しずつ変わっていくキャラクターであってほしいなと思いながら作りました。ナシマホウ界のクラスメイトたちは、みらいにはリコ以外にも友達がいますよという紹介的な部分が大きいです。それがまゆみであり、男の子もいるよということでの壮太。かなは、魔法モノにありがちではありますが、主人公の秘密を目撃しかけるお約束のキャラクターです。ゆうとはクラスメイトのひとりという枠だったのが、いろいろあって仲間に入った感じですね。

内藤　ちなみに、イケメン枠の龍一くんという男の子が登場する予定もあったんですよ。尺の都合で出なくなっちゃったんですが。

三塚　本当であれば11話が初登場で、その後のキャンプに同行していたはずだったのですが、出番がなくなってしまったので、結果いなくなってしまいました。でも、座席もあるし、じっくり探せばどこかに映っているかもしれません。

――イケメンが出ると、主人公との恋の話を期待されるから、出さなかったのかなと思いました。

内藤　そういう恋の話は、まゆみがやってくれたので。

三塚　ラブストーリーもあるし、モテる男の子もいるけど、みらいとリコの恋の話は最初から作る予定はありませんでしたね。あくまでも、ふたりの絆の物語と言うことは強く意識していました。



4つのスタイルを作ったことへのこだわり

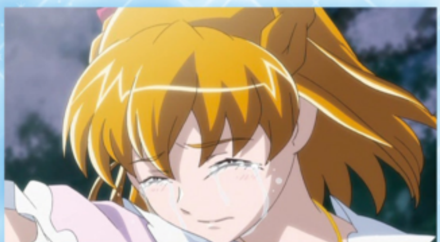
――本作は、基本の変身スタイルが4種類あるというのも新しかったですね。アレキサンドライトスタイルがあるものの、2段階変身はしないという。

内藤　2段階変身にしなかったのは、初期の企画の段階で、今日はどのスタイルで戦うのかを期待しながら観てほしいという思いがあった結果ですね。

三塚　そもそも4つのスタイルでスタートしたのは、ふたりだけだと番宣ビジュアルがさびしかったからです（笑）。

内藤　4つのスタイルは玩具との関係で最初に出てしまいますから。であればポスターやオープニングにもどんどん出していきたいというところですね。

――変身シーンに関しては、モフルンが必ずいなくてはいけないので、お話作りに制約があったのではと思います。



三塚・内藤　少しどころではなく、制約はありました（笑）。

三塚　モフルンの存在は、変身シーンのみならず、いろいろな面で大変でしたね。みらいとリコが意気投合して手をつなぐまでに持っていかなければいけない1話の展開も大変ではあったのですが、それ以降は一緒にいてくれさえすれば問題はありませんでした。でも、モフルンは魔法界ならみらいたちにベッタリくっついていられますが、ナシマホウ界だと動けることをバレないようにしなければいけないので、苦労がありました。

――ちなみに、手をつないで変身の掛け声をしたあと、どのタイミングで手を離しても大丈夫なんですか？

三塚　変身が始まってしまえば手を離しても問題はないんです。ただ、1話で手をつないで変身をする過程をすごく丁寧に描いたので、変身バンクもギリギリまで手をつないでいてほしいなと思って、放送のような形になりました。変身終わりのギリギリまで手をつないでいなければならない映像の作りにしたので、構図などは難しかったと思います。



内藤　プリキュアの人数が減ったので、変身バンクも楽になるかと思いきや、逆に大変になってしまいましたね。

三塚　変身バンクは、ミラクルとマジカルの衣装のパーツをなるべく均等に映していくことにも注意しました。

――4つのスタイルで決めの魔法も異なりますが、見せ方へのこだわりは？

三塚　決めの魔法は玩具の意向もありますが、今回は赤＝火とか、青＝水というのは極力控えめにし、むしろ石のイメージを重要視しました。ダイヤであれば、光や硬さですね。僕がやってみたかったのは、カウンター技なんです。襲ってくる敵を受け止めて反射するということをメインに、ダイヤモンド・エターナルは考えました。敵がいないと成り立たない決めの魔法というのもすごいですけど（笑）。ほかの魔法は、全部ダイヤと同じではつまらないので、ルビーは摩擦のパワーを利用して敵をリボンで包み込むようなもの。サファイアはストーンの登場順で言うと最後から2番目で、どうしても目立ちにくいんです。ですから、あえてストレートにビームを発射する魔法にしました。トパーズは、ほかの3つの魔法を踏まえつつ、杖の存在をもう少しアピールしたいという要望もあって、杖を使った電気の反発、レールガン的に敵をふきとばす形にしました。

――アレキサンドライトスタイルについても教えてください。

三塚　13番目のリンクルストーンがあって、プリキュアの3人が最後の変身をするというのが決まっていたので、そこから考えました。

内藤　アレキサンドライトは希少価値のある不思議な石ということで、最初から最後の石に決まっていましたね。

三塚　デザインは、ダイヤスタイルの延長線上で、魔法の帽子が大きくなっているイメージですね。フェリーチェは、背景にある神様の娘的な要素を活かして、女神に近い存在にしたいとキャラクターデザインの宮本さんに伝えて作ってもらいました。アレキサンドライトスタイルが、変身してすぐ魔法を使うタイプなのは、最初から決まっていたと思います。

――「キュアップ・ラパパ！」という言葉は、どのように決まったのですか？

内藤　あれは村山さんのシナリオにしれっと入っていた気がします。子どもは半濁音が好きだからという理由でしたね。

三塚　音的にはプリキュアに通じるものもあるからいいのかなと思いました。単語が出た時点で、いけるかいけないかを確認して、すんなり決まりましたね。

内藤　「キュアップ・ラパパ！」に関しては、使う魔法によって変えるのかも議論はしました。でも、結果として魔法の言葉は統一したほうがいいだろうということになりました。それが浸透したので判断は間違っていないと思います。

――プリキュアといえば、名乗りの口上も印象的ですが、こちらはどのように決まったのでしょうか？

内藤　1話のシナリオの段階ではまだ決まっていなくて、村山さんが「〇〇〇の奇跡」「〇〇〇の魔法」みたいにブランクにしてきていたんです。そこで何にしようかと会議になって、僕が「ふたり」はどうですかと提案しました。採用されたのがうれしかったので、すごくよく覚えています（笑）。フェリーチェはどうやって決まったんでしたっけ？

三塚　会議でホワイトボードにいろんな単語を書き並べて、組み合わせて決まったんだと思いますよ。

内藤　「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ」が3つの単語で構成されているから、フェリーチェも「フェリーチェ・なんとか・かんとか」と3つになるだろうなとは漠然と思っていました。花のモチーフだから「フラワー」が入って、それから「ファンファン」が決まった感じだったかな。「ファンファン」はこれから戦いに臨むにあたり、楽しんでちゃダメだろうという意見もありましたが、「FUN」ではなく「ファンタスティックファンタジー」の略なんですと、強引に押し通したような気がします（笑）。

バランスで選んだキャスト陣

――プリキュアのキャストに関しては、毎年オーディションで決めていますね。

内藤　『魔法つかいプリキュア！』は3人のプリキュアとモフルンがオーディションの対象でした。

――モフルンはプリキュア枠ですか？

内藤　そうですね（笑）。今年はプリキュアが例年より少ない3人でしたし、余裕があったからモフルンもオーディションになったのかもしれません。

三塚　モフルンも大事な主力でしたから。

――ミラクル／みらいが高橋李依さんに決まったポイントは？

内藤　元気な声というのが、まずありました。オーディション時のセリフは、変身前と変身後のものがあったのですが、高橋さんは変身前と変身後の区別がしっかりされていたし、元気もあって若手というのも今回は大きかったかもしれません。1年を通して一緒に成長していく姿が見えたので。

三塚　ミラクル／みらいとマジカル／リコを決める際は、キャリアのある方と若手で組み合わせるか若手同士にするか、もしくはキャリアのある方同士にするかを考えたんです。今回は、人を育てる場としても考えた結果、高橋さんを選びました。

――マジカル／リコ役の堀江由衣さんはキャリアがある方ですよね。

内藤　ミラクル／みらいが決まって、それから周りをどうしていこうかという決め方でしたね。ミラクル／みらいとの声のバランスは考えますが、もちろん役者として声がキャラクターのイメージに合っているかということが最重要ポイントでした。

三塚　絞られた候補のなかで、しっくりくるのは誰かなと考えていくうちに、自然と決まった形ですね。

――ことは／フェリーチェに関しては、いかがですか？

内藤　早見沙織さんは別の役で受けていたところ、急遽その場で演じてもらいました。すごくうまい方だなと思ったので。

三塚　プリキュアのオーディションではわりとある形のオーディションらしいのですが、しっくりきてよかったです。

――そしてモフルン。

内藤　モフルンは、性別がモフルンなので、男の子すぎず、女の子すぎず、中性的な感じで。

三塚　元気でかわいいんだけど、活発すぎない、どちらかというと赤ちゃんぽさも持ちつつ、冷静でもあるというすごく絶妙なバランスを求めた結果が、齋藤彩夏さんになりました。

スピンオフや続編を作りたい

――改めて50話を振り返ってみての感想を教えてください。

三塚　よく、ゴールまでたどり着けたなという思いです。無事に最終話までオンエアされて、満足です。

内藤　準備期間を加えると2年弱『魔法つかいプリキュア！』に携わってきたのですが、あっと言う間に過ぎた印象です。走っている間は冷静に振り返るようなことはなかったんですけど、最近は大変だったことや楽しかったことを思い出すことも多くなりました。『プリキュア』って毎年話は変わっても、「昨年も似たようなおもちゃを買ったのに」と感じる親御さんもいると思うんです。でも、毎夏に東京・池袋で行われているイベントが大盛況で、『魔法つかいプリキュア！』のイベントに行きたいと言ってくれる子が多かったんだろうなというのが実感できて、すごくうれしかったですね。

――エンディングの映像が毎月変わっていたのも、子どもたちには受けがよかったのではないかと思います。

内藤　エンディングを製作したデジタル部からの提案で実現したのですが、すごくよかったですね。モフルンがメインで、プリキュアは足しか映っていないような贅沢な月もあって（笑）。元々は子どもたちが飽きないように、楽しんでもらえるようにというところがスタートでしたが、個人的にも楽しいエンディングになったのではないかと思います。

――最後に、1年間観てくださったファンに向けてメッセージをお願いします。

三塚　1年間、ご視聴ありがとうございました。おかげさまで無事、完走することができました。TVシリーズは終わりましたが、またいずれ、何かの形で『魔法つかいプリキュア！』に関係する何かができればいいなと祈っております。

内藤　1年間、応援していただき、ありがとうございました。1年で終わった『魔法つかいプリキュア！』ではありますが、なんらかの形で、続編とか、スピンオフとかできたらいいなと思っています。この『魔法つかいプリキュア！』のTVシリーズ全50話と『魔法つかいプリキュア！』が関わってきた春、秋の映画もひっくるめて、みなさまの心にずっと残る作品になれるといいなと願っております。いつかまたどこかで、お会いしましょう。





スタッフインタビュー2

【シリーズ構成】

村山 功

みらいやリコを見ている子どもたちが親しみを持ってくれる子にしたかった

Profile／【むらやま・いさお】千葉県出身。脚本家。『ふたりはプリキュア Splash☆Star』で『プリキュア』シリーズに参加後、今作で『プリキュア』シリーズの構成を初担当。『プリキュアオールスターズDX3 未来にとどけ! 世界をつなぐ☆虹色の花』のノベライズも手がけた。

作品世界の魔法は万能なものではない

――村山さんは、これまでも『プリキュア』シリーズに携わっていますが、今回はどのような経緯でシリーズ構成を担当することになったのですか?

鷲尾天プロデューサー、内藤圭祐プロデューサーから「(シリーズ構成を)やりませんか?」と言われたので、「はい」と返事をした感じです。

――オファーがあった段階で、設定はどのくらいまで決まっていましたか?

「魔法モノ」でいくということは決まっていました。それから、「最初はふたりでいきます」ということも。ふたつある世界をつなぐという話も決まっていて、そこから物語をどう組み上げるかを、ほかのスタッフと一緒に考える形でした。

――『プリキュア』といえば女の子たちの肉弾戦というイメージが強いなか、「魔法」と聞いたときの感想は?

「魔法を使っちゃうと、プリキュアに変身しなくてもいいじゃん。魔法で戦えちゃうじゃん」という印象でした(笑)。でも、プリキュアが使える魔法は、魔法のなかでもとくに優秀な強いものという設定で作って、普通の魔法つかいでは倒せないような敵が襲ってくるということにすればいけるかなとは思いました。『魔法つかいプリキュア!』における魔法は、万能なものではない」と。

――たしかに、魔法つかいでありながら、リコは実技が苦手でしたね。

今までのプリキュアって抜けたところもあるけれど、わりとしっかりした子たちが多かったと思うんです。でも、打ち合わせのときに、ある女性スタッフから「完璧な女の子は女子からすると感情移入がしにくい」という話が出て。「憧れはするけど、友達になりたいとは思えないのでは」と。僕は、それがすごく貴重な意見だと思ったんです。やはり、視聴者層を考えると子どもたちが「自分たちと同じだ」と思って親しみを持ってくれないと意味がないですから。そこで、リコは「自分の留年がかかっているからアイテムを探しに行く」という今までにないキャラクターになっていきました。

――リコは紫色の系譜から、クール系のキャラクターかなと思っていました。

たしかに、ダメなところがあるのは今までの紫の子にはなかったかもしれません。みらいに関しても、そこまでできる子という設定ではないのですが、みんなの気持ちをつないでいく要の存在なので、物語が後半にいくにつれ、オールマイティーな感じになったかなと思います。

――みらいは勉強が嫌いなタイプではないですからね。

みらいのような突っ走るタイプは勉強が苦手という子もいますが、彼女自身は学ぶこと自体は好きなんですよね。

――このままキャラクターについてうかがいたいのですが、当初はふたり体制ということで、初代の『ふたりはプリキュア』を意識した部分はありましたか?

『ふたりはプリキュア』のときは、ホワイトがおしとやかな優等生で、ブラックははっちゃけた明るい子というのがすごくしっくりきていた時代だと思うんです。ただ、今は時代的に競合作品もあるし、ピンクは元気で紫はクールという2タイプだけに分けられるかといえば、それは難しい。そんなこともあって、今回はピンクだから元気とか、紫だからクールとかにはこだわらないようにはしました。元気なみらいだって落ち込むことはあるし、クールぶっているリコもはっちゃけるときがあるし、リアルな人物として描けたのではないかと思います。



――みらいは「ワクワクもんだぁ!」、リコは「〇〇だし!」というログセが特徴的でもありました。

これは、視聴者の子どもたちにとっても記号的にわかりやすいものがあったほうがいいかなと思って考えたんです。最初に僕が書いたものが、とくに議論されることもなくそのまま残ったという感じでしたね。ただ、三塚雅人SDからは「物語の展開が進んでいくにつれて、たぶんそこまで出てこなくなると思うので、あんまりプッシュしないでね」と言われました。僕も、物語がシリアスになっていけば、ログセ的なものは消えていくのが普通だと思っていたのですが、意外と最後まで残っていたような気がします。



――はーちゃんの存在が、ログセを残したような感じもしますね。

「ワクワクもんだし!」というセリフもありましたしね(笑)。じつは神様的存在のマザー・ラパーパの思いを受け継いでいるって、過酷な運命だと思うんです。ただ、僕としてはマザー・ラパーパの思いを受け継いでいることに関しては、作中で細かく描くことではないと最初から考えていました。本作は最後まで明るく突っ走りたかったので、はーちゃんはあまり悩ませたくないなぁと思っていました。はーちゃんにとっては、小さなころからお世話をしてくれたみらいとリコ、そしてモフルンこそが母親的な存在です。母としてみらいたちがいるので、はーちゃんは出自についてはそこまで悩まない、自然と明るい女の子になってくれましたね。

――妖精的な立ち位置であるモフルンは、どういった性格像を考えていましたか?







モフルンは、当初４歳くらいの女の子という想定でキャラクター像を作っていました。ただ、あまり子どもすぎると、中学生であるみらいやリコたちの気持ちもわからないと思って。結果、実際に動かしてみたら、６歳か7歳くらいの印象になったなと感じています。

モフルンは、プリキュアの変身に大きく関わるキャラクターでしたから。みらいとリコと手をつなぐ、しかもセンターで。言ってみれば3人で変身しているわけで、これまでのシリーズの妖精的なキャラクターのなかでも、かなり重要なポジションにいます。だから子どもたちに大好きになってもらわないと困る。そうかと言ってあざとくしすぎると嫌われてしまうし、そのバランスにかなり気を使いました。結果的には、４人目のプリキュア的存在として認めていただけたようなので、正直なところホッとしています。

――ちなみに、変身しないはずのモフルンが、『映画魔法つかいプリキュア！奇跡の変身！キュアモフルン！』で変身したときの感想は？

自然な流れだったかなと思います。事前に神木優プロデューサーから「モフルンをプリキュアにしたい」という話は聞いていましたから。お願いしたのは、ことはがフェリーチェになるのが決まっていたので、ことはがフェリーチェに変身するまでは、モフルンがプリキュアになることを宣伝しないでくださいということだけです。身近な子がプリキュアになる展開は、フェリーチェが初めてにしておきたかったんです。

――ちなみに、ＴＶシリーズにもキュアモフルンを出そうという意見はあったのでしょうか？

それはありませんでした。出すこと自体は問題ないとは思うのですが、映画を観ていない子にしてみたら、なんでモフルンがプリキュアになっているかがわからないので。あくまでＴＶを観ている子を主体に考えていました。

みらいとリコ ふたりの絆の物語

――物語の展開についてもうかがいます。村山さんも含めた全5名の脚本担当は、どのように決まったのですか？

紹介や、僕からお願いしたなど、いろいろです。とにかく魔法界とナシマホウ界というふたつの世界が出てくるので、その違いを描いてくださる方、それから「魔法」という楽しい話なので、どの話数でも全力で楽しんでくれそうな方にお願いしました。

――全50話という長い展開となると、言葉は悪いですが、場合によっては中だるみする可能性もあると思います。そのあたりは、どうバランスを取りながら構成を考えていきましたか？

じつは、企画段階で『魔法つかいプリキュア！』は3部構成にしようと考えられていました。1部と2部とで敵が変わって、３部として1月からは『プリキュアオールスターズ』的なことをやろうと。ただ、「オールスターズ」はさすがに製作的に無理だろうということで、２部構成になりました。

――50話に『キラキラ☆プリキュアアラモード』の宇佐美いちかが登場したのは、3部構成の名残なのですか？

そうなりますね。といっても、みらいたちが成長したところに出てくるし、僕たちは『魔法つかいプリキュア!』と『キラキラ☆プリキュアアラモード』の世界はつながっていないと考えています。今回に関しては、「魔法」という要素が存在するからこそアリかなと。「プリキュアオールスターズ」と同じでパラレルワールドだと考えています。

――構成の話に戻りますが、はーちゃんの成長というのは、物語のひとつの山場として展開されていたように感じました。

ことはは2部になってからフェリーチェとして登場することが決まっていたので、どうやって物語に組み込んでいくかを考えました。フェリーチェは緑色を基調としたプリキュアです。女の子が大好きなピンクや紫と比較して、色としてはキャッチーではありません。なので、なおさら彼女の話は気合いを入れていこうという思いも強かったですね。

――強固な絆を持つみらいとリコのふたりの間に、ことはがどのように入ってくるのかと注目していました。

はーちゃん自体は当初からいたキャラ







クターなので、ふたりの邪魔をするという感じではなかったし「娘」と考えれば、なんら問題はなかったです。ふたりの愛の結晶……は言いすぎかもしれませんが（笑）、ことはがいることでバランスが崩れるという危惧はありませんでした。逆に、2部で急に新しい登場人物として参加すると、その子の人となりを説明するのに話を割かないといけませんから。

——そして今回のプリキュアは、たとえば「魔法界がピンチだから助けてほしい」といったような誰かのために戦うわけではないところも印象的でした。

「王国が悪者につぶされて、妖精がプリキュアに助けを求めに行く」というストーリーは、暗くなるからやめたいと僕のほうから申し出ました。これは、僕の勝手な解釈かもしれませんが、プリキュアが妖精から「助けて」と言われて助けに行って、力でもって侵略者を倒せば問題が全部解決するのかといえば、そうではないと思っているんですね。現実世界にも難民や移民の問題があります。作り手として、その意識は作品ににじみ出てしまうことがあると思っていて。そんな大人の事情を子どもたちに見せたくなかったというのもあります。何よりも、子どもたちにプリキュアを友達として見てほしかった。そうすると、強大な敵に立ち向かうとか、滅んだ王国を救うみたいな壮大な話は違うかなと思ったんです。

——今作では敵側のストーリーは、ほとんど掘り下げられませんでしたね。

あえてねらって、敵については掘り下げませんでした。敵のほうが複雑な事情があることもあって、敵のシナリオを書いたほうが面白いのはわかるんです。でも、プリキュアたちの話をメインにするにあたって、敵をフィーチャーしてはダメだろうと考えて、極力排除しました。敵はあくまでもぶっ飛ばされるだけ。それは当初から決めていました。

——今回、敵の外見が明らかに人々と違っていたのも、つまりはぶっ飛ばしやすいからだったのでしょうか？

その通りです。魔法つかいに対比して、悪魔的、使い魔的なものが合うかなと思ったのがひとつですが、それ以上に人間的でない敵のほうが、思いっきりぶっ飛ばせるかなと。あまりにも人間的な容姿にしてしまうと、敵もかわいそうという思いが出てきてしまいますからね。

——みらいとリコ、はーちゃん、そしてモフルンの4人の関係を邪魔してくるから、敵はイヤなやつだということですね。

そうです。「終わりなき混沌」に対しても、みらいの思いは「太陽の日照りをなくして冷凍みかんを作れなくした許せないやつ」なんです。「混沌」が許せないわけではなくて、ただ楽しい日常をワガママで邪魔されてしまったのが許せないだけなんですね。

——過去のシリーズでは毎話、敵にされてしまうゲストキャラクターもいましたが、今回はほとんど登場しませんでした。

ゲストよりも、みらいとリコのふたりを明確にメインに据えたかったからです。それから、感情とか目に見えないものを奪われるという話は、子どもにはわかりづらいと考えたんです。だから「希望」とか「絶望」とかの概念ではなく、「手をつなごう」「人は個性があるんだから、違うから素敵なんだ」ということを前面に押し出したんです。以前、鷲尾プロデューサーに「小さな子どもたちは希望とか言ってもわかっていないと思う」と話したことがあったんです。でも、そのときは「いつか大きくなってプリキュアが言っていた〝希望〟ということがわかる日が来るから」とおっしゃっていました。鷲尾プロデューサーの子どもたちと送り出す作品を信じる姿勢に、本当に感銘を受けました。これまで多くの「プリキュア」は、いつか大きくなったらわかってくれるという、その考え方を踏襲してきたと思います。ですが、今回はドストレートに、観ている子どもたちにとって等身大のテーマを掲げました。もしかしたら、対象年齢より上の方は、物たりないと思われたかもしれません。

——過去のシリーズには、主人公と男子キャラクターのロマンス的なものもありましたが、今作ではなかったのも、あくまでみらいとリコのお話だからですか？

そうです。とくに今回はふたりのお話ですし、「恋愛」と「プリキュア」を両立させるのは難しいと思いました。ふたりで友情を育んで戦っていくのに、そこに恋愛が入ってしまうと「友情」の部分がおろそかになりかねない。「魔法つかいプリキュア！」はみらいとリコがメインの話ですから、ここに恋の話を入れる

『魔法つかいプリキュア！』はとにかく明るく楽しい作品になりました

のは無理だろうなと。

かわいさや華麗さを重視した変身シーン

――手をつないで変身するという姿に、「ふたりはプリキュア」のオマージュを感じる部分もありました。

元々の物語のコンセプトが「ふたつの世界をつなぐ」というイメージだったので、手をつなぐのは必然だと思っていましたし、「ふたりはプリキュア」を意識しようという話も出ませんでしたね。むしろ、モフルンと手をつないで3人で変身するときにどうするかということを、かなり話し合った記憶があります。モフルンの位置がどうしてもセンターになって目立ってしまうので。難題でしたが、三塚SDが見事な変身シーンにしてくださったと思います。それから、製作当初は前作の「Go！プリンセスプリキュア」の人数構成が4人だったので、見た目でパワーダウンしないようにすることをすごく気にしていました。といっても、人数を増やすことはできませんから、変身シーンを派手にするとか、4パターンの変身で魅せるという手法で。演出をはじめとしたスタッフのみなさんのお力によって、派手さと華麗さを出せたのではないかと思います。

――4パターンの変身は、すべて同列という扱いなんですよね。

そうです。そこは新しいポイントかなと思います。普通だったら、ダイヤスタイルをベースにして、そこからパワーアップするためにスタイルを変えると思うのですが、『魔法つかいプリキュア！』では、違うスタイルになろうとしたら一度、変身を解かなくてはいけない。だから、1話で2個の変身パターンを使うのも難しかったですね。

――4つのスタイルのなかでも、トパーズの「トリッキー」という設定が面白いなと感じました。

青＝水、赤＝火みたいな属性パターンは、それに縛られすぎてしまうのでやめようという話になったんです。男の子向けだと、火属性の敵には水属性で挑む、みたいなことをやっても喜ばれるのですが、女の子はそうじゃないだろうと。それよりも、女の子が喜ぶかわいらしさや、可憐さをプッシュしたほうがいいんじゃないかと話し合って決めていきました。

長いようで短かった1年間

――お話をうかがっていると、とにかく視聴者の子どもたちに配慮をし続けた1年だったのですね。

『映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法！』の脚本も手がけたのですが、同作は「敵がプリキュアの涙を盗もうとするから、プリキュアは泣いてはいけない」という話でした。観てくれた子が「プリキュアが泣かないから、私も泣いちゃいけない」とつらいことがあっても泣かずに頑張った、という話を聞きまして。子どもはそれぐらいすぐに素直に物事を吸収するので、何を描くか、とくにテーマは本当に大事なんだなと感じました。

――全50話が終わったところで、改めて振り返ってみた感想は？

長いようで短かったです。描きたいこともまだいっぱいありますし。正直なところを言えば、2期、3期、4期とやりたいくらいです（笑）。

――たとえば、どんなことが描ききれなかったと感じていますか？

自分の発言と矛盾しますが、敵を描きたかったという気持ちも、じつは少しあります。大人の自分としては敵を描いて、プリキュアを痛めつけてコテンパンにやっつけて、それから彼女たちが立ち上がるという姿を見てみたかったですね。とくにクライマックスの戦いに関しては。プリキュアは1月で終わるのですが、年末年始には番組の休止が必ず1回はあります。たとえば年末から年始にかけて最後の戦いを書き始めても、1週お休みを挟むと、子どもはお話を覚えていてくれない可能性が高いですし。

あと、年内最後の放送のクリスマスは、楽しいお話にしたいというのもありました。どうしても年が明けてからクライマックスの展開にしたかったので、ちょっと駆け足になってしまったかなとは感じています。混沌で魔法界とナシマホウ界が一緒になった世界を、もう少し描いてみたかったです。

――最終話の1話前、49話のBパートからエピローグ的な展開になっていたのも、これまでとは少し印象が違いました。

それは三塚SDの思いが大きかったのだと思います。大人たちは戦いを観たがるけど、子どもたちはそこまで観たくないという三塚SDの考えもあって。なるほど、だったらいっそのこと、今回は49話のAパートで戦いはスパッと終わらせてしまおうと。

――そのうえで、最後の最後で成長したみらいたちを見られたのは、観ている側としてもうれしかったです。

「変身後に頭身が上がるんだから、最後にはみらいたちが大きくなった姿も見せたいね」と当初から話していたので、それが無事にできたことはうれしかったですね。これもテーマに関わる話になりますが、最近の映画やアニメ作品における「成長を賛美する風潮」が、あまり好きではなくて。一段ステージを上がらなければならないという考え方が蔓延している気がして。ちょっとした気持ちや心の変化だって、十分成長していることだし、それでいいだろうと思っているんですね。何より、成長することの素晴らしさなんて、成長真っ盛りの子どもたちには言わずもがなでしょう。今作では「プリキュアが成長したから新しい技が使えるようになりました」ということはしなかった。魔法界の友達がみらいやリコと久しぶりに会って、「なんかちょっと変わったよね」と言うと、視聴者もそう言われてみれば変わったかも、と気づくような。段階を踏んで、区切って成長していくのではなく、グラデーションで成長していくというか。まぁ、最後の最後に大学生になるという、とんでもない成長をみらいたちは見せますが（笑）。

――ファンへメッセージをお願いします。

このムックを読んでくださっている多くの方々は、お子さんではない、「プリキュア」のファンの方だと思います（笑）。何を隠そう、僕もそのひとりです。初めて関わったアニメ作品が「プリキュア」で、本当に思い入れの強いシリーズです。今回、シリーズ構成という立場で関わらせていただいて、幸せな1年間でした。みなさんに作品を応援していただいて、とっても幸せでした。1年間お付き合いいただき、ありがとうございました。





スタッフインタビュー3

【キャラクターデザイン】

宮本絵美子

Profile／【みやもと・えみこ】3月6日生まれ。神奈川県出身。アニメーター、キャラクターデザイナー。『ふたりはプリキュア』から原画として参加。そのほかの担当作品は『聖闘士星矢Ω 新生聖衣編』（総作画監督）など。

ミラクルとマジカルはつねに対比させながらデザインしました

ミラクルはふんわり マジカルはスマートに

――『プリキュア』シリーズのキャラクターデザインはオーディションで決まると聞いていますが、オーディションの段階ではどのくらいまでキャラクターの性格などが決まっていたのでしょうか？

その段階では、詳しいところまでは決まっていなかったように記憶しています。プリキュアに変身したあとの姿がメインで、変身前の姿も「ふわっとでいいから描いてね」とお願いされた気がします。

――その後、キャラクターデザインが決まってから、それぞれの性格などは決まっていったのでしょうか？

キャラクターの性格は、スタッフが集まっての打ち合わせで決まっていったと思います。そのイメージを聞いて、私もデザインを詰めていきました。

――今回、作品のテーマが「魔法」ということで、テーマを意識してデザインされた部分はありますか？

ちょっと不思議な雰囲気を出したくて、たとえば腕につけているブレスレットや飾りが浮いて見えるようなデザインにしました。どのスタイルでも魔法つかいが被っていそうな小さな帽子を被っているのは、内藤圭祐プロデューサーの意向です。ただ、オーディションのときから「そこまで魔法つかいというテーマに縛られないように」と言っていただいていたので、魔法つかい的な要素を前面に押し出すことはしませんでした。

――各キャラクターのポイントについても教えていただけますか？ まずはキュアミラクルからお願いします。

ミラクルのポイントは〝広がるふんわり感〟です。ミラクルとマジカルは同時にデザインをしていったので、ふたりの対比をつねに気にかけていました。ミラクルは〝ふわっと〟をテーマにしていたので、髪形などもかなりボリュームがある感じになりました。

――キュアマジカルのデザインに関してはいかがですか？

マジカルは、シュッとしたスマートな感じのイメージです。ふたりのバランスを考えながら描いていったのですが、それでも共通のポイントは残しておきたくて、たとえば髪形をルビースタイルだったらツインテールにしたり、トパーズスタイルだったら三つ編みにしたりしているんです。色に関しては、デザインをしている段階では自分なりに配色をイメージしていますが、細かな配色は考えていません。色指定担当の方とほかのスタッフ陣とで顔を合わせて決めていきました。

――今回、ダイヤ、ルビー、サファイア、トパーズと、基本となる変身スタイルが4つありました。

元々の宝石の色はもちろんイメージとしてありますが、赤＝火とか青＝水という属性は考えないようにしようと提案されました。それよりも、女の子がかわいいと思ってくれるように、たとえば「青であれば大人っぽく」という色からイメージするスタイルを取り入れていきました。サファイアであればベースは青なのですが、差し色やバランスは、ふたりが並んだときにしっくりするように考えましたね。ただ、デザインも色も含めて、ミラクルのほうがガーリーで、マジカルのほうが大人っぽい感じにはなりました。これは単純に、私はマジカルのほうが大



Cure Miracle



●キュアミラクル：
オーディション時ラフ

人っぽい色が似合うと感じたからです。

──「プリキュア」は、それぞれイメージカラーのようなものがあって、ミラクルならピンク、マジカルなら紫だったと思うのですが、その色とはまったく関係のない色合いのコスチュームを着ているのも新鮮でした。

たしかにミラクルもマジカルも、ルビーのときは真っ赤だし、トパーズのときは黄色いし、すごく珍しいですよね。

──石そのもののイメージから着想を得て、色味やデザインを考えたことも？

それは考えました。ルビーであれば「情熱、愛」であったり、サファイアは知性的な感じであったり。細かな色指定についての説明は、わりとこだわりましたね。サファイアのときは、ミラクルが昼の明るい海の色で、マジカルは夜の星空みたいな色、とか。

──トパーズスタイルのときは、ふたりともかわいいバルーンスカートですが、ミラクルはガーターベルトを着けていて、アンバランスな感じが目を引きます。

トパーズスタイルはトリッキーで面白いイメージという話だったので、最初の段階では実際に採用されたスイーツを使ったデザインのほかに、猫耳が付いているものも考えたんですよ。でも、スイーツのほうがかわいくできるモチーフが多かったので、結果的に採用されたデザインになりました。

──フェリーチェのデザインに関しては、どのように決めたのでしょうか？

ミラクルとマジカルが決定した状態からのスタートですから、ふたりがやっていないことをやりたいなと考えました。大きな三つ編みであったり、おでこを出していたりするのが違うところですね。フェリーチェはエメラルドの石を使って変身するので、宝石の色の緑を使ってほしいというオーダーが玩具の提案としてありました。スカートの形も、玩具よりの提案ですね。でも、フェリーチェの緑はかなり挑戦的な色だなと思いました。

──アレキサンドライトスタイルになると、ミラクルとマジカルは大きな帽子の印象からか〝魔法つかいっぽさ〟がかなり出ている感じがします。

これは内藤プロデューサーからの要望です。魔法つかいであるからには、やはり帽子を目立たせたほうがいいだろうということになって。羽っぽいマントのデザインは、ただかわいいかなと思って（笑）。それから、ミラクルの左足とマジカルの右足に赤いリボンが結ばれていますが、元々はふたりの足をリボンでつなげていたんです。ただ、子どもたちがマネをすると危険だろうということで、つなげるのはやめました。その設定の名残ですね。

──一方、アレキサンドライトスタイルのフェリーチェは〝女神感〟が増しました。

フェリーチェは、じつはマザー・ラパーパの力を受け継ぐという存在なので、それをイメージしました。すごい存在なんだよ、というのが衣装からもわかってもらえたらうれしいです。

──モフルンのデザインは、玩具でほぼ決まっていたのですよね？

そうですね。肉球のハートや目のなかにある星はすでに決まっていたと思います。私のほうでは、頭と胴体のバランスや、腕の太さ、ボリューム感などを調整したくらいです。

敵側のキャラクターは コミカルさを残して

──変身前のキャラクターデザインのポイントを教えてください。

みらいとリコは、変身後と同じように同時に考えました。みらいは明るく元気で、髪をボブカットに、それと対比して、リコはロングにしました。リコの前髪を眉毛が出るくらいに短くしたのも、みらいの眉毛が隠れているからですね。はー

ちゃんは、かなり早めにデザインをしました。フェリーチェをデザインするよりも、はーちゃんのデザインのほうが先だったんじゃないかな。はーちゃんのポイントは口とおでこでしょうか。成長するにつれてお花が増えていくのもはーちゃんらしい部分だと思います。花の妖精だと聞いていたので、最初はモフルンに近い、人じゃない形で描いていたんです。そうしたら鷲尾天プロデューサーから「マスコットじゃないよ」と言われて。結果、人間っぽいデザインになりました。

――はーちゃんの妖精っぽさは、羽や目のなかの花で表現しているのですか？

そうですね。羽はとてもわかりやすいですが、目のなかに花があると、それだけでも人間ではないと思ってもらえるかなと。正直なところを言いますと、バブバブ期やヨチヨチ期のはーちゃんは表に出ていないだけですごくたくさんデザインをしたんです。だから、バブバブ期とヨチヨチ期は、もう少したくさんやって



ほしかった気持ちもあります（笑）。

――今回、みらいやリコの服も含め、魔法界とナシマホウ界のふたつの世界があるということで、衣装パターンはすごく多かったですよね。

多かったですね。1話かぎりのキャラクターのデザインなどは、各話のスタッフの方にお願いすることもあるのですが、世界観の違うふたつの世界の衣装を考えるのは大変でした。

――敵キャラクターのデザインについては、いかがですか？

メインの敵キャラクターはデザインをさせていただき、ヨクバールも1体めは私がデザインしました。

――敵キャラクターは人間っぽくない、明らかに異質な感じが、最近の「プリキュア」では珍しかったように思います。

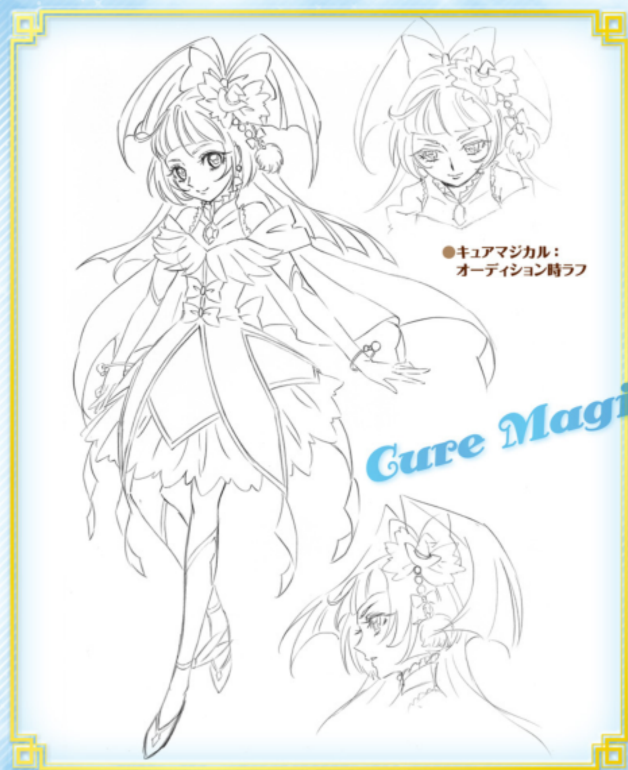
人間っぽくないというだけで不気味な印象は与えられるのですが、三塚雅人SDからは「怖くなりすぎないように」というオーダーをいただきました。それを受けて、見方によってはコミカルに感じられるように工夫したつもりです。ドクロクシーはベースがドクロということもあって、どう頑張っても怖くなってしまうのですが、大半がフードで隠れているので、そのままいけば問題ないかなと。

――逆に、後半の敵のほうが、やや人間っぽさがありましたよね。

容姿は人間に近くなりましたが、全体的には人智を超えた存在として描くことを心がけました。とはいえ、やはり化け物っぽい感じはするのかなと思います。

――そんななかで、オルーバがかなりのイケメンになった理由は？

内藤プロデューサーから、ラストに出る敵なのでイケメンにしてほしいと頼まれたような記憶があります。オルーバは人間を見下すキャラクターだけど、人間に興味があるので、人間っぽくしたり、メガネをかけさせたりしました。一見す



●キュアマジカル：
オーディション時ラフ

●ドロワーズ設定



●校長とクシィの学生時代



それぞれのキャラクターに感情移入して笑ったり泣いたりしてもらえたらうれしい

ると友好的なようで、じつは一番ひどいやつなんですよね。

――ヘソ出しだったり、45話では上半身裸の真の姿を見せたりと、インパクトもとことん強かったです。

ヘソ出しは、描いてみて確認したらOKだったので、そのまま いかせていただきました。上半身裸もそうだったかな。実際にオンエアで観てみると、敵キャラクターは入れ替わりが激しくて、デザインを考えている時間のほうがTVでオンエアされている時間より長いなぁと、しみじみしてしまいました（笑）。

――イケメンといえば、ドクロクシーの正体であるクシィもイケメンでした。

先にドクロクシーのキャラクターができていて、物語が進んだところで登場することになったので、ドクロクシーをベースに人間のほうのキャラクターを作りました。顔に関しては、校長先生の旧友だからということで、校長先生との対比を一番重視しましたね。

――41話に登場した、学生時代の校長先生とクシィのズボンの丈に、デザインのこだわりを感じました。

じつはズボン丈はけっこうスタッフと相談したんですよ。当初、魔法学校の生徒は、リコの同級生の女の子たちしか出てこなかったのですが、どこかで男子が映る可能性もあるから考えておいてほしいと言われていて。モブキャラであれば、各話のスタッフの方にお任せすればいいのですが、万が一、校長先生たちの回想が出てきた場合に、モブ用をベースにすると合わないかもしれないと考えて、自分で考えました。校長先生のほうが膝丈なのは、性格的にそちらのほうが合っているかなと思ったからです。

子どもたちがマネできる髪形に

――「プリキュア」シリーズも『魔法つかいプリキュア！』で13作目ですし、ほかのシリーズとのデザイン被りなどは気にされましたか？

気にしました。これまで数多くのキャラクターが登場しているので、難しくはありました。そこでどうしたかといえば、過去のデザインを気にかけつつも、とにかく子どもたちがかわいいと思えるものにしようと思って。髪形などに関しては子どもたちがマネできることを前提に考えるようにしました。

――「プリキュア」シリーズは、EDの映像が3DCGになっていますが、ご自身の絵がCGになった感想は？

〝すごいなぁ〟のひと言です。ちゃんとキャラクター設定に合わせてCGが成り立つんだなと。でも、CGになることを前提にキャラクターを考えてはいません。

――そういえば、ミラクルとマジカルにドロワーズの設定（上図）がありましたね。

あれは、CG製作チームから動かすにあたってスカートのなかの設定がほしいと言われて描いたものです。2Dだと設定がないものは描かなくてもいい方法を考えられるのですが、3DCGでは見えないところもないと困るんだそうです。

――改めて1年間を振り返って、とくに印象に残っている衣装は？

どのスタイルも個性があって好きですが、アレキサンドライトスタイルは、フ



エリーチェとふたりとの対比もあって、面白い感じに仕上がったと思います。お姫様っぽさと、騎士っぽさの両方を感じさせるデザインができたなと感じています。いろいろな衣装をデザインしましたが、細かく修正してほしいというオーダーがなかったのはありがたかったです。

――最後に、1年間応援してくれたファンに向けて、メッセージをお願いします。

1年間観続けていただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。それぞれのキャラクターに感情移入してもらって、笑ったり怒ったり泣いたりしてもらえたら、作った側としてもうれしいです。応援ありがとうございました。

各話スタッフリスト

第1話

脚本／村山功　原画／高橋任治、原田節子、清水隆正、野津美智子、爲我井克美、永島英樹、星川信芳、田中伸昭、上野ケン、松浦仁美、藤井孝博、完甘美也子、飯島秀一、金田栄二、山下悟、北田美弥子、松田千織、Toei Phils.、飯飼一幸、河野宏之、星野守、増田誠治、美馬健二、斉藤拓也、ひのたかふみ、伊藤公崇、志田直俊、板岡錦、吉田豆良、会津五月、濱野裕一　背景／いいだりえ、西田渚、黄国威、田中里緑、飯野敏典、佐藤千恵、佐藤美幸、萬ミキ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、宮本浩史、野本有紀、酒井則子、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文　美術／増田竜太郎　総作画監督／爲我井克美　作画監督／松浦仁美　演出／三塚雅人

第2話

脚本／村山功　原画／エド マーチン・クリストモ、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ポール・サルディバー、ジュディ・ゼル バルトラソ、ロメル・プーラ、シーザー・デ レオン、アレン・ジェラルディーノ、藤原未来夫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、千葉源太、許祖眞、徳田香穂、松田範雄、中村俊介、李龍昌　演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介　美術／齋藤優　総作画監督／爲我井克美　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　絵コンテ／越智一裕　演出／鈴木裕介

第3話

脚本／村山功　原画／芹田明雄、福原恵次、星川信芳、北田美弥子、完甘美也子、黒柳賢治、大山康彦、永澤謙一、東出太、真中孝之、上久保聡美、藤田亜耶乃、冨木由美子、西村元秀、廣中美佳、松田千織、安田陽子、島崎望、大森春輝、金子俊太朗、飯嶋友里恵、平田賢一、大内智美、会津五月、スタジオガッツ、Toei Phils.、板岡錦、河野宏之、藤井孝博、永島英樹　背景／萬ミキ、山下千歌、増田竜太郎、牟田いずみ、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、野本有紀、宮本浩史　演出助手／豊田百香　製作進行／八重樫逸郎　美術／飯野敏典　総作画監督／爲我井克美　作画監督／稲上晃　演出／暮田公平

第4話

脚本／村山功　原画／星川信芳、田中伸昭、梶原煌平、清水隆正、原田節子、野津美智子、赤田信人、松田千織、小泉貴之、北田美弥子、飯嶋友里恵、金子俊太朗、平田賢一、大森春輝、菅藤剛、上久保聡美、完甘美也子、永澤謙一、スタジオガッツ　背景／佐藤美幸、佐藤千恵、萬ミキ、いいだりえ、黄国威、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／三上雅人　製作進行／堀越圭文　美術／田中里緑　総作画監督／爲我井克美　作画監督／赤田信人　演出／座古明史

第5話

脚本／村山功　原画／阿部剛久、佐々木雄三、山口瀬良、下谷美保、伊藤潤樹、長澤達也、浜友利恵、高山智也　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、赤瀬平、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南、酒井則子、千葉源太、許祖眞、徳田香穂　製作進行／肥留川知明　美術／田中美紀　総作画監督／爲我井克美　作画監督／五十内裕輔、渡辺奈月　演出／政木伸一

第6話

脚本／山下憲一　原画／飯島秀一、完甘美也子、河村信道、会津五月、速水広一、上野ケン、原田節子、佐藤友子、牛来隆行、飯飼一幸、冨木由美子、芹田明雄、清水隆正、山下悟、上久保聡美、松田千織、斉藤拓也　背景／田中里緑、飯野敏典、萬ミキ、黄国威、増田竜太郎　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介　美術／いいだりえ　総作画監督／爲我井克美　作画監督／上野ケン　演出／芝田浩樹

第7話

脚本／伊藤睦美　原画／河野宏之、藤井孝博、永島英樹、橋本貴吉、板岡錦、清水隆正、フランシス・カネダ、デニス・カブラオ、ノエル・アンニョヌエボ、ジョーイ・カランギアン、上久保聡美、松田千織、石井珠樹、西田美弥子、完甘美也子、大森春輝、金子俊太朗、冨永一仁　背景レイアウト／鵜崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、野本有紀、宮本浩史　演出助手／豊田百香　製作進行／八重樫逸郎　美術／齋藤優　総作画監督／爲我井克美　作画監督／河野宏之　演出／平山美穂

第8話

脚本／坪田文　原画／高橋任治、星川信芳、松田千織、小泉貴之、真中孝之、北田美弥子、永澤謙一、松浦仁美、大内智美、ロメオ・アンニョヌエボ、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバー、エド マーチン・クリストモ、ユージン・アイソン、マービン・メンドーサ、レスティ・ロケ、フランクリン・タマング、フレデリック・ウラング、ロメル・プーラ、藤原未来夫　背景／いいだりえ、西田渚、田中里緑、黄国威、増田竜太郎　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／三上雅人　製作進行／堀越圭文　美術／佐藤千恵　総作画監督／爲我井克美　作画監督／松浦仁美　演出／中島豊

第9話

脚本／鐘弘亜樹　原画／ロメオ・アンニョヌエボ、ジュディ・ゼル バルトラソ、ボビー・デラペーニャ、レジー・マナバット、マービン・メンドーサ、ロメル・プーラ、アルフレッド・レイエス、フリッツ・ウラング、エド マーチン・クリストモ　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、鈴木祥太　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、赤瀬平、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南、酒井則子、千葉源太、許祖眞、徳田香穂　演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介　美術／田中美紀　総作画監督／爲我井克美　作画監督／アリス・ナリオ、フランシス・カネダ　演出／佐々木憲世

第10話

脚本／村山功　原画／田中伸昭、黒柳賢治、増田誠治、藤原未来夫、原田節子、福原恵次、梶原煌平、星川信芳、廣中美佳、安田陽子、丸山匡彦、藤田亜耶乃、松田千織、完甘美也子、大森春輝、Toei Phils.　背景／飯野敏典、山下千歌、黄国威、田中里緑、西田渚、佐藤美幸、牟田いずみ、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／豊田百香　製作進行／八重樫逸郎　美術／萬ミキ　総作画監督／爲我井克美　作画監督／赤田信人、伊藤公崇　演出／暮田公平

第11話

脚本／村山功　原画／星川信芳、飯島秀一、大山康彦、会津五月、完甘美也子、小松こずえ、清水隆正、速水広一、山下悟、野津美智子、増田誠治、芹田明雄、Toei Phils.、舘崎大、松浦仁美、松田千織、Triple A、大内智美、板岡錦、藤原未来夫、黒柳賢治、スタジオ・コスモ、竹森由加、深澤謙二、勝又俊哉、新井智之、佐藤大介　背景レイアウト／本間薫、鵜崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ダッピー・モラート　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、野本有紀、宮本浩史　演出助手／三上雅人　製作進行／野本雄也　美術／齋藤優　作画監督／稲上晃　演出／三上雅人

第12話

脚本／伊藤睦美　原画／阿部剛久、山口瀬良、渡辺奈月、高山智也、佐々木雄三、浜友里恵、下谷美保、長澤達也　背景／飯野敏典、萬ミキ、西田渚、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　製作進行／肥留川知明　美術／いいだりえ　作画監督／中谷友紀子　演出／政木伸一

第13話

脚本／山下憲一　原画／酉井正博、板岡錦、松田千織、星野守、星川信芳、北田美弥子、高橋任治、真中孝之　背景／萬ミキ、飯野敏典、黄国威、山下千歌、いいだりえ、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、赤瀬平、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南、酒井則子、千葉源太、許祖眞、徳田香穂　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／田中里緑　作画監督／上野ケン　演出／座古明史

第14話

脚本／坪田文　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、豊田桂祐　背景／デザインオフィス・メカマン、邱文美、鈴木祥太、山口大悟郎　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／豊田百香　製作進行／駒水優之介　美術／田中美紀　作画監督／河野宏之　演出／芝田浩樹

第15話

脚本／鐘弘亜樹　原画／星川信芳、藤原未来夫、原田節子、上久保聡美、永澤謙一、黒柳賢治、森知穂、大内智美、増田誠治、林由香、飯飼一幸、爲我井克美　背景／増田竜太郎、萬ミキ、いいだりえ、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、野本有紀、宮本浩史　演出助手／鈴木裕介　製作進行／八重樫逸郎　美術／佐藤千恵　作画監督／爲我井克美　絵コンテ／中島豊　演出／鈴木裕介

第16話

脚本／村山功　原画／青山充　背景レイアウト／鵜崎博、本間薫　背景／宮本里香、チェン・ヤンフェイ、藤原友美、戸杉奈津子、板井理英子、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／豊田百香　製作進行／野本雄也　美術／齋藤優　総作画監督／爲我井克美　作画監督／青山充　演出／小山賢

第17話

脚本／伊藤睦美　原画／ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ノエル・アンニョヌエボ、ジョーイ・カランギアン、レジー・マナバット、アレン・ジェラルディーノ、ポール・ザルディバー、エド マーチン・クリストモ、田中伸昭、板岡錦、増田誠治、大内智美　背景／萬ミキ、山下千歌、須和田真、牟田いずみ、黄国威、田中里緑、いいだりえ、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、赤瀬平、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南、酒井則子、千葉源太、許祖眞、徳田香穂　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／飯野敏典　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／暮田公平

第18話

脚本／坪田文　原画／藤原未来夫、完甘美也子、高橋任治、清水隆正、小松こずえ、会津五月、福原恵次、真中孝之、松田千織、星川信芳、野津美智子　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、邱文美、鈴木祥太、志賀友香　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／豊田百香　製作進行／駒水優之介　美術／田中美紀　作画監督／赤田信人　絵コンテ／門由利子　演出／岩井隆央

第19話

脚本／山下憲一　原画／志賀岳、高橋詩奈子、高山智也、阿部剛久、下谷美保、佐々木雄三、渡辺奈月　背景／萬ミキ、佐藤千恵、牟田いずみ、山下千歌、いいだりえ、黄国威、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、石川剛史、中村有希恵、山崎浩司、林田高昌、赤瀬平、遠藤龍一、野本有紀、宮本浩史　製作進行／肥留川知明　美術／田中里緑　作画監督／藤崎真吾　演出／政木伸一

第20話

脚本／村山功　原画／星川信芳、飯島秀一、原田節子、大山康彦、増田誠治、松田千織、田中伸昭、板岡錦、北田美弥子、完甘美也子　背景レイアウト／本間薫、鵜崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、戸杉奈津子、藤原友美、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／笹井麻希、長谷川太陽、宮澤孝介、宮本美貴、森山美里、松澤伸哉、廣澤穂恵、中谷純也、海老沢大生、武藤達也、松田範雄、富安勝人　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／齋藤優　作画監督／稲上晃　演出／中島豊

第21話

脚本／村山功　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、黒柳賢治　背景／増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、石上由佳莉、赤瀬平、鄭載薫、石塚恵子、佐々木栞南、酒井則子、千葉源太、許祖眞、徳田香穂　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文、柿田智子　美術／いいだりえ　作画監督／河野宏之　演出／土田豊

第22話

脚本／村山功　原画／青山充、板岡錦、田中伸昭、清水隆正、小松こずえ、野津美智子、大内智美、上久保聡美、赤田信人、松田千織、完甘美也子、舘崎大、松浦仁美、藤原未来夫、大田和寛、北田美弥子、濱野裕一、福原恵次、増田誠治、永島英樹、山岡直子　背景／増田竜太郎、田中里緑、黄国威、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邊亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖眞、徳田香穂、佐々木栞南、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、峯沢琢也　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／駒水優之介　美術／佐藤千恵　作画監督／青山充　絵コンテ／平山美穂　演出／岩井隆央

第23話

脚本／鐘弘亜樹　原画／星川信芳、爲我井克美、会津五月、真中孝之、完甘美也子、黒柳賢治、増田誠治、原田節子、安田陽子、山下悟、上田由希子、東出太、松田千織、並木祐一　背景／デザインオフィス・メカマン、上原里香、鈴木祥太、山口大悟郎、亀山議太　CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、野本有紀、遠藤龍一、村野徳晃、海老沢大生、富安勝人、森山美里、廣澤穂恵、松本八希、中谷純也　演出助手／三上雅人　製作進行／野本雄也　美術／田中美紀　作画監督／爲我井克美　演出／三上雅人

第24話

脚本／坪田文　原画／ノエル・アンニョヌエボ、ユージン・アイソン、ジュディ・ゼル バルトラソ、ジョーイ・カランギアン、エド マーチン・クリストモ、アレン・ジェラルディーノ、アルフレッド・レイエス、ポール・ザルディバー、高橋任治、松田千織、永澤謙一、上久保聡美　背景／飯野敏典、山下千歌、増田竜太郎、黄国威、牟田いずみ　CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、関祖輝、中山美緒、喜田晃平、森重孝太、坪川尚史、赤瀬平、覃彦波、佐藤太一　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文、柿田智子　美術／萬ミキ　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／小山賢

第25話 脚本／山下憲一　原画／星川信芳、原田節子、田中伸昭、福原恵次、板岡錦、清水隆正、芹田明雄、完甘美也子、会津五月、大内智美、野津美智子、冨木由美子、安田陽子、松浦仁美、涂泳莱
背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、藤原友美、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、徳田香穂、佐々木果南、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波
演出助手／高戸谷一歩　製作進行／駒水優之介
美術／齋藤優　作画監督／伊藤公崇、松浦仁美
絵コンテ／黒田成美、中島豊　演出／岩井隆央

第26話 脚本／伊藤睦美　原画／藤崎真吾、大野泰江、高山智也、渡辺奈月、佐々木雄三、志賀岳、下谷美保、皆川祐輝、長澤達也、中山朋彦、高橋詩奈子、赤田信人、涂泳莱　背景／佐藤千恵、増田竜太郎、山下千歌、萬ミキ、いいだりえ、黄国威、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、野本有紀、遠藤龍一、村野徳晃、海老沢大生、富安勝人、森山美里、廣澤暁恵、松本八希、中谷純也　製作進行／肥留川知明
美術／田中里緑　作画監督／藤崎真吾　演出／村上貴之

第27話 脚本／村山功　原画／飯島秀一、山下悟、大山康彦、完甘美也子、田中伸昭、星川信芳、増田誠治、藤原未来夫、北田美弥子、宇都木勇、真中孝之、会津五月、加藤義貴、廣中美佳、野津美智子、伊藤公崇、デニス・カブラオ、アレン・ジェラルディーノ、ロメル・ブーラ、アルフレッド・レイエス、レスティ・ロケ、エド マーチン・クリストモ、ポール・ザルディバー、ジョーイ・カランギアン、ユージン・アイソン、シーザー・デ レオン、スタジオガッツ、ミュウ、飯飼一幸
背景／デザインオフィス・メカマン、上原里香、志賀友香、山口大悟郎、亀山颯太　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、関祖輝、中村有希恵、中山美緒、鄭載薫、坪川尚史、赤瀬平、喜田晃平、佐藤太一　演出助手／豊田百香
製作進行／野本雄也　美術／田中美紀　作画監督／赤田信人
演出／暮田公平

第28話 脚本／伊藤睦美　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、田中伸昭、清水隆正、完甘美也子
背景／萬ミキ、黄国威、増田竜太郎、佐藤千恵、飯野敏典、田中里緑　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、野本有紀、遠藤龍一、村野徳晃、海老沢大生、富安勝人、森山美里、廣澤暁恵、森重孝太、佐々木果南　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／堀越圭文　美術／いいだりえ
作画監督／河野宏之　演出／座古明史

第29話 脚本／坪田文　原画／星川信芳、板岡錦、高橋任治、野津美智子、松田千織、清水隆正、永澤謙一、原田節子、福島史士、郡司智一、永島英樹、林由香、大内智美、北田美弥子、斎藤玲子、舘崎大、会津五月　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、戸杉奈津子、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、徳田香穂、佐々木果南、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波　演出助手／豊田百香　製作進行／柿田智子
美術／齋藤優　作画監督／稲上晃　演出／土田豊

第30話 脚本／山下憲一　原画／青山充、板岡錦
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、志賀友香、山口大悟郎、亀山颯太　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、野本有紀、遠藤龍一、村野徳晃、海老沢大生、富安勝人、森山美里、廣澤暁恵、松本八希、中谷純也
演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／田中美紀
作画監督／青山充　演出／平山美穂

第31話 脚本／村山功　原画／爲我井克美、星川信芳、山岡直子、市川慶一、仲條久美、上久保聡美、金田栄二、窪秀巳、Toei Phils.、濱野裕一、藤原未来夫　背景／佐藤千恵、黄国威、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／ Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文
美術／萬ミキ　作画監督／爲我井克美　演出／佐々木憲世

第32話 脚本／鐘弘亜樹　原画／ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバー、ロメル・ブーラ、フリッツ・ウラン、ジュディ・ゼル バルトラソ、ノエル・アンニョヌエボ、アレン・ジェラルディーノ、田中伸昭、会津五月、西野武志、伊藤公崇　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、上原里香　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、佐々木果南、野本有紀、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波　演出助手／三上雅人　製作進行／柿田智子
美術／田中美紀　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ
演出／三上雅人

第33話 脚本／村山功　原画／高山智也、渡辺奈月、高橋詩奈子、長澤達也、大野泰江、中村沙由貴、皆川祐輝、寺田素都、鈴木里沙、下谷美保、佐々木雄三、志賀岳、リアススタジオ、Toei Phils.、伊藤公崇
背景／佐藤千恵、山下千歌、いいだりえ、黄国威、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、海老沢大生、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄
製作進行／肥留川知明　美術／田中里緑
作画監督／中谷友紀子、渡辺奈月　演出／村上貴之

第34話 脚本／坪田文　原画／松浦仁美、完甘美也子、原田節子、星川信芳、飯島秀一、真中孝之、大山康彦　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫
背景／宮本里香、戸杉奈津子、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、森山美里、廣澤暁恵、鄭載薫、森重孝太、遠藤龍一、村野徳晃、喜田晃平、佐藤太一
演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／齋藤優
作画監督／松浦仁美　演出／中島豊

第35話 脚本／伊藤睦美　原画／高橋任治、星川信芳、松田千織、清水隆正、北田美弥子、永島英樹、伊藤公崇、冨木由美子、福島史士、野津美智子、大内智美、月乃むあ、上久保聡美　背景／萬ミキ、田中里緑、黄国威、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア
CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、海老沢大生、富安勝人、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文
美術／いいだりえ　作画監督／伊藤公崇、赤田信人
演出／小山賢

第36話 脚本／山下憲一
原画／河野宏之、藤井孝博、永島英樹、舘崎大
背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、邱文美、山口大悟郎　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、佐々木果南、野本有紀、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波　演出助手／高戸谷一歩　製作進行／柿田智子
美術／田中美紀　作画監督／河野宏之　演出／座古明史

第37話 脚本／村山功　原画／青山充
背景／いいだりえ、山下千歌、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、海老沢大生、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄
演出助手／豊田百香　製作進行／野本雄也　美術／佐藤千恵
作画監督／青山充　絵コンテ／田中孝行　演出／広嶋秀樹

第38話 脚本／鐘弘亜樹　原画／田中伸昭、星川信芳、山岡直子、野津美智子、清水隆正、板岡錦、福原恵次、牛来隆行、会津五月、Toei Phils.
背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、藤原友美、戸杉奈津子、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／日向学
デジタルアーティスト／関祖輝、許祖真、山崎浩司、鄭丁植、渡邉亮太、森重孝太、松本涼一、清水昭仁、真庭秀明、林沙樹
演出助手／高戸谷一歩　製作進行／堀越圭文　美術／齋藤優
作画監督／稲上晃　演出／土田豊

第39話 脚本／坪田文　原画／爲我井克美、星川信芳、完甘美也子、藤原未来夫、原田節子、加藤義貴、冨木由美子、福島史士、大山康彦、真中孝之、上久保聡美、片山敬介、芹田明雄、北田美弥子、野津美智子、月乃むあ、松田千織、会津五月、青山充、Toei Phils.
背景／飯野敏典、山下千歌、佐藤千恵、いいだりえ
CGディレクター／日向学　デジタルアーティスト／鎌田匡晃、芦野健太郎、吉岡理子、森田信廣、佐藤直樹、遠藤龍一、宮澤孝介、八巻豊　演出助手／豊田百香　製作進行／柿田智子
美術／萬ミキ　作画監督／爲我井克美　演出／鎌仲史陽

第40話 脚本／村山功　原画／高山智也、志賀岳、佐々木雄三、中山朋彦、皆川祐輝、中村沙由貴、寺田素都、鈴木里沙、下谷美保、長澤達也、大内智美、Toei Phils.　背景／増田竜太郎、山下千歌、神戸あや恵、萬ミキ、西田渚、 Toei Phils.、ルーベン・オレンセ
CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、森山美里、廣澤暁恵、鄭載薫、森重孝太、遠藤龍一、村野徳晃、喜田晃平、佐藤太一
製作進行／肥留川知明　美術／黄国威、田中里緑
作画監督／渡辺奈月、五十内裕輔、藤崎真吾　演出／村上貴之

第41話 脚本／伊藤睦美　原画／宮本絵美子、爲我井克美、飯島秀一、松田千織、廣中美佳、伊藤公崇、清水隆正、大内智美、福原恵次、永島英樹、北田美弥子、山下悟、稲上晃、兼高里圭、スタジオギムレット、あーとぽっくす、ミュウ、スタジオエル、小山優貴子、奥田富美子、水野友美子、Toei Phils.
背景／デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、鈴木祥太、亀山颯太　CGディレクター／高橋友彦
デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、海老沢大生、富安勝人、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄
演出助手／高戸谷一歩　製作進行／野本雄也　美術／田中美紀
作画監督／宮本絵美子　絵コンテ／中島豊　演出／広嶋秀樹

第42話 脚本／山下憲一　原画／ノエル・アンニョヌエボ、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、シーザー・デ レオン、アレン・ジェラルディーノ、アルフレッド・レイエス、フリッツ・ウラング、ポール・ザルディバー、野津美智子、月乃むあ、上久保聡美、爲我井克美
背景／佐藤千恵、田中里緑、山下千歌、飯野敏典、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、佐々木果南、野本有紀、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文
美術／いいだりえ　作画監督／アリス・ナリオ、フランシス・カネダ
演出／三上雅人

第43話 脚本／村山功　原画／星川信芳、高橋任治、青山充、田中伸昭、完甘美也子、伊藤公崇、清水隆正、会津五月、月乃むあ、野津美智子、上久保聡美、北田美弥子、原田節子　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、チェン・ヤンフェイ、藤原友美、戸杉奈津子、板井理英子、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、海老沢大生、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／柿田智子　美術／齋藤優　作画監督／赤田信人、伊藤公崇　演出／佐々木憲世

第44話 脚本／鐘弘亜樹　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、上原里香
CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、森山美里、廣澤暁恵、鄭載薫、森重孝太、遠藤龍一、村野徳晃、喜田晃平、佐藤太一
演出助手／豊田百香　製作進行／野本雄也　美術／田中美紀
作画監督／河野宏之　絵コンテ／小山賢　演出／鎌仲史陽

第45話 脚本／伊藤睦美　原画／星川信芳、藤原未来夫、完甘美也子、原田節子、野津美智子、生水勇気、宮本絵美子、松浦仁美、板岡錦、北田美弥子、平山美穂、大田謙治、森田岳士、上久保聡美　背景／増田竜太郎、山下千歌、西田渚、田中里緑、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、海老沢大生、富安勝人、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／堀越圭文　美術／黄国威　作画監督／松浦仁美
演出／平山美穂

第46話 脚本／坪田文　原画／青山充、Toei Phils.
背景レイアウト／本間薫、鷲崎博
背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、戸杉奈津子、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ
CGディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、佐々木果南、野本有紀、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波
演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文　美術／齋藤優
作画監督／青山充　演出／土田豊

第47話 脚本／山下憲一　原画／星川信芳、大内智美、松田千織、清水隆正、完甘美也子、真中孝之、原田節子、福原恵次、永島英樹、会津五月、芹田明雄、高橋任治、田中伸昭、爲我井克美、旭プロダクション、ミュウ、Toei Phils.　背景／増田竜太郎、いいだりえ、黄国威、山下千歌、西田渚、陳炯年、Toei Phils.、エルウィン・サデーア
CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、海老沢大生、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／野本雄也　美術／田中里緑　作画監督／稲上晃
演出／座古明史

第48話 脚本／村山功　原画／ノエル・アンニョヌエボ、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ポール・ザルディバー、フリッツ・ウラング、ロメル・ブーラ、レスティ・ロケ、ボブ・デラペーニャ、マービン・メンドーサ、エド マーチン・クリストモ、飯島秀一
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、鈴木祥太、亀山颯太　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／松本八希、谷口直嗣、中谷純也、小原一樹、森山美里、廣澤暁恵、鄭載薫、森重孝太、遠藤龍一、村野徳晃、喜田晃平、佐藤太一　演出助手／豊田百香
製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀
作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ
絵コンテ／中島豊　演出／広嶋秀樹

第49話 脚本／村山功　原画／板岡錦、完甘美也子、原田節子、川村敏江、田中伸昭、青山充、志田直俊、冨田与四一、河野宏之、竹森由加、舘崎大、伊藤公崇、斉藤和也、津熊健徳、中澤勇一、黒柳賢治、西位輝実、松田千織、大内智美、旭プロダクション、Toei Phils.
背景／増田竜太郎、田中里緑、西田渚、陳炯年
CGディレクター／高橋友彦　デジタルアーティスト／松田範雄、長谷川太陽、宮澤孝介、海老沢大生、Frame Box、石神亮一、小林淳、高木則雄　演出助手／高戸谷一歩
製作進行／野本雄也　美術／いいだりえ
作画監督／宮本絵美子　絵コンテ／三塚雅人、大塚隆史
演出／三塚雅人

第50話 脚本／村山功　原画／星川信芳、高橋任治、永島英樹、青山充、福島史士、飯島秀一、藤原未来夫、清水隆正、真中孝之、黒柳賢治、爲我井克美、会津五月、佐藤友子、松浦仁美、月乃むあ、野津美智子、完甘美也子、大内智美、北田美弥子、旭プロダクション、エー・ライン　背景／増田竜太郎、デザインオフィス・メカマン、石原信明、上原里香、志賀友香、亀山颯太　CGディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／関祖輝、中山美緒、渡邉亮太、山崎浩司、中村有希恵、許祖真、佐々木果南、野本有紀、坪川尚史、赤瀬平、鄭丁植、覃彦波　演出助手／三上雅人　製作進行／堀越圭文
美術／田中美紀　作画監督／爲我井克美　演出／三上雅人

Gakken Mook

魔法つかいプリキュア! オフィシャルコンプリートブック

MAHO GIRLS PRECURE!

2017年4月1日　第1刷発行

発 行 人　三木浩也
編 集 人　水谷隆介
企画編集　馬渕悠
発 行 所　株式会社 学研プラス
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印 刷 所　凸版印刷株式会社

編　　集　水野二千翔

編集・執筆　野下奈生(アイプランニング)
宮村妙子(アイプランニング)
草刈勲

デザイン　坂井容美(CUIR WORKS)
小西美穂(CUIR WORKS)

撮　　影　高旗弘之

カバー＆表紙イラスト
原画／宮本絵美子

製作協力　東映アニメーション株式会社
東映株式会社

Staff プロデューサー／櫻月幹夫(ABC)、遠藤里紗(ADK)、内藤圭祐
シリーズディレクター／三塚雅人　シリーズ構成／村山功　音楽／高木洋
製作担当／山崎尊宗　美術デザイン／増田竜太郎　色彩設計／佐久間ヨシ子
キャラクターデザイン／宮本絵美子
Cast キュアミラクル・朝日奈みらい／高橋李依
キュアマジカル・十六夜リコ／堀江由衣　モフルン／齋藤彩夏
キュアフェリーチェ・花海ことは／早見沙織　ほか

パッケージ情報

Blu-ray ／ **vol.3まで発売中**(全4巻)
vol.4は2017年5月17日発売

●各12話収録(vol.4は14話収録)　●発売元：マーベラス

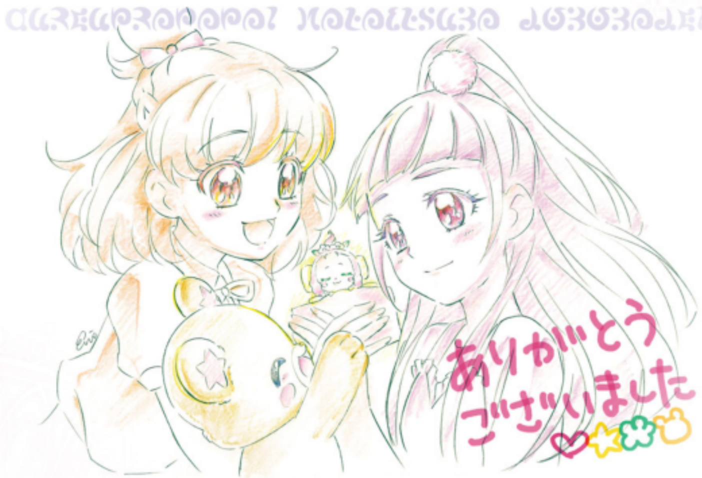


DVD ／ **vol.12まで発売中**(全16巻)
vol.13～14は2017年4月19日、
vol.15～16は2017年5月17日発売

●各3話収録(vol.15・16は各4話収録)　●発売元：マーベラス






ありがとうございました

Gakken Mook
魔法つかいプリキュア！
オフィシャルコンプリートブック　電子版

2023年5月　version1.0発行

発行人　村田剛
編集人　村田剛
企画編集　馬渕悠

発行　株式会社 Gakken
〒141-8416　東京都品川区西五反田2-11-8

【お問い合わせ】https://ebook.gakken.jp/contact/（電子出版専用）

学研グループの書籍·雑誌についての新刊情報·詳細情報は、下記をご覧ください。
学研出版サイト https://hon.gakken.jp/

※本商品に記載している情報は、紙版の発売当時のものです。
※キャストページなど、一部のページで紙版と異なる写真を使用しています。